

拾遺愚草
— 藤原定家自筆本による —
水垣久校訂

やまとうたeボックス



拾遺愚草 — 藤原定家自筆本による —

目次

凡例	2
拾遺愚草上	7
拾遺愚草中	362
拾遺愚草下	515
異体字一覧	800
あとがき	801

凡例

- ・ 本書は、藤原定家の家集『拾遺愚草』（員外を除く）の自筆本文を、なるべく元の姿を保ちつつ、読みやすいかたちで電子書籍化して提供することを目的としたものである。

- ・ 定家自筆本『拾遺愚草』影印版（朝日新聞社刊『冷泉家時雨亭叢書拾遺愚草』上中下）を底本とした。

- ・ 底本の原本は『拾遺愚草』の正本とも言うべき定家自筆本であるため、これに全面的に遵ったが、明らかな誤りと認められる場合のみ、名古屋大学附属図書館神宮皇学館文庫本『拾遺愚草』を参

照して校訂した（同本は名古屋大学附属図書館のウェブサイトにおいてPDF文書として公開されている）。

すなわち自筆本をそのまま翻刻したテキストではないので、注意されたい。

- ・ 仮名遣、送り仮名、繰り返し記号などは、すべて底本に遵った。
- ・ 漢字は底本において正字・略字が混淆しているが、本編においては可能な限り正字（いわゆる旧字体）を用いることとした。
- ・ 異体字は、可能な限り底本に遵った。用いた異体字については巻末の「異体字一覧」を見られたい。
- ・ いわゆる変体仮名は原則として現行の平仮名に改めた。但し定家

が「お」「を」どちらにも読める仮名として用いたと考えられる「越」については底本のままとした（但し後人による押紙に拠った場合はこの限りでない。後述参照）。

・ 「山地」「こし地」「とを地」などの「地」、「山の葉（山の端の意）」の「葉」、「雲井」の「井」、「あをや木（青柳の意）」の「木」のように、仮名として遣われたのか漢字として遣われたのか、校訂者には決定し難い場合は、便宜上一括して変体仮名と見なすこととし、現行の平仮名に改めた。

・ 字下げや字の揃え方、字の大小などについても、なるべく底本に（あるいは筆者の意図に）忠実であることを心がけた。

・ 歌の第三句末で改行する点は底本に遵ったが、詞書・左注・割注

などの改行位置は必ずしも底本に遵っていない。

- ・底本の集付け（収録された勅撰和歌集の名の書き入れ）は、必ずしも正確でなく、勅撰集の略称も不統一であるが、底本のままとした。より正確で詳細な集付けは同じ校訂者による『新校拾遺愚草』（やまとうたeボックス）を見られたい。

- ・底本に添えられた押紙は底本と同じに扱ったが、「此哥或本にアリ」（2523 番歌）のような押紙筆者の注記は本文から除外した。なお、歌番号 2523・2578・（2589）・2589、及び 2600～（2613）の計二十八首は、後人の補になる押紙に記されており、定家筆とは認められないので注意されたい。

・ 歌の番号は『藤原定家全歌集』（冷泉為臣編、国書刊行会刊）によった。他人作の歌番号を括弧で括る点も同書に倣ったが、同書において定家作としている歌を他人作に改め、また逆に他人作としている歌を定家作に改めた場合がある。

拾遺愚草上

百首謠

初學

二見 圓位上人

大輔

閑居

早率 二度

花月

十題

哥合

院 初度

同千五百番

內大臣家 建保三年

內裏 名所

院 建保四年

關白左大臣家 貞永元

已上千五百首

初學百首

養和元年四月

詠百首和歌

侍従

春廿首

0001

いつる日のおなしひかりによもの海の

なみにもけふやはるはたつらむ

0002

あさかすみへたつるからにはるめくは

と山やふゆのとまりなるらむ

0003

うくひすのはつねをまつにさそはれて

はるけきのへにちよもへぬへし

0004

雪の内にいかておらましくくひすの

こゑこそむめのしるへなりけれ

0005

梅花こすゑをなへてふくかせに

そらさへにほふはるのあけほの

0006

なか／＼によもにゝほへるむめのはな

たつねそわふるよはこのもと

0007

はるさめのはれゆくそらに風ふけは

くもとゝもにもかへるかりかな

0008

春さめのしく／＼ふれはいなむしろ

庭にみたるゝあをやきのいと

0009

よしの山たか木のさくらさきそめて

いろたちまさるみねのしらくも

0010

花ゆへにはるはうき忝そおしまるゝ

おなし山ちにふみまとへとも

0011

いにしへの人に見せはやさくらはな

たれもさこそは思ひをきけめ

0012

あつさゆみはるは山ちもほとそなき

花のにほひをたつねいるとて

0013

年をへておなしこすゑにさく花の

なとためしなきにほひなるらむ

0014

みやこ邊はなへてにしきとなりにつけり

さくらをゝらぬ人しなけれは

0015

中／＼におしみもとめしわれならて

見る人もなきやとのさくらは

0016

風ならて心とをちれさくら花

うきふしにたにおもひをくへく

0017

はるの野にはなるゝこまは雪とのみ

ちりかふはなにひとやまとへる

0018

みなかみに花やちるらむよしの山

にほひをそふるたきのしらいと

0019

をしなへて峯のさくらやちりぬらむ

しろたへになるよもの山かせ

0020

うらみてもかひこそなけれゆくはるの
かへるかたをはそことしらねは

夏十首

0021

おしむにも心なるへきたもとさへ

はなのなこりはとまらさる覧

0022

如花によるのひかりをてらさせて

月にかはらぬたまかはのさと

0023

とゝめをきしうつりかならぬたちはなに

まつこひらるゝほとゝきすかな

0024

たちはなの花ちるかせにあらねとも

ふくにはかほるあやめくさ哉

0025

五月やみくらふの山のほとゝきす

ほのかなるねにゝる物そなき

0026

すきぬるをうらみはゝてし郭公

なきゆくかたにひともまつらむ

0027

さみたれにけふもくれぬるあすかゝは

いとゝふちせやかはりはつらん

0028

五月雨にみつなみまさるまこもくさ

みしかくてのみあくるなつのよ

0029

そま河やうきねになるゝいかたしは

なつのくれこそすゝしかるらめ

0030

夏の日のいる山みちをしるへにて
まつのこすゑに秋風そふく

秋廿首

0031

をしなへてかはるいろをはをきながら
秋をしらするおきのうはかせ

0032

うらみをやたちそへつらむたなはたの
あくれはかへるくもの衣に

0033

風ふけはえたもとをゝにをくつゆの
ちるさへおしき秋はきの花

0034

をみなへしつゆそこほるゝおきふしに
ちきりそめてし風やいろなる

0035

つゆふかきはきのしたはに月さえて
をしかなくなり秋の山さと

0036

月かけをむくらのかとにさしそへて

0037

勅撰

秋こそきたれとふ人はなし

あまのはらおもへはかはる色もなし

0038

秋こそ月のひかりなりけれ

あきの夜のかゝみと見ゆる月かけは

むかしのそらをうつすなりけり

0039

うきくものはるれはくもるなみた哉

月見るまゝのものかなしさに

0040

つゆの身はかりのやとりにきえぬとも

こよひの月のかけはわすれし

0041

心こそもろこしまてもあくかるれ

月は見ぬ舌のしるへならねと

0042

ふすところをてらす月にやたくへけむ

千さとのほかをはかる心は

0043

しほかまのうらの浪かせ月さえて

松こそ雪のたえまなりけれ

0044

秋の夜は雲ちをわくるかりかねの

あとかたもなく物そかなしき

0045

身にかへて秋やかなしきゝり／＼す

よな／＼こゑをゝしまさるらむ

0046

露なからおりやをかましきくの花

しもにかれては見るほともなし

0047

さきまさるくらゐの山の菊のはな

こきむらさきにいろそうつろふ

0048

もみちせぬときはの山にやとも哉

わすれて秋をよそにくらさむ

0049

もみちはゝうつるはかりにそめてけり

きのふの色を身にしめしかと

0050

ひゝきくるいりあひのかねもとたえぬ

けふ秋風はつきはてぬとて

冬十首

0051

はれくもるそらにそ冬もしりそむる

時雨は峯の紅葉のみかは

0052

千載

冬きてはひと夜ふたよをたまさゝの

はわけのしものところせきまで

0053

かすしらすしけるみ山のをつゝら

0054

ふゆのくるにはあらはれにけり

しくるゝもとをはかはらぬいたまより

0055

このはゝ月のもるにそありける

池水にやとりてさへそおしまるゝ

0056

をしのうきねにくもる月かけ

友千鳥なくさのはまのなみ風に

そらさえまさるありあけの月

0057

をとたえすあられふりをくさゝのはの

はらはぬそてをなにぬらすらむ

0058

ふみわくる道ともしらぬ雪の内に

けふりもたゆる冬の山さと

0059

花をまち月をゝしむとすくしきて

雪にそつもる年はしらるゝ

0060

つらゝゐるかけひの水はたえぬれと

おしむに年のとまらさるらむ

0061

戀廿首

如何せむ袖のしからみかけそむる

こゝろのうちをしる人そなき

0062

これやさはそらにみつなるこひならむ

思たつよりくゆるけふりよ

0063

そてのうへはひとりもみきもくちはてゝ

こひはしのはむかたなかりけり

0064

もろこしのよしのゝ山のゆめにたに

また見ぬこひにまとひぬるかな

0065

いかにしていかにしらせむともかくも

いはゝなへてのことはそかし

0066

日にそへてますたの池のつゝみかね

いひいつとてもぬるゝそて哉

0067

夢の内にそれとて見えしおもかけを

このよにいかて思あはせむ

0068

すまのうらのあまりもゝゆるおもひ哉
しほやくけふり人はなひかて

0069

あつさゆみまゆみつきゆみつきもせず
思われともなひく忝もなし

0070

ちつかまてたつるにしきゝいたつらに

0071

あはてくちなむ名こそおしけれ

0072

はかなくてすくるこの忝と思しは

たのめぬほとひかすなりけり

さ夜衣わかるゝそてにとゝめをきて

心そはてはうらやまれぬる

0073

きみかためいのちをさへもおしますは

さらにつらさをなけかさらまし

0074

むすひけむゝかしそつらきしたひもの

ひとよとけゝるなかのちきりを

0075

うしとてもたれにかとはむつれなくて

かはる心をさらはをしへよ

0076

つらきさへ君かためにそなけかるゝ

むくひにかゝるこひもこそすれ

0077

もろともになのさゝはらみちたえて

たゝふくかせのをとにきけとや

0078

思いてよすゑの松山すゑまでも

浪こさしとはちきらさりきや

0079

こひわたるさのゝふなはしかけたえて

人やりならぬねをのみそなく

0080

如何せむうきにつけてもつらきにも

思ひやむへき心ちこそせね

雑什首

神祇

0081

かすか山谷のふちなみたちかへり

花さくはるにあふよしもかな

0082

おもひのみおほはらのへにとしへぬる

まつことかなへ神のしるしに

釋教

0083

なかれきてちかつく水にしるき哉

まつひらくへきむねのはちすは

法師品

0084

うき忬にはうれへの雲のしけゝれは

人の心に月そかくるゝ

壽量品

0085

さためけるほとけのみちをしるへにて

今はうきよにまとはすも哉

神力品

0086

身にしめてかきをく法の花の色

ふかさあさゝはしる人もなし

藥王品

0087

きゝはつる花のみのりのすゑにこそ

さためをきける身ともしりぬれ 勸發品

無常

0088

なかめてもさためなき世のかなしきは

しくれにくもるありあけのそら

0089

水のうへに思なすこそはかなけれ

やかてきゆるをあはと見ながら

別

0090

千載

わかれても心へたつなたひ衣

いくへかさなる山ちなりとも

旅

0091

つく／＼とねさめてきけは浪まくら

またさよふかき松風のこゑ

0092

ゆきかへるゆめちをたのむよることに

いやとをさかる宮こかなしも

0093

たつたひに心ほそしやもしほやく

けふりはたひのいほりならねと

0094

ゆきかへりたひのそらにはねをそなく

くもゐのかりをよそに見しかと

0095

たひのそらをはすて山の月かけよ

すみなれてたになくさみやせし

祝

0096

きみか 舌は 峯にあさひのさしなから

てらす ひかりのかすをかそへよ

0097

わかき みのみよとこたへむ 舌中に

ちとせ やなにと人も たつねは

物名

さしくし 日かけ

0098

神山にいくよへぬらん さか木はの

ひさしくしめをゆひかけてける

0099

はんひ　したかさね

すか枕おもはむ人はかくもあらし

たかさねぬよにちりつもるらん

半臂字不可然初學已披露雖不可直改後學可存
とことはにひとすむとは　如此可詠

述懷

0100

みかさ山いかにたつねむしらゆきの

ふりにしあとはたえはてにけり

二見浦百首

文治二年圓位上人勸進之

詠百首和歌

侍從

春廿首

0101

よしの山かすめるそらをけさ見れは
年はひとよのへたてなりけり

0102

道たゆる山のかけはし雪きえて

0103

はるのくるにもあとは見えけり

なにとなく心そとまる山のはに

ことし見そむるみか月のかけ

0104

春きぬとかすむけしきをしるへにて

こすゑにつたふうくひすのこゑ

0105

雪きえてわかなつむのをこめてしも

かすみのいかてはるを見す覽

0106

かれはれし草のとさしのはかなさも

霞にかゝるはるの山さと

0107

風かほるをちの山ちの梅花

いろに見するはたにのした水

0108

むめの花したゆく水のかけ見れは

にほひはそてにまつうつりけり

0109

あさなきにゆきかふ舟のけしきまで

はるをうかふる浪のうへ哉

0110

をちこちのよものこすゑはさくらにて

はるかせかほるみよしのゝ山

0111

あをやきのかつら木山の花さかり

くもにゝしきをたちそかさぬる

0112

いまでもこれすきてもはるのおもかけは

花見るみちのはなのいろ／＼

0113

あらしやはさくよりちらす櫻花

すくるつらさは日かすなりけり

0114

おしましよさくら許の花もなし

ちるへきためのいろにもあるらん

0115

いしはしるたきこそけふもいとはるれ

ちりてもしはし花は見ましを

0116

千載

いつこにて風をも昔をもうらみまし

よしのゝおくも花はちるなり

0117

またきより花を見すてゝゆくかりや

かへりてはるのとまりをはしる

0118

花のちるゆくゑをたにもへたてつゝ

かすみのほかにすくるはるかな

0119

を山田の水のなかれをしるへにて

せきいるゝなへになくかはつ哉

0120

くれぬなりあすもはるとはたのまぬに
猶のこりけるとりのひとこゑ

夏十首

0121

ちりねたゝあなうのはなやさくからに

はるをへたつるかきねなりけり

0122

なへて昔にまたてを見はや郭公

さらはつらさにこゑやたつると

0123

あやめ草かほるのきはのゆふかせに
きく心ちする郭公哉

0124

うらめしやまたれ／＼てほとゝきす
それかあらぬかむらさめのそら

0125

さみたれのくものあなたをゆく月の

0126

あはれのこせとかほるたちはな

0127

夏ふかきさくらかしたに水せきて
心のほとを風に見えぬる

猶しはしさてやはあけむ夏のよの

いはこすなみに月はやとりて

0128

大井河をちのこすゑのあおはより

こゝろに見ゆる秋のいろ／＼

0129

つゝきたつせみのもろこゑはるかにて

こすゑも見えぬならのしたかけ

0130

なつそしる山井のし水たつねきて

おなしこかけにむすふちきりは

0131

秋廿首

ゆふまくれ秋のけしきになるまゝに

そてよりつゆはをきけるものを

わすれつるむかしを見つるゆめを又

0132

猶おとろかすおきのうはかせ

0133

これもこれうき世の色をあちきなく

秋のゝはらの花のうはつゆ

0134

あきのきて風のみたちしそらをたに

とふ人はなきやとのゆふきり

0135

新古今

見わたせは花も紅葉もなかりけり

うらのとまやの秋のゆふくれ

0136

秋といへは人の心にやとりきて

まつにたかはぬ月のかけ哉

0137

いつるよりてるつきかけのきよみかた

そらさへこほるなみのうへかな

0138

いとほしよ月にたなひくうきくもゝ

秋のけしきはそらに見えけり

0139

なかめしと思し物をあさちふに

風ふくやとの秋の夜の月

0140

秋のみそふけゆく月になかめして

おなしうき忝は思しれとも

0141

ありあけのひかりのみかは秋の夜の

月はこの忝に猶のこりけり

0142

くれてゆくかたみにのこる月にさへ

あらぬひかりをそふる秋哉

0143

ゆふやみになりぬとおもへはなか月の

月まつまゝにおしき秋かな

0144

おほかたの秋のけしきはくれはてゝ

たゝ山のはのありあけの月

0145

はつかりのくもゐのこゑははるかにて

あけかたちかきあまのかはきり

0146

新古今

山かつの身のためにうつ衣ゆへ

秋のあはれをてにまかすらん

0147

そこはかと心にそめぬしたくさも

かるれはよはるむしのこゑ／＼

0148

うつろはむまかきのきくはさきそめて

まついろかはるあさちはら哉

0149

神なひのみむろの山のいかならむ

しくれもてゆく秋のくれ哉

0150

たゝいまのゝはらをゝのかものと見て

こゝろつよくもかへる秋かな

冬十首

0151

神な月方もさためすちるもみち

けふこそ秋のかたみとも見め

0152

ふゆきてはいりえのあしのをかさね
しもをきそふるつるのけ衣

0153

霜さゆるあしたのはらのふゆかれに

ひとはなさけるやまとなてしこ

0154

しくれつるまやのゝきはのほとなきに

やかてさしいる月のかけ哉

0155

はれくもるおなしなかめのたのみに

しくれにたゆるをちのさと人

0156

物ことにあはれのこらぬみやまかな

おつるこのはもかるゝくさはも

0157

あさゆふのをとはしくれのならしはに
いつふりかはるあられなるらむ

0158

さひしけのふかきみ山の松はらや

0159

みねにもおにも雪はつもりて

0160

あとたえてゆきもいくよかふりぬらむ
おのゝえくちしいはのかけみち

0161

越しみつゝくれぬるとしをかねてより
いまいくたひとしる昔なりせは

戀十首

昔中よたかきいやしきなそへなく
なとありそめしおもひなるらん

0162

おもふとは見ゆらむものをゝのつから

しれかしよゐのゆめはかりたに

0163

このよゝりこかるゝこひにかつもえて

猶うとまれぬ心なりけり

0164

こひ／＼て思しほともえそなれぬ

たゝ時のまのあふなはかりは

0165

あまのはらそらゆく月のひかりかは

手にとるからにくものよそなる

0166

きみといへはおつるなみたにくらされて

こひしつらしとわくかたもなし

0167

戀はよし心つかからもなけくなり

0168

新古今

こはたかそへしおもかけそさは

あちきなくつらきあらしのこゑもうし

なとゆふくれにまちならひけむ

0169

千載

しかはかりちきりしなかもかはりける

この昔に人をたのみける哉

0170

ひたちおひのかこともいとゝまとはれて

こひこそみちのはてなかりけれ

述懷五首

0171

見しはみなむかしとかはる夢のうちに

おとろかれぬはこゝろなりけり

0172

千載

をのつからあればある昔になからへて

越しむと人に見えぬへきかな

0173

見るもうしおもふもくるしかすならて

なといにしへをしのひそめけむ

0174

ありはてぬいのちをさそとしりなから

はかなくも昔をあけくらす哉

0175

月のいり秋のくるゝをゝしみても
にしにはわきてしたふ心そ

無常五首

0176

まほろしよゆめともいはし忝中は

かくてきゝ見るはかなさそこれ

0177

をしなへて忝はかりそめの草枕

むすふたもとにきゆるしらつゆ

0178

忝中はたゝかけやとすますかゝみ

見るをありともたのむへきかは

0179

あすはこむまでゝふみちも人の忝の

なかきわかれにならぬものかは

0180

ひとしれぬ人の心のかねことも
かはれはかはるこのよなりけり

雑

神祇五首

0181

さやかなる月日のかけにあたりても
あまてる神をたのむはかりそ

0182

なか／＼にさしてもいはしみかさ山
思心は神もしるらむ

0183

きくことにたのむ心そすみまさる
かものやしろのみたらしのこゑ

0184

うきこともなくさむみちのしるへとや

卉をすみよしとあまくたりけむ

0185

いかならむみわの山もとゝしふりて

すきゆく秋のくれかたのそら

暁

0186

しのゝめよゝもの草葉もしほるまで

いかにちきりてつゆのをくらん

夕

0187

そこはかと見えぬ山ちのゆふけふり

たつにそひとのすみかともしる

夜

0188

むかし思ねさめのそらにすきゝけん
ゆくゑもしらぬ月のひかりの

山家

0189

山ふかき竹のあみとに風さえて
いくよたえぬるゆめちなるらん

田家

0190

しきのたつ秋の山田のかりまくら
たかすることそ心ならては

0191

山

あけぬとも猶おもかけにたつた山
こひしかるへき夜はのそら哉

0192

河

よそにてもそてこそぬるれみなれさお
猶さしかへるうちのかはをさ

0193

新古今

別

わするなよやとるたもとはかはるとも
かたみにしほるよはの月かけ

旅

0194

月よするうらはの浪をふもとにて

まつそてぬらすみねの松風

0195

ふるさとをへたてぬ峯のなかめにも

こえこしくもそせきはすへける

楊貴妃

0196

みかきをくたまのすみかもそてぬれて

つゆときえにしへのそかなしき

李夫人

0197

ほのかなるけふりはたくふほともなし

なれしくもゐにたちかへれとも

0198

王昭君

うつすともくもりあらしとたのみこし
かゝみのかけのまつゝらき哉

上陽人

0199

しらさりきちりもはらはぬとこのうへに
ひとりよはひのつもるへしとは

陵園妾

0200

なれきにしそらのひかりのこひしさに
ひとりしほるゝきくのうはつゆ

皇后宮大輔百首

文治三年春詠送之

詠百首和謔

侍從

春十五首

0201

もろひとの袖をつらぬるむらさきの

庭にやはるもたちはそむ覽

0202

春きぬと霞は色に見すれとも

としをこむるはむめのはつ花

0203

峯の松たにのふるすに雪きえて

あさ日とゝもにいづるうくひす

0204

むめの花にほひのいろはなけれども

かすめるまゝをゆくゑとそ見る

0205

いろまさる松のみとりのひとしほに

はるのひかすのふかさをそしる

0206

あさみとりつゆぬきみたる春さめに

したさへひかるたまやなき哉

0207

秋きりをわけしかりかねたちかへり

かすみにきゆるあけほのゝそら

0208

しるからむこれそゝれとはいはすとも

花のみやこのはるのけしきは

0209

白雲とまかふさくらにさそはれて

心そかゝる山のはことに

0210

霞とも花ともわかすゝかはらや

ふしみのさとのはるのあけほの

0211

雪とちるひらのたかねの櫻花

猶ふきかへせしかのうらかせ

0212

いかにしてしつ心なくちる花の

のとけきはるのいろと見ゆらむ

0213

こゝのへのくものうへとはさくらはな

ちりしく春の名にこそありけれ

0214

ふりにける庭のこけちに春くれて

ゆくゑもしらぬ花のしらゆき

0215

梓弓いる日をいかてひきとめむ

さてもやをしてはるのかへると

0216

夏十首

いつしかとけふぬく袖よ花の色の

うつれはかはる心なりけり

0217

あたらしやしつかゝきねをかりそめに

へたつはかりのやへのうの花

0218

そらもそらなかてもやましゆふくれを

さもわひさするほとゝきす哉

0219

なこりたにしはしなあけそ郭公

なきつる夜はのそらのうきくも

0220

五月雨のをやまぬそらそもしほやく

うらのけふりのはれまなりける

0221

庭たつみかきほもたへぬさみたれは

まきのとくちにかはつなくなり

0222

あちさえのしたはにすたくほたるをは

よひらのかすのそふかとそ見る

0223

紅のつゆにあさひをうつしもて

あたりまてゝるなてしこの花

0224

浪風のこゑにも夏はわすれくさ

日かすをそつむすみよしのはま

0225

みそき河からぬあさちのすゑをさへ

みなひとかたに風そなひかす

秋十五首

0226

あきのいろをしらせそむとやみか月の

ひかりをみかくはきのしたつゆ

0227

わすれ水たえま／＼のかけ見れは

むらこにうつるはきか花すり

0228

ゆふされはすきにし秋のあはれさへ

さらに身にしむ荻のうはかせ

0229

そてはさそ秋はこゝろにつゆやをく

風につけてもまつくたくらむ

0230

たつぬれは花のつゆのみこほれつゝ

野風にたくふまつむしの聲

0231

さゝなみやしかのうらちのあさきりに

まほにも見えぬおきのともふね

0232 續古
我のみにとゑにもしかのたつる哉

月はひかりに見せぬ秋かは

0233
まちおしむひまこそなけれ秋風の

雲ふきまかふよはの月かけ

0234 千載
如何せむさらてうき世はなくさます

たのみし月もなみたおちけり

0235
となせかはたまちるせゝの月を見て

心そ秋にうつりはてぬる

0236

山のはになこりとゝめぬかけよりも

人たのめなるありあけの月

0237

秋ふかきゝしのしらきく風ふけは

にほひはそらのものにそありける

0238

さひしさはをきそへてけりはきのえの

秋のすゑはにまよふはつしも

0239

いろ／＼に紅葉をそむる衣手も

あきのくれゆくつまと見ゆらむ

0240

くれてゆく秋も山ちの見えぬまで

ちりかひくもれみねのもみちは

冬十首

0241

さためなきしくれのくものたえま哉

さてやもみちのうすくこからむ

0242

ふゆきては野邊のかりねの草枕

くるれはしもやまつむすふらん

0243

たひねする夢ちはたえぬすまのせき

かよふちとりのあかつきのこゑ

0244

ふりしきしこのはの庭にいつなれて

あられまちとるをとをつくらむ

0245

日かけくさくもりなき卉のためしとや

とよのあかりにかさしそめけん

0246

神かきやしもをくまゝにうちしめり

月かけやとる山あゐのそて

0247

ふる雪にさてもとまらぬみかりのを

はなの衣のまつかへるらん

0248

つもりける雪のふかさもしらさりつ

まきのとあくるあけほのゝそら

0249

をちかたやはるけきみちにゆきつもり

まつよかさなるうちのはしひめ

0250

年の内にはかなくかはる事もみな
くれぬるけふそおとろかれぬる

忍戀

0251

わかこひよきみにもはてはしのひけり
なにをはしめと思そめけむ

0252

みをつくしゝのふなみたのみこもりに
この舌をかくてくちやはてなん

0253

いかならんふしにさそともしらせまし
またねもたてぬよはのふえたけ

0254

事つてむ人の心もあやうさに

ふみたにも見ぬあさむつのはし

0255

袖のうへにさもせきかへすなみた哉

人の名をさへくたしはてしと

0256

おりたちてかけをも見はやわたり河

しつまむそこのおなしふかさを

0257

あらはれむそのにしきゝはさもあらはあれ

きみかためてふ名をしたてすは

0258

あしかきのひとめひまなきまちかさを

わけてつたふるまほろしも哉

0259

みたれしとかくてたえなむたまのをよ

なかきうらみのいつかさむへき

0260

續古

こひわひぬ心のおくのしのふ山

つゆもしくれもいろに見せしと

逢不遇戀

0261

あけぬとてわかれしそらにまさりけり

つらきうらみにかへるこひちは

0262

年月はをのかさま／＼つもるとも

わするへしとはちきりやはせし

0263

なかくしもむすはさりけるちきりゆへ

なにあけまきのよりあひにけん

0264

かきなかすたゝそのふてのあとながら

かはるこゝろのほとは見えけり

0265

忝とゝもにしのふなけきのなくさめは

わすらるゝ名のたゝぬはかりや

0266

猶そうきこの忝にきゝしことのはゝ

かはるもゝとのちきりとおもへと

0267

うきを猶したふ心のよはらぬや

たゆるちきりのたのみなるらん

0268

わすれぬやさはわすれけるわか心

夢になせとそいひてわかれし

0269

うつるなりよしさてさらはなからへよ

さのみあたなるきみかなもおし

0270

たひのそらしらぬかりねにたちわかれ

あしたのくものかたみたになし

寄名所戀十首

0271

霞しくよしのゝ山のさくら花

あかぬ心はかゝりそめにき

0272

いはてのみ年ふるこひをすゝかゝは
やそせのなみそゝてにみなきる

0273

いつかこの月日をすきのしるしとて

わかまつ人をみわの山もと

0274

きよみかたせきもるなみにことゝはむ

我よりすくるおもひありやと

0275

浪こさむ袖とはかねておもひにき

すゑの松山たつね見しより

0276

しほかまのうらみになれてたつけふり

からきおもひはわれひとりのみ

0277

たつね見よゝしさらしなの月ならは
なくさめかぬる心しるやと

0278

いかて猶わかにかけてむすひ見む

0279

たゝあすか井の影はかりたに

なみたやはもみちはなかつたつた河

0280

たきるとすれはかはるいろかな

ぬのひきのたきよりほかにぬきみたり

まなくたまちるとこのうへ哉

雑戀十首

0281

ほともなきおなしいのちをすてはてゝ
きみにかへつるうき身とも哉

0282

よな／＼は身もうきぬへしあしへより
みちくるしほのまさるおもひに

0283

續古

さもこそはみなとはそてのうへならめ
きみに心のまつさわくらむ

0284

君のみとわきてもいまはつらからす
かゝる物思忝をそうらむる

0285

時のまの袖のなかにもまきるやと
かよふ心に身をたくへはや

0286

うしみつときゝたにはてしまちえすは
たゝあけぬまのいのちともかな

0287

こひしさのまさるなけきは夢ならて

それとたに見ぬやみのうつゝよ

0288

新古今

すまのあまの袖にふきこすしほ風の
なるとはすれとてにもたまらす

0289

見てすきよ猶あさかほのつゆのまに
しはしもとめむあかぬひかりを

0290

あひ見ても猶ゆくゑなきおもひ哉
いのちやこひのかきりなるらん

旅戀五首

0291

こひわひぬ花ちる峯にやとからむ

かさねしそてやさてもまかふと

0292

夏山やゆくてにむすふし水にも

あかてわかれしふるさとをのみ

0293

草枕ちるもみちはのひまもかな

なれこし方をよそにたに見む

0294

かりにゆふいほりもゆきにうつもれて

たつねそわふるもすのくさくき

0295

わすれはや松風さむき浪のうへに
けふしのへともちきらぬものを

寄法文戀五首

人天交接兩得相見

0296

ひとの舌もそらもあひ見む時にもや
きみか心は猶へたつへき

我不愛身命

0297

あちきなやかみなきみちをゝしむかは
いのちをすてむこひの山へよ

0298

又如淨明鏡

法にすむ心に身をもみかゝはや
さてもこひしきかけや見ゆると

如渡得船

0299

きみをゝきてまつもひさしきわたし舟
のりうる人のちきりしれとや

又如一眼之龜値浮木孔

0300

たとふなる浪ちのかめのうきゝかは
あはてもいくよしほれきぬらん

閑居百首

文治三年冬與越中侍從詠之

詠百首和歌

侍從

春廿首

0301

けふは又あまつやしろのさか木はも

はるのひかけをさしやそふらん

0302

今よりのけしきにはるはこめてけり

かすみもはてぬあけほのゝそら

0303

うくひすとなきつるとりやはるきぬと

めくむわかなもひとにしらする

0304

ふりつもる色よりほかのにほひもて

ゆきをはむめのうつむなりけり

0305

いろ見えて春にうつろふ心哉

やみはあやなきむめのにほひに

0306

雪きゆるかた山かけのあおみとり

いはねのこけもはるは見せけり

0307

ちきりをけたまゝくゝすに風ふかは

うらみもはてしかへるかりかね

0308

春さめよこのはみたれしむらしくれ

それもまきるゝ方はありけり

0309

年ふれと心の春はよそなから

なかめなれぬるあけほのゝそら

0310

しはしとていてこし庭もあれにけり

よもきのかれはすみれましりに

0311

山さとのまかきのはるのほとなきに

わらひ許やおりはしるらむ

0312

月かけのあはれをつくすはるの夜に

のこりおほくもかすむそら哉

0313

はるのきてあひ見むことはいのちそと

思し花をゝしみつるかな

0314

おもしろくさくらさきけるこの春哉

さもこそ月のそらにすむとも

0315

さくと見し花のこすゑはほのかにて

霞そにほふゆふくれのそら

0316

雲のうへのかすみにこむるさくら花

又たちならふ色を見ぬ哉

0317

たつねはやしのふのおくの櫻花

風にしられぬ色やのこると

0318

ちる花をみよのほとけにいのりても

かきる日かすのとまらましかは

0319

花さかぬわかみやま木のつれ／＼と

いくとせすきぬみよのはるかせ

0320

ものことにいろはかはらておしまるゝ

はるは心のわかれなりけり

夏十五首

0321

春なつのをのかきぬ／＼ぬきかへて

かさねしそてを猶おしむ哉

0322

しかりとてけふやはなのるほとゝきす

まつはるくれてうらめしの昔や

0323

なにとなくすきにしはるそしたはるゝ

ふちつゝしさく山のほそみち

0324

如何せむひのくま河のほとゝきす

たゝひとこゑのかけもとまらす

0325

たちはなに風ふきかほるくもりよを

すさひになのる郭公哉

0326

ふるさとは庭もまかきもこけむして

花たちはなの花そちりける

0327

さ月やみそらやはかほる年をへて

のきのあやめの風のまきれに

0328

山さとのゝきはのこすゑくもこえて

あまりなとちそ五月雨のそら

0329

うちもねすくるれはいそくうかひ舟

しつまぬよもやくるしかるらむ

0330

いかならむしけみかそこにともしゝて

しかまちわふるほとひさしさ

0331

もゝしきのたまのみきりのみかは水

まかふほたるもひかりそへけり

0332

やへむくらしけるまかきのしたつゆに

しほれもはてぬなてしこの花

0333

かけきよき池のはちすに風すきて

あはれすゝしきゆふまくれ哉

0334

松風のひゝきもいろもひとつにて

みとりにおつるたにかはの水

0335

なつふかきのへをまかきにこめをきて

きりまのつゆのいろをまつ哉

秋廿首

0336

ふくかせにのきはのおきはこゑたてつ

秋よりほかにとふ人はなし

0337

草のはらをさゝかすゑもつゆふかし

をのかさま／＼秋たちぬとて

0338

蟲のねにはかなきつゆのむすほゝれ

ところもわかぬ秋のゆふくれ

0339

夜をかさね身にしみまさるあらし哉

松のこすゑに秋やすくらん

0340

秋ふかき木々のこすゑにやとかりて

みやこにかよふ山おろしの風

0341

ほの／＼とわかすむ方はきりこめて

あしやのさとに秋風そふく

0342

秋きぬと手ならしそめしはしたかも

すゑのにすゝのこゑならすなり

0343

うつらなくゆふへのそらをなこりにて

野となりにけりふかくさのさと

0344

夢にたにつまにはあはぬさをしかの

思たえぬるあけほのゝこゑ

0345

まとろむと思もはてぬ夢ちより

うつゝにつゝくはつかりのこゑ

0346

くまなさはまちこしことそ秋の夜の

月よりのちのなくさめも哉

0347

ひさかたのくもゐをはらふこからしに

うたてもすめるよはの月哉

0348

ゆくゑなきそらに心のかよふ哉

月すむ秋のくものかけはし

0349

いろかはるあさちかすゑのしらつゆに

猶かけやとすありあけの月

0350

わかおもふ人すむやとのうすもみち

きりのたえまに見てやすきなん

0351

うつろひぬ心の花はしらきくの

しもをくいろをかつうらみても

0352

龍田山紅葉ふみわけたつぬれは

ゆふつけとりのこゑのみそする

0353

みよしのも花見しはるのけしきかは

しくるゝ秋のゆふくれのそら

0354

あちきなく心に秋はとまりゐて

なかむるのへのしもかれぬらむ

0355

ゆく秋のしくれもはてぬゆふまくれ

なにゝわくへきかたみなるらん

冬十五首

0356

かくしつゝことしもくれぬと思より

まつなけかるゝ冬はきにけり

0357

いまよりはいつれのさとにやとからむ

このはしくれぬ山かけもなし

0358

風ふけはやかてはれのくうきくもの

又いつかたにうちしくるらむ

0359

山さとはわけいるそてのうへをたに

はらひもあへすちるこのは哉

0360

をの山やゝくすみかまのけふりにそ

ふゆたちぬとはそらに見えける

續後

0361 あられふるしつかさゝやよそよさらに

ひとよはかりのゆめをやは見る

0362 さひしきは霜こそゆきにまさりけれ

峯のこすゑのあけほのゝそら

0363 しもふかきさわへのあしになくつるの

こゑもうらむるあけくれのそら

0364 うらやまし時をわすれぬはつ雪よ

わかまつことそ月日ふれとも

0365 いかにせむゆきさへけさはふりにけり

さゝわけしのゝ秋のかよひち

0366

山ふかきまきのはしのく雪を見て

しはしはすまむ人とはすとも

0367

續後

浦風やとはに浪こすはまゝつの

ねにあらはれてなくちとり哉

0368

ふる袖の山あゐのいろも年つみて

身もしほれぬる心ちこそすれ

0369

身につもる年をは雪のいろに見て

かすそふくれそ物はかなしき

0370

春秋のあかぬなこりを取りそへて

さなからおしき年のくれ哉

戀十首

0371

あさましやむなしきそらにゆふしめの

かけてもいかゝ人はうらみむ

0372

たくふへきむろのやしまをそれとたに

しらせぬそらのやへかすみ哉

0373

さはかりに心のほとを見せそめし

たよりもつらきなけきをそする

0374

わすられぬ人をいつことたつねても

なれしかことのあるよなりせは

0375

うくつらき人をも身をもよしゝらし

たゝ時のまのあふことも哉

0376

いかにせむあふよをまさるなけきにて

又それならぬなくさめはなし

0377

今そしるあかぬわかれのなみた河

身をなけはつるこひのふちとも

0378

しきたへの枕なかるゝとこのうへに

せきとめかたく人そこひしき

0379 新古今
かへるさのものとや人のなかむらん

まつよなからのありあけの月

0380 ちきらすよ心に秋はたつた河

わたるもみちのなかたえむとは

述懷五首

0381 むれてゐしおなしなきさのともつるに

わか身ひとつのなとをくるらん

0382 こす浪ののりをひろふはまのいしの

と越とてのちも三とせすくしつ

0383

をしなへてをよはぬ枝の花ならば

よそにみかさの山もうからし

0384

影きよきくもゐの月をなかめつゝ

さてもへぬへきこの舌はかりを

0385

これも又おもふにたかふこゝろ哉

すてすはうきをなけくへきかは

雑十五首

0386

たのむ哉かすかの山のみねつゝき

かけものときき松のむらたち

0387

あとたえてそなたとたのむ道もなし

みなみのきしのしるへならては

0388

しか許かたきみのりのすゑにあひて

あはれこのよとまつおもふ哉

0389

花の春紅葉の秋とあくかれて

こゝろのはてや昔にはとまらん

0390

昔中を思ひのきはの忍草

いくよのやとゝあれかはてなむ

0391

さきのゐる池のみきはに松ふりて

みやこのほかの心ちこそすれ

0392

ゆきはる時につけてはをのつから

あはれを見する山のかけかな

0393

たきのをと峯のあらしもひとつにて

うちあらはなるしはのかき哉

0394

さとひたるいぬのこゑにそきこえつる

竹よりおくの人のいゑるは

0395

菊かれてとひかふてうの見えぬ哉

さきちる花やいのちなりけん

0396

さかのほる波のいくへにしほれけむ

あまのかはらの秋のはつ風

0397

くろかみはましりしゆきのいろなから
心のいろはかはりやはせし

0398

くさかれのゝはらのこまもうらふれて
しらぬさかひのなか月のそら

0399

つてにきくちきりもかなしあひおもふ
こすゑのをしのよな／＼のこゑ

0400

いか許ふかき心のそこを見て
いくたの河に身のしつみけん

奉和無動寺法印早率露膽百首

文治五年春

詠百首和歌

侍從

春 此題同堀川院百首今略而不書之

0401

年くれしあはれをそらのいろなから

いかに見すらんはるのあけほの

0402

なにゆへにはつねのけふのこ松はら

はるのまとゐをちきりそめけん

0403

たちかくすよそめはゝるのかすみにて

ゆきにそこもるおくの山さと

0404

うくひすのやとしめそむるくれ竹に

またふしなれぬわかねなくなり

0405

いさけふはあすのはるさめまたすとも

野さはのわかな見てもかへらん

0406

ふみしたくをとろかしたにしみいりて

うつもれかはるはるのゆきかな

0407

こそもこれはるのにほひになりにけり

むめさくやとのあけくれのそら

0408

をそくときみとりのいとにしるき哉

はるくるかたの岸のあをやき

0409

いはそゝくし水もはるのこゑたてゝ

うちやいてつるたにのさわらひ

0410

いかゝせむくもゐのさくらなれ／＼て

うき身をさそと思はつとも

0411

春の夜をまとうつあめにふしわひて

我のみとりのこゑをまつ哉

0412

をちかたや花にいはえてゆくこまの

こゑもはるなるなかきひくらし

0413

春ふかみこしちにかりのかへる山

名こそかすみにかくれさりけれ

0414

おもひたつみちのしるへかよふことり

ふかき山邊に人さそふなり

0415

きなれたるこまにまかせむなはしろの

水に山ちはひきかへてけり

0416

はるさめのふるのゝみちのつほすみれ

つみてをゆかむそてはぬるとも

0417

せきちこえみやこゝひしきやつはしに

いとゝへたつるかきつはた哉

0418

おもふから猶うとまれぬふちの花

さくよりはるのくるゝならひに

0419

ちらすなよゐてのしからみせきかへし

いはぬいろなる山ふきの花

0420

春しらぬうき身ひとつにとまりけり

くれぬるくれをゝしむなけきは

夏

0421

如何せむひとへにかはる袖のうへに

かさねておしき花のわかれを

0422

秋冬のあはれしらするうの花よ

月にもにたりゆきかとも見ゆ

0423

年をへて神もみあれのあふひくさ

かけてかゝらむ身とはいのらす

0424

あつまやのひさしうらめしほとゝきす

まつよひすくるむらさめのこゑ

0425

はるたちし年もさ月のけふきぬと

くもらぬそらにあやめふくなり

0426

とるなへのはやく月日はすきにけり

そよきし風のをともほとなく

0427

夏衣たつたの山にともしすと

いく夜かさねてそてぬらすらん

新古今

0428 玉梓の道ゆき人のことつても

たえてほとふる五月雨のそら

0429 ふるさとの花橘になかめして

見ぬゆくすゑそはてはかなしき

0430 打なひく河そひ柳ふくかせに

まつみたるゝはほたるなりけり

0431 ひとはすむと許見ゆるかやり火の

けふりをたのむをちのしはかき

0432 この舌にもこのよの物と見えぬ哉

はちすのつゆにやとる月かけ

0433

ひむろ山まかせし水のさえぬれは

0434

なつのせかるゝかけにそありける

山かけのいはねのし水たちよれは

0435

心の内を人やくむらん

みそきしてとしをなかはとかそふれは

秋よりさきにもものそかなしき

𦵏

0436

みむろ山けふより秋のたつたひめ

いつれの木ゝのしたはそむらん

0437

たなはたのあかぬわかれのなみたにや
秋しらつゆのをきはしめけん

0438

さきにけり野へわけそむるよそめより
むしのね見する秋はきの花

0439

をみなへしなひくけしきや秋風の
わきて身にしむいろとなるらん

0440

しのふ山すそのゝすゝきいかはかり
秋のさかりを思ひわふらん

0441

たつぬれは庭のかるかやあともなく
ひとやふりにしあれはてにけり

0442

ふちはかまあらぬくさはもかほるまで

ゆふつゆしめるのへの秋風

0443

こほれぬるつゆをはそてにやとしをきて

おきのはむすふ秋のゆふかせ

0444

草かれのあしたのはらに風すきて

さえゆくそらにはつかりのなく

0445

しかのねはつたふるをちのあはれにて

やとのけしきはわれのみや見む

0446

かへるさはしほるたものつゆそひて

わけつる野へに夜はふけにけり

0447

秋ふかくきりたつまゝのあけほのは
おもふそなたのそらをたに見す

0448

されはこそとはしと思しふるさとを

さけるあさかほつゆもさなから

0449

たちつゝくきりはらのこまこゆれとも

をととはかくれぬせきのいはかと

0450

秋きても秋をくれぬとしらせても

いくたひ月の心つくしに

0451

しのはしよあはれもなれかあはれかは

秋をひゝきにうつから衣

0452

うらめしやよしなきむしのこゑにさへ

ひとわひさする秋のゆふくれ

0453

又もあらし花よりのちのおもかけに

さくさへおしき庭のむらきく

0454

そよや又山のはことにしくれして

よものこすゑは色かはるなり

0455

あちきなしうき舌はおなし舌中そ

秋はかきりに夜はふけぬとも

冬

0456

かきくらすこのはゝ道もなきものを

いかにわけてかふゆのきつらん

0457

月はさえをとはこのはにならはせて

しのひにすくるむらしくれ哉

0458

葉かへせぬ竹さへ色の見えぬまで

よことにしもをゝきわたすらん

0459

ふりそめしそらはゆきけになりはてぬ

人をもまたしふゆの山さと

0460

あられふり日さへあれゆくまきのやの

心もしらぬ山おろし哉

0461

こもり江のあしのしたはのうきしつみ

ちりうせぬよのあちきなの身や

0462

あはちしま千鳥とわたるこゑことに

いふかひもなくものそかなしき

0463

とけぬうへにかさねてこほるたに水に

さゆる夜ころのかすそ見えける

0464

はねかはすをしのうはけのしもふかく

きえぬちきりを見るそかなしき

0465

いかゝするあしろにひおのよる／＼は

風さへはやきうちのかはせを

0466

たちかへる山あゐのそてにしもさえて

あかつきふかきあさくらのこゑ

0467

かり衣はらふたもとのをもるまで

かたのゝはらにゆきはふりきぬ

0468

すみかまのあたりをぬるみたちのほる

けふりやはるはまつかすむらん

0469

あけかたのはひのしたなるうつみ火の

のこりすくなくゝるゝとし哉

0470

年くれぬかはらぬけふのそらことに

うきをかさぬる心ちのみして

戀

0471

これも又ちきりなるらむとはかりに

思そめつる身をおしむ哉

0472

おもひねのゆめにもいたくなれぬれは
しのひもあへすものそかなしき

0473

續拾

名とり河いかにせんともまたしらす

おもへは人をうらみける哉

0474

あひ見てもいへはかなしきちきりかな

うつゝもおなしはるのよのゆめ

0475

わかれつるほともなく／＼まとはれて

たのめぬくれを猶いそく哉

0476

つらからすわか心にもしられにき

なれてもなれぬなけきせむとは

0477

たれゆへとさゝぬたひねのいほりたに

みやこの方はなめしものを

0478

さきたゝは人もあはれをかけて見よ

おもひにきえむそらのうきくも

0479

よしさらはあはれなかけそしのひわひ

身をこそすてめきみかなはおし

0480

身をしれはうらみしと思忝中を

ありふるまゝの心よはさよ

雑

0481

うかりけり物思ころのあかつきは

人をもとはむこの忝ならても

0482

松風のこすゑのいろはつれなくて

たえすおつるはなみたなりけり

0483

くれ竹のわかともはみなゝらへとも

ひとりよそなるはのはやし哉

0484

おく山のいはねのこけの杳とゝもに

色もかはらぬなけきをそする

0485

たらちねの心をしれはわかのうらや

夜ふかきつるのこゑそかなしき

0486

またしらぬ山のあなたにやとしめて

うき杳へたつるくもかとも見む

0487

はやせ河うかふみなはのきえかへり
ほとなきよをも猶なけく哉

0488

身のはてをこの舌はかりとしりてたに
はかなかるへきのへのけふりを

0489

くらへはやくよみかせきによる浪も

0490

物思そてにたちやまさると

0491

みのうきはくめちのはしもわたらねと
すゑもとおらぬみちまとひけり
おもふ人あらはいそかむふなてして
むしあけのせとは浪あらくとも

0492

みやことてしほらぬとてもならはぬを

なにをたひねのつゆとわくらん

0493

かへるさをちきるわかれをゝしむにも

つゐのあはれはしりぬへきよを

0494

山さとを今はかきりとたつぬとも

ひとかたならぬみちやまとはむ

0495

如何せむおくてのなるこひきかへし

猶おとろかぬかりそめのよを

0496

おもかけはたゝめのまへの心ちして

むかしとしのふうき昔なりけり

0497

ぬるたまの夢はうつゝにまさりけり

この昔にさむるまくらかはらて

0498

かつ見つゝ猶すてはてぬ身なりけり

いつかはかきりあすやのちの昔

0499

おもふとてかひなきよをはいかゝせむ

心はのこれなき身なりとも

0500

思ひやる心はきはもなかりけり

ちとせもあかぬきみかよのため

重奉和早率百首

文治五年三月

百首和歌 同題

春

0501

吉野山かすまぬ方のたに水も

うちいつるなみにはるはたつなり

0502

ねの日するのへのこまつのひき／＼に

うら山しくもはるにあふかな

0503

たつねきて秋みし山のおもかけに

あはれたちそふ春霞哉

0504

はるやとき谷のうくひすうちはふき

けふしらゆきのふるすいつなり

0505

もろともにてこし人のかたみ哉

色もかはらぬのへのわかなは

0506

心にもあらぬわかれのなこりかは

きえてもおしきはるの雪哉

0507

春の夜は月の桂もにほふらん

ひかりに梅の色はまかひぬ

0508

うへをきし昔を人に見せかほに

はるかになひくあをやきのいと

0509

わらひおるおなし山ちのゆきすりに

はるのみやすむいはのもと哉

0510

けふこすは庭にや春ののこらまし

こすゑうつろふ花のしたかせ

0511

はるも又かれし人めにまちわひぬ

草はゝしけるあめにつけても

0512

ひきかへつあしのはめくむなにはかた

うらわのそらもこまのけしきも

0513

これに見つこしちの秋もいかならん

よしのゝはるをかへるかりかね

0514

くもり夜の月のかけのみほのかにて

ゆく方しらぬよふことり哉

0515

おもふこそかへす／＼もさひしけれ

あら田のおものけふのはるさめ

0516

すみれつむ花そめ衣つゆをゝもみ

かへりてうつる月くさのいろ

0517

ふりにけりたれかみきりのかきつはた

なれのみはるの色ふかくして

0518

ゆく春をうらむらさきのふちの花

かへるたよりにそめやすつらん

0519

すきてゆくまそてにゝほふ山吹に

心をさへもわくるみち哉

0520

はるのけふすきゆく山にしほりして
心つからのかたみとも見む

夏

0521

ぬきかふるせみのは衣そてぬれて

はるのなこりをしのひねそなく

0522

いたひさしひさしくとはぬ山さとも

浪まに見ゆる夕花のころ

0523

あまの河おふともきかぬ物ゆへに

年にあふ日となとちきりけん

0524

郭公吉になき物と思ふとも

なかめやせまし夏のゆふくれ

0525

風ふけは夢の枕にあはすなり

しけきあやめのゝきのにほひを

0526

たねまきしむろのはやわせおいにけり

おりたつたこの雨もしみゝに

0527

ともしするしけみかそこのすり衣

そてのしのふもつゆやをくらん

0528

とはてこしよもきのかとのいかならむ

そらさへとつるさみたれのころ

0529

終夜花橘を吹風の

わかれかほなるあか月のそて

0530

夏蟲のひかりそゝよくなにはかた

あしのはわけにすくるうら風

0531

かやり火のけふりのあとや草枕

たちなんのへのかた見なるへき

0532

あさゆふにわかおもふかたのしるへせよ

くるれはむかふはちす葉のつゆ

0533

いとひつる衣手かるしひむろ山

ゆふへのゝちの木ゝのしたかせ

0534

よるひると人はこのころたつねきて

夏にしられぬやとのまし水

0535

みそきすとしはし人なすあさのはも
おもへはおなしかりそめのよを

秋

0536

けふといへはこすゑに秋の風たちて

したのなけきもいろかはるなり

0537

秋風やいかゝ身にしむあまの河

きみまつよひのうたゝねのどこ

0538

ちらはちれつゆわけゆかむはきはらや

ぬれてのゝちのはなのかたみに

0539

しのゝめにわかれしそてのつゆのいろを

よしなく見するをみなへし哉

0540

人もとへあれなんのちのむしのねも

うへをくすゝき秋したえすは

0541

あさまたきちくさの花もさてをきつ

たまぬくのへのかるかやのつゆ

0542

きりのまにひとえたおらんふちはかま

あかぬにほひやそてにうつると

0543

おきの葉にふきたつ風のとなひよ

そよ秋そかしおもひつること

0544

きりふかきと山のみねをなかめても

まつほとすきぬはつかりのこゑ

0545

わひ人のわかやとからの松風に

なけきくはゝるさをしかのこゑ

0546

終夜山のしづくにたちぬれて

花のうはきはつゆもかはかす

0547

したむせふうちのかはなみきりこめて

をちかた人のなかめわふらん

0548

あさかほよなにかほとなくうつろはむ

人の心の花もかはかり

0549

かそへこし秋のなかはをこよひそと

さやかに見するもち月のこま

0550

月きよみよものおほそらくもきえて

ちさとの秋をうつむしらゆき

0551

とけてねぬふしみのさとはなのみして

たれふかき夜に衣うつらん

0552

松蟲の聲たにつらきよな／＼を

はてはこすゑに風よはるなり

0553

ひとすちにたのみしもせすはるさめに

うへてしきくの花を見むとは

0554

龍田山やまのかよひちをしなへて

もみちをわくる秋のくれ哉

0555

をくれしとちきらぬ秋のわかれゆへ
ことはりなくもしほる袖かな

冬

0556

秋のみか風も心もとゝまらす

みなしもかれの冬の山さと

0557

かへり見るこすゑにくものかゝる哉

いてつるさとやいましくるらん

0558

をきそめておしみし菊の色を又

かへすもつらき冬の霜かな

0559

あられふるしかの山ちに風こえて

峯にふきまぐうらのさゝなみ

0560

秋なから猶なかめつる庭のおもの

かれはも見えすつもる雪哉

0561

こゑはせてなみよるあしのほすゑ哉

しほひの方に風やふくらん

0562

なかきよを思ひあかしのうら風に

なくねをそふる友千鳥哉

0563

大井河浪をゐせきにふきとめて

こほりは風のむすふなりけり

0564

よそへても見せはや人にをしかもの

さわくいり江のそこのおもひを

0565

夜をへては見るもはかなきあしろ木に

こしのみそらの風をまつ覽

0566

かをとめしさか木のこゑにさよふけて

身にしみはつるあかほしのそら

0567

とまるなよかりはのをのゝすり衣

ゆきのみたれにそらはきるとも

0568

をの山や見るたにさひしあさゆふに

たれすみかまのけふりたつらん

0569

うつみ火のひかりもはひにつきはてゝ

さひしくひゝくかねのをと哉

0570 續古
なからふるいのち許のかことにて

あまたすきぬるとしのくれ哉

戀

0571
のちの昔をかけてやこひむゆふたすき

それともわかぬ風のまきれに

0572
思ふとはきみにへたてゝさよ衣

なれぬなけきにとしそかさなる

0573
あひ見てのゝちの心をまつしれは

つれなしとたにえこそうらみね

0574

なにとこの見るともわかぬまほろしに

よそのなけきのちへまさるらん

0575

如何せむ夢よりほかに見しゆめの

こひにこひますけさのなみたを

0576

をのつから人も時のま思いては

それをこの忒の思いてにせん

0577

たひねするあらきはまへの浪のをとに

いとゝたちそふ人のおもかけ

0578

いか許ふかきけふりのそこならむ

月日とゝもにつもるおもひの

0579

よひ／＼はわすれてぬらんゆめにたに

なるとを見えよかよふたましひ

0580

きみよりも昔よりもつらきちきりこそ

身をかへつとも怨のこらめ

雑

0581

うらめしや別のみちにちきりをきて

なへてつゆをくあか月のそら

0582

草のいほの友とはいつかきゝなさむ

心の内に松かせのこゑ

0583

時わかぬまかきの竹のいろにしも

秋のあはれのふかく見ゆらん

0584

なれこしはきのふとおもふ人のあとも

こけふみわけてみちたとるなり

0585

人とはてみきりあれにし庭のおもに

きくもさひしきつるのひとこゑ

0586

如何せむそれもうき忝といとひいては

よしのゝ山もなき身なりけり

0587

いろはみなむなしき物をたつた河

もみちなかるゝ秋もひとゝき

0588

なにとなく見るよりものゝかなしきは

野中のいほのゆふくれのそら

0589

とまひさしものゝあはれのせきすへて
なみたはとめぬすまのうら風

0590

夜をこめてあさたつきりのひま／＼に
たえ／＼見ゆるせたのなかはし

0591

まちえたる日よりをみちのたのみにて
はるかにいつるなみのうへ哉

0592

露しけきさやのなか山なか／＼に
わすれてすくるみやことも哉

0593

くれてゆく春のかすみを猶こめて
へたつるをちにたちやわかれん

0594

いへゐしてまたかはかりもしらさりき

み山のさとのこからしのこゑ

0595

おきふしにねそなかれける霜さゆる

かり田のいほのしきのはねかき

0596

心うしこひしかなしとしのふとて

ふたゝひ見ゆるむかしなきよゝ

0597

うたゝねに草ひきむすふこともなく

はかなのはるのゆめのまくらや

0598

いつ我もふてのすさひはとまりゐて

又なき人のあとゝいはれむ

0599

おしまれぬうさにたへたる身ならすは

あはれすきにしむかしかたりを

0600

あまつそら月日のかけもしつかにて

ちよはくもゐにきみそかそへむ

花月百首

建久元年秋左大將家

詠百首和歌

權少將

花五十首

續後

0601

さくらはなさきにし日よりよしの山

そらもひとつにかほるしらくも

0602

あしひきの山のはことにさく花の

にほひにかすむはるのあけほの

0603

花さかりと山のはるのからにしき

かすみのたつもおしきころ哉

0604

かすみたつ峯の櫻のあさほらけ

紅くゝるあまのかはなみ

0605

さくら花ちらぬこすゑに風ふれて

てる日もかほるしかの山こえ

0606

花のゝちやへたつくもにそらとちて

はるにうつめるみよしのゝそこ

0607

さもあらはあれ花よりほかのなかめかは

かすみにくらすみよしのゝはる

0608

あくかれしゆきと月とのいろとめて

こすゑにかほるはるの山かけ

0609

よしの山霞ふきこすたに風の

ちらぬさくらの色さそふらん

0610

ふりきぬる雨もしつくもにほひけり

花よりはなにうつる山みち

0611

なかき日にあそふいとゆふしつかにて

そらにそ見ゆる花のさかりは

0612

もゝしきやたましく庭の櫻花

てらすあさひもひかりそひけり

0613

かさしもてくらすはる日のゝとけきに

ちよもへぬへき花のかけ哉

0614

宮人のそてにまかへるさくらはな

にほひもとめよはるのかたみに

0615

たおりもてゆきかふ人のけしきまで

花のにほひはみやこなりけり

0616

こきまする柳のいともむすほゝれ

みたれてにほふはなさくら哉

0617

雲の内雪のしたなる春のいろを

たれわかやとのうへと見るらん

0618

あけはてす夜のまの花にことゝへは

山のはしろくゝもそたなひく

0619

まきのとはのきはの花のかけなれは

ところも枕もはるのあけほの

0620

いか許のちもわすれぬつまならん

さくらになるゝやとのゆふくれ

0621

めかれせすいとゝさくらそおしまるゝ

うちもまきれぬはるの山さと

0622

やへむくらとちけるやとのかひもなし

ふるさとゝはぬ花にしあらねは

0623

竹のかき松のはしらはこけむせと

花のあるしそはるさそひける

0624

はなのふちさくらのそことたつぬれは

いはもる水のこゑそかはらぬ

0625

枝かはす松のみありしこすゑにて

くもと浪とにたとるはるかな

0626

そらは雪庭をは月のひかりとて

いつらに花のありかたつねん

0627

花のかはかほるはかりをゆくゑとて

風よりつらきゆふやみのそら

0628

思いるゆくゑは花のうへにして

こけにやとかる春のうたゝね

0629

すきかてにおらましものをさくら花

かへるよのまに風もこそふけ

0630

ちりまかふこのもとなからまどろめは

さくらにむすふはるのよのゆめ

0631

またなれぬ花のにほひにたひねして

こたちゆかしきはるのよのやみ

0632

たまほこのたよりに見つるさくら花

又はいつれのはるかあふへき

0633

山櫻いかなる花のちきりにて

かはかり人の思そめけむ

0634

時こそあれさらてはかゝるにほひかは

さくらもいかにはるをまちけん

0635

さくら花たおりもやらぬひとえたに

こすゑにのこる心をそしる

0636

山櫻心の色をたれ見てむ

いく畚の花のそこにやとらは

0637

のちもうし昔もつらし櫻花

うつろふそらのはるの山かせ

0638

こすゑよりほかなる花のおもかけに

ありしつらさのにたる風哉

0639

なにとなくうらみなれたるゆふへかな

やよひのそらの花のちるころ

0640

くれぬともはなちる峯のはるのそら

猶やとからむひと夜はかりも

0641

春風の浪こすそらになりけり

はなのみきはの峯のはまゝつ

0642

山かくれ風のしるへに見る花を

やかてさそふはたに河の水

0643

やまさくらまてともいはしちりぬとて

おもひますへき花しなけれは

0644

いかにして風のつらさをわすれなん

さくらにあらぬさくらたつねて

0645

櫻花思ふものからうとまれぬ

なくさめはてぬはるのちきりに

0646

わひつゝは花をうらむる春も哉

風のゆくゑに心まよはて

0647

花をおもふ心にやとるまくすはら

秋にもかへす風のをと哉

0648

ちりぬとてなとてさくらをうらみけん

0649

ちらすは見ましけふの庭かは

0650

あとたえしみきはの庭にはるくれて

こけもや花のしたにくちぬる

吹風もちるもおしむもとしふれと

ことはりしらぬ花のうへ哉

月五十首

0651

秋はきぬ月はこのまにもりそめて

をきところなきそてのつゆ哉

0652

さえのほる月のひかりにことそひて

秋のいろなるほしあひのそら

0653

これそこのまたれし秋のゆふへより

まつくもはれていつる月かけ

0654

かそふれは秋きてのちの月のいろを

おほめかしくもしほるそて哉

0655

秋といへはそらすむ月をちきりをきて

ひかりまちとるはきのしたつゆ

0656

秋をへて心にうかふ月かけを

さなからむすふやとのまし水

0657

松むしのこゑのまに／＼とめくれは

草葉の露に月そやとれる

0658

あかさりし山井のし水手にくめは

しつくも月のかけそやとれる

0659

深草のさとのまかきはあれはてゝ

野となる露に月そやとれる

0660

新古今

さむしろやまつ夜の秋の風ふけて

月をかたしく宇治の橋姫

0661

なにとなくすきこし秋のかすことに

のち見る月のあはれとそなる

0662

そのふしと思もわかぬなみた哉

月やはつらき秋もうからす

0663

あつまやのまやのあまりのつゆかけて

月のひかりもそてぬらしけり

0664

よもきふのまかきのむしのこゑわけて

月は秋ともたれかとふへき

0665

つきゆへにさゝすはしはしことゝはむ

しはのあみとよわれまたすとも

0666

庭のおもにうへをく秋のいろよりも

月にそやとの心見えける

0667

わけかたきむくらのやとのつゆのうへは
月のあはれもしくはものそなき

0668

關の戸をとりそらねにはかれとも

0669

ありあけの月は猶そさしける

0670

思やるみねのいはやのこけのうへに
たれかこよひの月を見るらん

0671

たつねきてきくたにさひしおく山の
月にさえたるまつかせのこゑ
つきかけは秋よりおくのしもをきて
こふかく見ゆる山のときは木

0672

山ふかみいはきりとおすたに河を

ひかりにせける秋のよの月

0673

秋の夜は月ともわかぬなかめゆへ

そてにこほりのかけそみちぬる

0674

見るゆめはおきのは風にとたえして

思もあへぬねやの月かけ

0675

なかむれは松よりにしになりにけり

かけはるかなるあけかたの月

0676

しのゝめは月もかはらぬわかれにて

くもらはくれのたのみなきかな

0677

月ゆへにあまりもつくす心哉

おもへはつらし秋のよのそら

0678
勅撰

あけは又秋のなかはもすきぬへし

かたふく月のおしきのみかは

0679

いくさとかつゆけきのへにやとかりし

ひかりともなふもち月のこま

0680

秋の夜のありあけの月の月かけは

この吉ならても猶やしのはむ

0681

いく秋とゆくゑもしらぬ神吉まで

たもとに見する月のそら哉

0682

月を思心にそへてしのはすは

0683

わすれもすへき昔なりけり

0684

とこのうへのひかりに月のむすひきて
やかてさえゆく秋のたまくら

0685

月きよみはねうちかはしとふかりの

こゑあはれなる秋風のそら

あくるそら入山のはをうらみつゝ

0686

續古

いくたひ月にももの思らん

袖のうへ枕のしたにやとりきて

いくとせなれぬ秋の夜の月

0687

さらしなは昔の月のひかりかは

たゝ秋風そをはすての山

0688

よものそらひとつひかりにみかゝれて

ならふものなき秋のよの月

0689

衣うつひゝきに月のかけふけて

みちゆき人のをともしこえす

0690

影さえてゝらすこしちの山人は

月にや秋をわすれはつらん

0691

あくかるゝ心はきわもなき物を

山のはちかき月のかけ哉

0692

わすれしよ月もあはれと思いてよ

わか身のゝちのゆくすゑの秋

0693

しかりとて月の心もまたしらす

おもへはうとき秋のねさめを

0694

峯のあらしうらの浪かせゆきさえて

みなしろたへの秋のよの月

0695

月きよみねられぬ夜しもゝろこしの

雲の夢まで見る心ちする

0696

今よりのこすゑの秋はふかくとも

月いつる峯は風のまに／＼

0697

つゆしくれたはのこらぬ山なれは

月も夜をへてもりまさりけり

0698

山のはのおもはむこともはつかしく

月よりほかの秋はなかめし

0699

あちきなく物思人の袖のうへに

晨明の月の夜をかさねては

0700

長月の月のありあけの時雨ゆへ

あすのもみちの色もうらめし

十題百首

建久二年冬左大將家

詠百首和哥

權少將

天部十首

0701

久方のくもゐはるかにいつる日の

けしきもしるきはるはきにけり

0702

いく秋のそらをひと夜につくしても

おもふにあまる月のかけかな

0703

すへらきのあまねきみよをそらに見て

ほしのやとりのかけもうこかす

0704

あまの河年の渡の秋かけて

さやかになりぬなつのよのやみ

0705

はかなしと見るほともなしいなつまの

ひかりにさむるうたゝねのゆめ

0706

こたへしないつもかはらぬ風のをとに

なれしむかしのゆくゑとふとも

0707

見すしらぬうつもれぬ名のあとやこれ

たなひきわたるゆふくれのくも

0708

けふくれぬあすさへふらむ雨にこそ

おもはむ人の心をも見め

0709

この日ころさえつる風にくもこりて

あられこほるゝ冬のゆふくれ

0710

かきくらすのきはのそらにかす見えて

なかめもあへすおつるしらゆき

地部十

0711

あともなしこけむすたにのおくのみち

いく昔へぬらんみよしのゝ山

0712

わたつうみによせてはかへるしきなみの

はしめもはてもしる人そなき

0713

うつなみのまなく時なきたまかしは

たま／＼見れはあかぬ色かも

0714

わきかへるいはせの浪に秋すきて

もみちになりぬ宇治の河風

0715

をしのゐるあしのかれまの雪氷

冬こそ池のさかりなりけれ

0716

わかなつむをちのさはへのあさみとり

霞のほかのはるのいろ哉

0717

秋はたゝいり江はかりのゆふへかは

月まつそらのまのゝうら浪

0718

月のさすせきやのかけのほとなきに

ひとよはあけぬすまのたひふし

0719

しるへなきをたえのはしにゆきまよひ

又いまさらの物やおもはむ

0720

かたるともか許人やしらさらん

宮木のゝへのゆふくれのいろ

居處十

0721

もゝしきやもるしらたまのあけかたに

またしもくらきかねのこゑ哉

0722

くまもなきゑしのたく火のかけそひて

月になれたる秋の宮人

0723

秋津しまおさむるかとのゝとけきに

つたふる北のふちなみのかけ

0724

やとことに心そ見ゆるまとゐする

花の宮このやよひきさらき

0725

むらすゝきうへけむあともふりにけり

くもゐをちかくまもるすみかに

0726

見なれぬるよとせをいかにしのふらん

かきるあかたのたちわかつて

0727

たひ枕いくたひゆめのさめぬらん

思あかしのむまや／＼と

0728

しはのとよ今はかきりとしめすとも

つゆけかるへき山のかけ哉

0729

露しものおくての山田かりねして

そてほしわふるいほのさむしろ

0730

いてゝこしみちのさゝはらしけりあひて

たれなかむらんふるさとの月

草十

0731

年の内はけふのみ時にあふひくさ

かさすみあれをかけてまつらし

0732

神舌よりちきりありてや山あるも

すれる衣の色となるらん

0733

さやかなるくもゐにかさす日かけくさ

とよのあかりのひかりませとや

0734

みちもせにしけるよもきふうちなひき

人かけもせぬ秋風そ吹

0735

霜むすふおはなかもとのおもひ草

きえなむのちやいろにいつへき

0736

あれにけりのきのしたくさ葉をしけみ

むかしゝのふのすゑのしらつゆ

0737

我もおもふうらはまゆふいくへかは

かさねて人をかつたのめとも

0738

さくらあさをふのしたつゆしたにのみ

わけてくちぬるよな／＼のそて

0739

みちしはやまするかやふのをのれのみ

うちふく風にみたれてそふる

0740

なかれてもおもふせによるわかせりの

ねにあらはれてこひんとや見し

木十

0741

草も木もひとつにおつるしものうちに

はかへぬ松のいろそのこれる

0742

いその神ふるのかみすきふりぬとも

ときはかきはのかけはかはらし

0743

まきもくやひはらのしけみかきわけて

むかしのあとをたつねてそ見る

0744

けふ見れはゆみきるほとになりにけり

うへしをかへのつきのかたえた

0745

たひ枕しゐのしたはをおりかけて

そてもいほりもひとつゆふつゆ

0746

月もいさまきのはふかき山のかけ

雨そつたふるしつくをも見し

0747

かゝみ山みかきそへたるたまつはき
影もくもらぬはるのそら哉

0748

ゆふまくれ風ふきすさふきりのはに
そよいまさらの秋にはあらねと

0749

しくれゆくはしのたちえに風こえて
心いろつく秋の山さと

0750

こすゑより冬の山かせはらふらし
もとつ葉のこるならのはかしは

鳥十

0751

しのふ山こさちのおくにかふわしの
そのは許や人にしらるゝ

0752

あつさゆみすゑのはらのにひきすへて

とかへるたかをけふそあはする

0753

風たちてさはへにかけるはやふさの

はやくも秋のけしきなるかな

0754

かれ野やくけふりのしたにたつきゝす

むせふおもひや猶まさるらん

0755

ゆふたちのくもまの日かけはれそめて

山のこなたをわたるしらさき

0756

なるこひく田のもの風になひきつゝ

なみよるくれのむらすゝめ哉

0757

深草のさとのゆふかせかよひきて

ふしみのをのうつらなくなり

0758

さらぬたにしもかれはつるくさのはを

まつうちはらふにはたゝき哉

0759

人とはぬ冬の山ちのさひしさよ

かきねのそわにしとゝおりゐて

0760

つはくらめあはれに見けるためし哉

かはるちきりはならひなる昔に

獸十

0761

いつしかと春のけしきにひきかへて

くもゐの庭にいつるあおむま

0762

霜ふかくおくるわかれのをくるまに

あやなくつらきうしの越と哉

0763

おちつもるこのはもいくへつもるらん

ふすゐのかるもかきもはらはて

0764

つゆをまつうのけのいかにしおる覽

月のかつらのかけをたのみて

0765

山さとは人のかよへるあともなし

やともるいぬのこゑはかりして

0766

花さかりむなしき山になくさるの

心しらるゝはるの月かけ

0767

思ふにはをくれむものかあらくまの
すむてふ山のしはしなりとも

0768

つかふるきゝつねのかれる色よりも

0769

ふかきまとひにそむる心よ

ほともなくゝるゝ日かけにねをそなく

0770

ひつしのあゆみきくにつけても

たか山の峯ふみならずとらのこの
のほらむみちのすゑそはるけき

蟲十

0771

なはしろにかつちる花のいろなから
すたくかはつのこゑそなかるゝ

0772

終夜まかふほたるのひかりさへ

わかれはおしきのゝめのそら

0773

けさ見れはのわきのゝちの雨はれて

たまそのこれるさゝかにのいと

0774

人ならは怨もせましそのゝ花

かるれはかるゝてうの心よ

0775

み山ふく風のひゝきになりにつけり

こすゑにならふひくらしの聲

0776

わきかぬるゆめのちきりににたる哉

ゆふへのそらにまかふかけろふ

0777

草ふかきしつのふせやのかはしらに

いとふけふりをたてそふる哉

0778

うきて昔をふるやのゝきにすむはちの

0779

さすかになれぬいとふものから

春さめのふりにしさとをきて見れは

0780

まくらのちりにすかるみのむし

をのつからうちをくふみも月日へて

あくれはしみのすみかとそなる

神祇十

0781

てらすらんかみちの山のあさ日かけ

あまつくもゐをのとかなれとは

0782

かしまのやひはらすきはらるときはなる
きみかさかえは神のまに／＼

0783

春日山峯の松原吹風の

雲ゐにたかきよろつ忝の聲

0784

さか木さすをしほのゝへのひめこ松

0785

かはすちとせのすゑそひさしき

かも山やいくらの人をみつかきの

ひさしき忝よりあはれかくらん

0786

たのもしなあか月ちきる月かけの

かねてすむらんみよしのゝたけ

0787

おもかけに思もさひしうつもれぬ

ほかたに冬のゆきのしら山

0788

雲かゝるなちの山かけいかならむ

みそれはけしきなかきよのやみ

0789

わかのうらの浪に心はよすときく

我をはしるやすみよしの松

0790

やはらくるひかりさやかにてらし見よ

たのむ日よしのなゝのみやしろ

釋教十

歡喜地

0791

うれしさのなみたもさらにとゝまらす
なかきうき忒のせきをいつとて

無垢地

0792

いさきよくみかく心しくもらねは
たましくよものさかひをそ見る

明地

0793

あきらけきあさひのかけにあたこ山
雪も氷もきえそくたくる

0794

焔惠地

冬かれのをとろのふるえもえつきて
ふきかふ風に花そちりしく

0795

難勝地

あまつ風さはりしくもはふきとちつ
をとめのすかた花にゝほひて

0796

現前地

すみまさる池の心にあらはれて
こかねのきしに浪そよせける

0797

遠行地

さはりなくとをちをわたすはしなれは
おちやふるてふたくひたに見す

0798

不動地

をのかしゝまもるすかたの身にそひて
うこかぬみちのかためとそなる

0799

善慧地

はかりなき花のもろ人なひきゝて
まさるかさりのかいそありける

0800

法雲地

おほそらのりのくもちにすむ月の
かきりもしらぬひかりをそ見る

譚合百首

建久四年秋 三年給題今年雖憚身依別儀猶被召此哥

詠百首和歌

權少將

春

元日宴

0801

はるくれはほしのくらゐに影見えて
くもゐのはしにいつるたをやめ

餘寒

0802

かすみあへす猶ふる雪にそらとちて
はる物ふかきうつみ火のもと

春水

0803

氷ゐしみつのしら浪たちかへり
はるかせしるき池のおも哉

若草

0804

をそくとくをのかさま／＼さく花も
ひとつふたはのはるのわかくさ

0805

賭射

もゝしきやいてひく庭のあつさゆみ
むかしにかへるはるにあふ哉

0806

野遊

みな人のはるの心のかよひきて
なれぬる野邊の花のかけ哉

0807

雉

たつきしになるゝのはらもかすみつゝ
こをおもふみちやはるまとふらん

0808

雲雀

すゑとをきわか
はのしはふうちなひき
ひはりなくのゝはるのゆふくれ

遊絲

0809

くりかへしはるのいとゆふいくよへて
おなしみとりのそらに見ゆらん

春曙

0810

霞かは花うくひすにとちられて
はるにこもれるやとのあけほの

遅日

0811

な
か
め
わ
ひ
ぬ
ひ
か
り
の
と
か
に
か
す
む
日
に

花
さ
く
山
は
に
し
を
わ
か
ね
と

志賀山越

0812

袖
の
雪
そ
ら
ふ
く
風
も
ひ
と
つ
に
て

花
に
ゝ
ほ
へ
る
し
か
の
山
こ
え

三月三日

0813

か
ら
ひ
と
の
あ
と
を
つ
た
ふ
る
さ
か
つ
き
の

な
み
に
し
た
か
ふ
け
ふ
も
き
に
け
り

0814

蛙

ほのかなるかれのゝすゑのあらを田に
かはつもはるのくれうらむなり

0815

残春

このもとは日かす許をにほひにて
花ものこらぬはるのふるさと

夏

新樹

0816

影ひたす水さへ色そみとりなる
よものこすゑのおなしわかには

夏草

0817

なつ山のくさはのたけそしらぬる
はる見しこ松人しひかすは

賀茂祭

0818

雲のうへをいつるつかひのもろかつら
むかふ日かけにかさすけふ哉

鵜河

0819

をちこちになかめやかはすうかひ舟
やみをひかりのかゝり火のかけ

0820

夏夜

夏のよはなるゝしみつのうき枕
むすふほとなきうたゝねのゆめ

0821

夏衣

たつねいるならの葉かけのかさなりて
さてしもかろき夏衣哉

0822

扇

風かよふあふきに秋のさそはれて
まつてなれぬるとこの月かけ

0823

夕顔

くれそめてくさの葉なひく風のまに
かきねすゝしきゆふかほの花

晩立

0824

風わたるのきのしたくさうちしおれ
すゝしくにほふゆふたちのそら

蟬

0825

あらしふくこすゑはるかになくせみの
秋をちかしとそらにつくなる

秋

殘暑

0826

秋きても猶ゆふ風をまつかねに
夏をわすれしかけそたちうき

乞巧奠

0827

あきことにたえぬほしあひのさよふけて
ひかりならふる庭のともし火

稻妻

0828

影やとすほとなき袖のつゆのうへに
なれてもうときよひのいなつま

鶉

0829

月そすむさとはまことにあれにけり
うつらのとこをはらふ秋風

野分

0830

荻の葉にかはりし風の秋のこゑ
やかてのわきのつゆくたくなり

秋雨

0831

ゆくゑなき秋のおもひそせかれぬる
むらさめなひくゝものをちかた

0832

秋夕

秋よたゝなかめすてゝもいてなまし
このさとのみのゆふへとおもはゝ

秋田

0833

いく昔ともやはこたへすかと田ふく
いなはの風の秋のをとつれ

鳴

0834

から衣すそのゝいほのたひまくら
そてよりしきのたつ心ちする

廣澤池眺望

0835

すみきけるあとはひかりにのこれとも
月こそふりねひろさはの池

鳶

0836

あしのやのつたはふのきのむら時雨
をとこそたてね色はかくれす

柞

0837

新古今

時わかぬ浪さへ色に泉河
はゝそのもりにあらしふくらし

九月九日

0838

いはひをきて猶なか月とちきる哉
けふつむ菊のすゑのしらつゆ

秋霜

0839

とけてねぬ夢ちもしもにむすほゝれ
まつしる秋のかたしきのそて

暮秋

0840

ありあけの名許秋の月影に
よはりはてたるむしのこゑ哉

冬

落葉

0841

かつおしむなかめもうつる庭の色よ
なにをこすゑの冬にのこさむ

殘菊

0842

しらきくのちらぬはのこる色かほに
はるは風をもうらみける哉

枯野

0843

夢かさは野邊のちくさのおもかけは
ほの／＼なひくすゝき許や

0844

野行幸

狩衣をとろのみちもたちかへり
うちゝるみゆき野風さむけし

0845

霽

この山のみねのむらくもふきまよひ
まきのはつたひみそれふりきぬ

0846

冬朝

ひとゝせをなかめつくせるあさといてに
うすゆきこほるさひしさのはて

0847

寒松

あらはれて又冬こもる雪のうちに
さもとしふかき松の色哉

0848

椎柴

しゐしはゝ冬こそ人にしられけれ
ことゝふあられのこすこからし

0849

衾

ひきかくるねやのふすまのへたてにも
ひゝきはかはるかねのをとかな

佛名

0850

河竹のなひく葉風も年くれて

三吉のほとけのみなをきく哉

戀

初戀

0851
新古今

なひかしなあまのもしほ木たきそめて

けふりはそらくゆりわふとも

忍戀

0852

氷あるみるめなきさのたくひかは

うへせくそてのしたのさゝなみ

0853

聞戀

もろこしの見すしらぬ昔の人許
名にのみきゝてやみねとや思

0854

續古

見戀

うしつらしあさかのぬまの草のなよ
かりにもふかきえにはむすはて

0855

新古今

尋戀

おもかけはをしへしやとにさきたちて
こたへぬ風のまつにふくこゑ

0856

新古今

祈戀

年もへぬいのるちきりはゝつせ山
おのへのかねのよそのゆふくれ

0857

契戀

あちきなしたれもはかなきいのちもて
たのめはけふのくれをたのめよ

0858

待戀

風つらきもとあらのこはき袖に見て
ふけゆく夜はにをもるしらつゆ

0859

遇戀

たふましきあすよりのちの心ち哉
なれてかなしきおもひそひなは

0860

別戀

かはれたゝわかるゝみちのゝへのつゆ
いのちにむかふものもおもはし

0861

顯戀

よしさらは今はしのはてこひしなん
おもふにまけし名にたにもたて

0862

稀戀

年そふる見るよな／＼もかさならて
我もなきなかゆめかとそ思

0863

絶戀

心さへ又よそ人になりはては
なにかなこりのゆめのかよひち

0864

怨戀

あらさらむのちの昔までをうらみても
そのおもかけをえこそうとまね

0865

舊戀

いかなりし昔々のむくひのつらさにて
この年月によはらさるらん

0866

暁戀

おもかけもわかれにかはるかねのをとに
ならひかなしきのゝめのそら

0867

朝戀

雲かゝりかさなる山をこえもせず
へたてまさるはあくる日のかけ

0868

晝戀

おほかたの露はひるまそわかれける
わかそてひとつのこるしづくに

夕戀

0869

こひわひてわれとなかめしゆふくれも
なるれは人のかたみかほなる

夜戀

0870

たのめぬをまちつるよるもすきはてゝ
つらさとちむるかたしきのとこ

0871

老戀

曉にあらぬ別も今はとて

わか昔ふくれはそふおもひ哉

0872

幼戀

葉をわかみまたふしなれぬくれ竹の

こはしほるへき露のうへかは

0873

遠戀

かなしきはさかひことなるなかとして

なきたまゝてやよそにうかれん

0874

近戀

なみたせくそてのよそめはならへとも
わすれすやともとふひまそなき

旅戀

0875

ふるさとをいてしにまさる涙哉
あらしの枕ゆめにわかれて

寄月戀

0876

やすらひにいてにしまゝの月のかけ
わかなみたのみそてにまたとも

0877

寄雲戀

時のまにきえてたなひくしらくもの
しはしも人にあひ見てし哉

0878

寄風戀

しらさりし夜ふかき風のをとみにす
たまくらうとき秋のこなたは

0879

寄雨戀

さはらすはこよひそきみをたのむへき
袖には雨の時わかねとも

0880

寄煙戀

限なきしたのおもひのゆくゑとて
もえんけふりのはてや見ゆへき

0881

寄山戀

あしひきの山ちの秋になるそては
うつろふ人のあらしなりけり

0882

寄河戀

いつかさは又はあふせをまつらかた
この河かみにいゑはすむとも

0883

寄海戀

とをさかる人の心はうなはらの
おきゆくふねのあとのしらなみ

0884

寄開戀

身にたへぬおもひをすまのせきすへて
人に心をなととゝむらん

0885

寄檣戀

ひと心をたえのはしにたちかへり
この葉ふりしく秋のかよひち

0886

寄草戀

いはさりきわか身ふるやの忍草
思たかへてたねをまけとは

0887

寄木戀

こひしなはこけむすつかにかへふりて
もとのちきりのくちやはてなん

0888

寄鳥戀

かものゐるいり江の浪を心にて
むねとそてとにさはくこひ哉

0889

寄獸戀

うらやますふすゐのとはやすくとも
なけくもかたみねぬもちきりを

0890

寄蟲戀

わすれしのちきりうらむるふるさとの
心もしらぬ松蟲のこゑ

0891

寄笛戀

ふえ竹のたゝひとふしをちきりにて
昔ゝのうらみをのこせとや思

0892

寄琴戀

昔きくきみかてなれのことならば
ゆめにしられてねをもたてまし

0893

寄繪戀

ぬしやたれ見ぬよのことをうつしをく
ふてのすさひにうかふおもかけ

0894

寄衣戀

こひそめしおもひのつまの色そこれ
身にしむはるの花の衣手

0895

新古今

わすれすはなれし袖もやこほるらん
ねぬ夜のこのしものさむしろ

寄席戀

寄遊女戀

0896

心かよふゆきゝの舟のなかめにも
さしてか許物はおもはし

寄傀儡戀

0897

ひと夜かすのかみのさとの草枕
むすひすてける人のちきりを

0898

寄海人戀

袖そいまはをしまのあまもいさりせん
ほさぬたくひに思ける哉

寄樵夫戀

0899

山ふかきなけ木こるをの越のれのみ
くるしくまとふこひのみち哉

寄商人戀

0900

たつの市や日をまつしつのそれならば
あすしらぬ身にかへてあはまし

正治二年八月八日追給題 同廿五日詠進之

秋日侍 太上皇仙洞同詠百首應製和歌

從四位上行左近衛權少將兼安藝權介臣藤原朝臣定家上

春廿首

0901

はるきぬとけさみよしのゝあさほらけ

0902

昨日はかすむ峯の雪かは

0903

あらたまの年のあくるをまちけらし

けふたにのとをいつるうくひす

はるのいろをとふひのゝもりたつぬれと

ふたはのわかなゆきもきえあへす

0904

もろひとの花いろ衣たちかさね

みやこそしるきはるきたりとは

0905

續古

うち渡すをち方人はこたへねと

0906

新古今

梅花にほひをうつすそてのうへに

のきもる月のかけそあらそふ

0907

はなのかのかすめる月にあくかれて

ゆめもさたかに見えぬころ哉

0908

もゝちとりこゑや昔のそれならぬ

わか身ふりゆくはるさめのそら

0909

ありあけの月影のこる山のはを

そらになしてもたつかすみ哉

0910

思たつ山のいくへもしらくもに

はねうちかはし歸かりかね

0911

よしの山くもに心のかゝるより

花のころとはそらにしるしも

0912

いつも見し松の色かははつせ山

さくらにもるゝはるのひとしほ

0913

新古今

白雲のはるはかさねてたつた山

をくらの峯に花にほふらし

0914

高砂の松とみやこにことつてよ

おのへのさくらいまさかり也

0915

花の色をそれかとそ思をとめこか

そてふる山のはるのあけほの

0916

春のをる花のにしきのたてぬきに

みたれてあそふそらのいとゆふ

0917

をのつからそこともしらぬ月は見つ

くれなはなけの花をたのみて

0918

さくら花ちりしくはるの時しもあれ

かへす山田をうらみてそゆく

0919

春もおし花をしるへにやとからむ

ゆかりのいろのふちのしたかけ

0920

しのはしよ我ふりすてゝゆくはるの

なこりやすらふあめのゆふくれ

夏十五首

0921

ぬきかへてかたみとまらぬなつ衣

さてしも花のおもかけそたつ

0922

すかのねや日かけもなくなるまゝに

むすふはかりにしける夏草

0923

卯花のかきねもたわにをけるつゆ

ちらすもあらななたまにぬくまで

0924

もろかつら草のゆかりにあらねとも

かけてまたるゝほとゝきす哉

0925

あやめふくのきのたちはな風ふけは

むかしにならふけふのそてのか

0926

いか許み山さひしとうらむらん

さとなれはつるほとゝきす哉

0927

郭公しはしやすらへすかはらや

ふしみのさとのむらさめのそら

0928

ほとゝきすなにをよすかにたのめとて

花たちはなのちりはてぬらん

0929

たか袖を花橘にゆつりけむ

0930

やとはいく舌をとつれもせて

0931

わかしめしたま江のあしのよをへては
からねと見えぬさみたれのころ

0932

續古

夏草のつゆわけ衣ほしもあへす
かりねなからにあくるしのゝめ

0933

片絲をよる／＼峯にともす火に

あはすはしかの身をもかへしを

おきのはもしのひ／＼にこゑたてゝ

またきつゆけきせみのは衣

0934

夏か秋かとへとしらたまいはねより

はなれておつるたき河の水

0935

今はとて晨明の影のまきのとに

さすかにおしきみな月のそら

秋廿首

0936

けふこそは秋はゝつせの山おろしに

すゝしくひゝくかねのをと哉

0937

白露に袖もくさはもしほれつゝ

月かけならす秋はきにけり

0938

秋といへはゆふへのけしきひきかへて

またゆみはりの月そさひしき

0939

いくかへりなれてもかなし萩原や

すゑこそすかせの秋のゆふくれ

0940

物おもはゝいかにせよとて秋のよに

かゝる風しもふきはしめけん

0941

唐衣かりいほのとこのつゆさむみ

はきのにしきをかさねてそきる

0942

秋はきのちりゆくをのゝあさつゆは

こほるゝそてもいろそうつろふ

0943

あきの野になみたは見えぬしかのねは

わくるをかやのつゆをからなん

0944

おもふ人そなたの風にとはねとも

まつ袖ぬるゝはつかりのこゑ

0945

ゆふへより秋とはかねてなかむれと

月におとろくそらのいろ哉

0946

秋をへてくもる涙のますかゝみ

きよき月よもうたかはれつゝ

0947

おもふことまくらもしらし秋のよの

ちゝにくたくる月のさかりは

0948

もよほすもなくさむもたゝ心から

なかむる月をなとかこつらん

0949

さひしさも秋にはしかなけきつゝ

ねられぬ月にあかすさむしろ

0950

秋の夜のあまのとわたる月かけに

をきそふしものあけかたのそら

0951

そめはつるしくれをいまはまつむしの

なく／＼おしむのへのいろ／＼

0952

白妙の衣してうつひゝきより

をきまよふしものいろにいつらん

0953

おもひあへす秋ないそきそさをしかの

つまとふ山のを田のはつしも

0954

秋くれてわか身しくれとふるさとの

庭はもみちのあとたにもなし

0955

あすよりは秋も嵐のをとは山

かたみとなしにちるこのは哉

冬十五首

0956

たむけしてかひこそなけれ神な月

もみちはぬさとちりまかへとも

0957

山めぐり猶しくるなり秋にたに

あらそひかねしまきのしたはを

0958

うらかれしあさちはくちぬひとゝせの

すゑはのしものふゆのよな／＼

0959

冬はまたあさはのゝらにをくしもの

ゆきよりふかきしのゝめのみち

0960

よしさらはよものこからしふきはらへ

ひとはくもらぬ月をたに見む

0961

をとつれしまさきのかつらちりはてゝ

と山もいまはあられをそきく

0962

山かつのあさけのこやにたくしはの

しはしと見れはくるゝそら哉

0963

冬の夜のむすはぬゆめにふしわひて

わたるをかはゝ氷ゐにけり

0964

庭の松はらふあらしにをくしもを

うはけにわふるをしのひとりね

0965

たれを又夜ふかき風にまつしまや

をしまのちとりこゑうらむ覽

0966

續拾

なかめやる衣手さむくふる雪に

ゆふやみしらぬ山のはの月

0967

新古今

こまとめて袖うちはらふかけもなし

さのゝわたりの雪のゆふくれ

0968

白妙にたなひくゝもをふきませて

ゆきにあまきる峯のまつかせ

0969

庭のおもにきえすはあらねと花と見る

0970

雪は春まてつきてふらなん

いくかへりはるをはよそにむかへつゝ
をくる年のみ身につもるらむ

0971

續後

戀十首

久方のあまてる神のゆふかつら

かけていくよをこひわたるらん

0972

勅撰

松かねをいそへの浪のうつたへに

あらはれぬへきそてのうへかな

0973

あはれとも人はいはたのをのれのみ

秋のもみちをなみたにそかる

0974

しのふるはまけてあふにも身をかへつ

つれなきこひのなくさめそなき

0975

わくらはにたのむるくれのいりあひは

かはらぬかねのをとそひさしき

0976

あか月はわかるゝ袖をとひかほに

山した風もつゆこほるなり

0977

まつ人のこぬ夜のかけにおもなれて

山のはいつる月もうらめし

0978

うきはうくつらきはつらしと許も

人めおほえて人をこひはや

0979

たれゆへそ月をあはれといひかねて

とりのねをそきさよのたまくら

0980

見せはやなまつとせしまのわかやとを

猶つれなさはことゝはすとも

旅五首

0981

草枕ゆふつゆはらふさゝのはの

み山もそよにいくよしほれぬ

0982

浪のうへの月をみやこのともとして

あかしのせとをいつるふな人

0983

いもと我といるさの山は名のみして

月をそしたふありあけのそら

0984

こまなつむいは木の山をこえわひて

人もこぬみのはまにかもねむ

0985

宮こ思ふ涙のつまとなるみかた

月にわれとふ秋のしほ風

山家五首

0986

續古

露しものをくらの山にいへゐして

ほさてもそてのくちぬへき哉

0987

秋の日にみやこをいそくしつのめか

かへるほとなきおほはらのさと

0988

浪のをとに宇治のさと人よるさへや

ねてもあやうき夢のうきはし

0989

しはのとのあと見ゆ許しほりせよ

わすれぬ人のかりにもそとふ

0990

庭のおもはしかのふしとゝあれはてゝ

杳ゝふりにけり竹あめるかき

鳥五首

0991

やとになくやこゑのとりはしらしかし

越きてかひなきあかつきのつゆ

0992

手なれつゝすゑ野をたのむはしたかの
きみのみよにそあはむとおもひし

0993

君か昔に霞をわけしあしたつの

0994

さらにさはへのねをやなくへき

0995

如何せむつらみたれにしかりかねの
たちともしらぬ秋の心を

0996

わかきみにあふくま河のさよちとり
かきとゝめつるあとそうれしき

祝五首

よろつ昔とゝきはかきはにたのむ哉
はこやの山のきみのみかけを

0997

あまつそらけしきもしるし秋の月

のとかなるへきくものうへとは

0998

わかきみのひかりそゝはむはるの宮

てらすあさひのちよのゆくすゑ

0999

おとこ山さしそふまつの枝ことに

神もちとせをいはひそむらん

1000

秋津嶋よもの民の戸おさまりて

いくよろつよもきみそたもたむ

夏日侍

千五百番哥合是也

建

元年七月進

太上皇仙洞同詠百首應 製和歌

平出無先例如此可書由
内府被披露仍隨時儀

正四位下行左近衛權少將兼安藝權介臣藤原朝臣定家上

春廿首

1001 春霞きのふをこそこのしるしとや

のきはの山もとをさかるらん

1002 はるといへは花やはをそきよしの山

きえあへぬ雪のかすむあけほの

1003 山のはに霞許をいそけとも

はるにはなれぬそらの色哉

1004

やまさとは谷のうくひすうちはふき

ゆきよりいつるこそこのふるこゑ

續拾

1005

きえなくに又やみ山をうつむ覽

わかなつむのもあは雪そふる

1006

谷風のふきあけにさける梅花

あまつそらなるくもやにほはむ

1007

さとわかぬ月をは色にまかへつゝ

よものあらしにゝほふむめかえ

1008

はるやあらぬやとをかことにたちいつれと

いつこもおなしかすむよの月

1009

あつまやのこやのかりねのかやむしろ

しく／＼ほさぬはるさめそふる

1010

まちわひぬ心つくしのはるかすみ

花のいさよふ山のはのそら

1011

櫻花さきぬやいまたしらくもの

はるかにかほるをはつせの山

1012

雲の浪霞のなみにまかへつゝ

よしのゝ花のおくを見ぬ哉

1013

しるしらぬわかぬかすみのたえまより

あるしあらはにかほる花哉

1014 あかさりし霞の衣たちこめて

袖のなかなる花のおもかけ

1015 續古
櫻花うつろふ春をあまたへて

身さへふりぬるあさちふのやと

1016 新古今
さくらいろの庭のはるかせあともなし

とはゝそ人の雪とたに見む

1017 花のかも風こそよみにさそふらめ

心もしらぬふるさとのはる

1018 とまらぬはさくら許を色にいてゝ

ちりのまよひにくるゝはるかな

1019

よし野河たきつい浪せきもあへす

はやくすきゆく花のころ哉

1020

けふのみとしゐてもおらしふちの花

さきかゝる夏のいろならぬかは

夏十五首

1021

郭公まつに心のうつるより

そてにとまらぬはるの色哉

1022

まつとせし人のためとはなかめねと

しける夏草みちもなきまで

1023

時しらぬさとはたま河いつとてか

夏のかきねをうつむしらゆき

1024

あふひくさかりねのゝへにほとゝきす

暁かけてたれをとふらん

1025

なをさりに山郭公なきすてゝ

我しもとまるもりのしたかけ

1026

ゆふくれはなくねそらなるほとゝきす

心のかよふやとやしるらん

1027

またれつゝ年にまれなる郭公

さ月許のこゑなおしみそ

1028

けふはいとゝおなしみとりにうつもれて

草のいほりもあやめふくなり

1029

あまの河やせもしらぬさみたれに

思ふもふかき雲のみお哉

1030

袖のかを花橘におとろけは

そらにありあけの月そのこれる

1031

新古今

ひさかたのなかなる河のうかひ舟

いかにちきりてやみをまつらん

1032

夏衣たつた河らをきて見れは

しのおりはへ浪そほしける

1033

なつの月はまたよゐのまとなかめつゝ

ぬるやかはへのしのゝめのそら

1034

山のかけおほめくさとにひくらしの

こゑたのまるゝゆふかほの花

1035

たかみそきおなしあさちのゆふかけて

まつうちなひくかもの河風

秋廿首

1036

けさよりは風をたよりのしるへにて

あとなき浪も秋やたつらん

1037

みつくきのをかのくすはらふきかへし

衣手うすき秋のはつ風

1038

ゆふくれはをのゝしのはらしのはれぬ

秋きにけりとうつらなくなり

1039

松の葉のいつともわかぬ影にしも

いかなる色とかはる秋風

1040

つゆをゝもみ人はまちえぬ庭のおもに

風こそはらへもとあらのはき

1041

萩原やうへてくやしき秋風は

ふくをすさひにたれかあかさむ

1042

さをしかのなくねのかきりつくしても

いかゝ心に秋のゆふくれ

1043

秋きぬとそてにしらるゝゆふつゆに

やかてこのまの月そやとかる

1044 松蟲の聲をとひゆく秋のゝに

つゆたつねける月の影哉

1045 思われぬ人のすきゆく野山にも

秋は秋なる月やすむらん

1046 たかさこのおのへのしかの聲たてし

風よりかはる月のかけ哉

1047 續古
心のみもろこしまてもうかれつゝ

ゆめちにとをき月のころ哉

1048 紅葉する月のかつらにさそはれて

したのなけ木もいろそうつろふ

1049

行く秋をちゝにくたけてすきぬらん

わか身ひとつを月にうれへて

1050

秋とたにわすれむと思ふ月かけを

さもあやにくにうつ衣哉

1051

新古今

ひとりぬる山とりのおのしたりおに

霜をきまよふ床の月かけ

1052

如何せんきほふ木のはの木枯に

たへす物おもふ長月のそら

1053

さをしかのふすや草むらうらかれて

したもあらはに秋風そふく

1054

いはしろのゝ中さえゆく松風に

むすひそへつる秋のはつしも

1055

冬はたゝあすかの里のたひまくら

をきてやいなん秋の白露

冬十五首

1056

秋くれしもみちのいろをかさねても

衣かへうきけふのそら哉

1057

ふゆきぬと時雨のをとにおとろけは

めにもさやかにはるゝこのもと

1058

のこる色もあらしの山の神な月

井せきの浪におろすくれなる

1059

かれはつる草のまかきはあらはれて

いはもる水をうつむもみち葉

1060

しほれ葉やつゆのかたみにをくしもゝ

猶あらしふく庭のよもきふ

1061

花すゝき草のた本もくちはてぬ

なれてわかれし秋をこふとて

1062

しくれこしきしの松かけつれもなく

すむにほとりの池のかよひち

1063

まきのやに時雨あらはよかれせて

こほるかけひのをとつれそなき

1064

これやさは秋のかたみのうらならん

かはらぬ色をゝきの月かけ

1065

浦風にやくしほけふりふきまよひ

たなひく山の冬そさひしき

1066

續古

なく千鳥袖のみなとをとひこかし

もろこし舟もよるのねさめに

1067

ことそともなくてことしもすきのとの

あけておとろくはつゆきのそら

1068

かたしきのとこのさむしろこほる夜に

ふりかしくらん峯の白雪

1069

雪ふかきまのゝかやはらあとたえて

またことゝをしはるのおもかけ

1070

やとことにはるのかすみをまつとてや

年をこめてはいそきたつらむ

祝五首

1071

あめつちとかきりなかれとちかひをきし

神のみことそわか君のため

1072

さねこしのさか木にかけしかゝみにそ

きみかときはのかけは見えけん

新古今

1073 わか道をまもらは君をまもるらん

よはひはゆつれ住吉の松

1074 萬代の春秋きみになつさはむ

はなと月とのすゑそひさしき

1075 よものうみもけふりにきはふはまひさし

ひさしきちよにきみそさかえむ

戀十五首

1076 あふことのまれなる色やあらはれん

もりいてゝそむる袖のなみたに

たれか又物思ことはをしへをきし

1077 枕ひとつをしる人にして

1078

こひしさのわひていさなふよゐ／＼に
ゆきてはかへるみちのさゝはら

1079

かたいとのあふとはなしにたまのをも
たえぬ許そ思みたるゝ

1080

新古今

きえわひぬうつろふ人の秋の色に
身をこからしのもりのしたつゆ

1081

夢なれやをのゝすかはらかりそめに

1082

新古今

つゆわけし袖は今もしほれて
たつね見るつらき心のおくの海よ
しほひのかたのいふかひもなし

1083

人こゝろかよふたゝちのたえしより

うらみそわたるゆめのうきはし

1084

おもかけはなれしなからの身にそひて

あらぬ心のたれちきるらん

1085

おもひいてよたかきぬ／＼のあかつきも

わかまたしのふ月そ見ゆらん

1086

わすれねよこれはかきりそと許の

人つてならぬ思いてもうし

1087

はてはたゝあまのかるもをやとりにて

まくらさたむるよひ／＼そなき

1088

かれぬるはさそなためしとなかめても

なくさまなくにしものしたくさ

1089

時つ風ふけるのうらにあかひても

たかためにかは身をもおしみし

1090

久方の月そかはらてまたれける

人にはいひし山のはのそら

1091

雑十首

おほかたの月もつれなきかねのをとに

猶うらめしきありあけのそら

1092

たつけふり野山のすゑのさひしさは

秋ともわかすゆふくれのそら

1093

いく昔へぬかさしおりけんいにしへに

みわのひはらのこけのかよひち

1094

こまとめしひのくま河の水きよみ

夜わたる月の影のみそ見る

1095

そらにふくおなし風こそこゑたつれ

峯の松かえあらいその浪

1096

あさゆふはたのむとなしにおほそらの

むなしきくもをうちなかめつゝ

1097

そなれ松しつえやためしをのれのみ

かはらぬいろに浪のこゆらん

1098

年ふれはしもよのやみになくつるを

1099

いつまでそてのよそにきゝけん

いたつらにあたらいのちをせめきけむ

なからへてこそけふにあひぬれ

1100

わかのうらにかひなきもくつかきつめて

身さへくちぬと思ける哉

内大臣家百首

建保三年九月十三夜講

詠百首和歌

参議

春十五首

1101

早春

うくひすもまたいてやらぬはるのくも
ことしともいはす山風そ吹

春雪

1102

あはゆきの今もふりしくときは山
をのれきえてやはるをわくへき

野鶯

1103

春くれはのへにまつさく花のえを
しるへにきゐるうくひすのこゑ

1104

海霞

かさすてふ浪もてゆへる山やそれ
霞ふきとけすまのうら風

開霞

1105

しるしらぬ相坂山のかひもなし
霞にすくるせきのよそめは

朝若菜

1106

たかためとまたあさしものけぬかうへに
そてふりはへてわかなつむらん

庭梅

1107

袖ふれしやとのかたみのむめかえに
のこるにほひよはるをあらすな

夜梅

1108

ひさかたの月やはにほふむめの花
そらゆくかけをいろにまかへて

夕歸鴈

1109

くれぬなり山本とをきかねのをとに
峯とひこえてかへるかりかね

1110

栽花

ふりはつる身にこそまたねさくら花
うへをくやとのはるなわすれそ

待花

1111

霞たつ山のやまもりことつてよ
いくかすきての花のさかりと

尋花

1112

鳥の聲霞の色をしるへにて
おもかけにほふはるの山ふみ

翫花

1113

かさしおる花の色かにうつろひて
けふのこよひにあかぬもろ人

惜花

1114

きえすともあすは雪とや櫻花
くれゆくそらをいかにとゝめん

殘春

1115
續古

春はたゝ霞許の山のはに
暁かけて月いつるころ

夏十首

首夏

1116

あはれをもあまたにやらぬ花のかの
山もほのかにのこるみか月

夏草

1117

さゆり葉にまじる夏草しけりあひて
しられぬ舌にそくちぬと思し

初郭公

1118

山のはのあさけのくもにほとゝきす
またさとなれぬこそそのふるこゑ

嶺郭公

1119

よそにのみきゝかなやまむ郭公
たかまの山のくものをちかた

杜郭公

1120

ほとゝきすこゑあらはるゝ衣手の
もりのしつくを涙にやかる

池昌蒲

1121

さ月きぬのきのあやめのかけそへて
まちしいつかとにほふ池水

山五月雨

1122

峯つゝきくものたゝちにまどゝちて
とはれむものかさみたれのそら

故郷橘

1123

たちはなの袖のかはかり昔にて
うつりにけりなふるきみやこは

澤螢

1124

せりつみしさはへのほたるをのれ又
あらはにもゆとたれに見すらん

1125

樹陰納涼

はつせのやゆつきかしたにかくろへて
人にしられぬ秋風そ吹

秋十五首

初秋

1126

あちきなくさもあらぬ人のねさめまで
物思そむる秋のはつ風

行路萩

1127

秋はきのゆくてのにしきこれも又
ぬさもとりあへぬたむけにそおる

1128

山家蟲

松蟲の聲もかひなしやとなから
たつねはくさのつゆの山かけ

夕萩

1129

人こゝろいかにしほれとおきのはの
秋のゆふへにそよきそめけん

谷鹿

1130

さをしかのあさゆくたにのたまかつら
おもかけさらすつまやこふらん

原鹿

1131

みかのはらくにのみやこの山こえて
むかしやとをきさをしかのこゑ

島月

1132

秋は又ぬれこし袖のあひにあひて
をしまのあまそ月になれける

江月

1133

あかす夜は入江の月の影許
こきいてし舟のあとうき浪

1134

浦月

ひさかたの月のひかりを白妙に
しきつのうらの浪の秋風

1135

槁月

はるかなる峯の梯めぐりあひて
ほとはくもゐる月そさやけき

1136

河月

ひかりさすたましま河の月きよみ
をとめの衣そてさへそてる

曉擣衣

1137

なかき夜をつれなくのこる月のいろに
をのれもやます衣うつなり

遠村紅葉

1138

續後

山本の紅葉のあるしうとけれど
つゆもしくれもほとは見えけり

古寺紅葉

1139

そはたつる枕におつるかねのをとも
もみちをいつる峯の山てら

1140

暮秋

あさな／＼あへすちりしくゝすのはに
をきそふしもの秋そすくなき

冬十首

田家時雨

1141

かりのこす田のものくもゝむら／＼に
しくれてはるゝ冬はきにけり

野徑霜

1142

あさしもの花のゝすゝき越きてゆく
をちかた人のそてかとそ見る

水郷寒蘆

1143

冬の日のみしかきあしはうらかれて
浪のとまやに風そよはらぬ

寒夜千鳥

1144

浦千鳥方もさためすこひてなく
つまふく風によるそひさしき

湖氷

1145

鏡山夜わたる月もみかゝれて
あくれとこほるしかのうら波

1146

林雪

はやしあれて秋のなさけも人とはす
紅葉をたきしあとの白雪

1147

深更霰

あけ方もまたとを山のこからしに
あられふきませなひくむらくも

1148

濱雪

大伴の御津のはま風ふきはらへ
松とも見えしうつむ白雪

1149

岡雪

けさは又あとかきたゆる水くきの
をかのやかたの雪のふりはも

歳暮

1150

ゆく年よ今さへをくりむかふてふ
心なかさをいかに見るらん

1151

續後

戀廿五首 寄名所

寺とゝもに吹上の濱のしほ風に
なひくまさこのくたけてそおもふ

勅撰

1152 くるゝ夜は衛士のたく火をそれと見よ

むろのやしまもみやこならねは

1153 住の江の松のねたくやよる浪の

よるとはなけくゆめをたに見て

1154 かひかねにこの葉ふきしく秋風も

心の色をえやはつたふる

1155 龍田山ゆふつけ鳥のおりはへて

わか衣手に時雨ふるころ

續後

1156 わか袖にむなしき浪はかけそめつ

契もしらぬとこのうら風

1157

しられしな霞のしたにこかれつゝ

きみにいふきのさしもしのふと

1158

續後

葦の屋に螢やまかふあまやたく

おもひもこひもよるはもえつゝ

1159

續後

白玉のをたえのはしの名もつらし

くたけておつるそての涙に

1160

今よりのゆきゝもしらぬあふさかに

あはれなけ木のせきをすへつる

1161

玉匣あくれはゆめのふたみかた

ふたりやそての浪にくちなん

續古

1162 あらはれて袖のうへゆく名とり河

今はわか身にせく方もなし

1163 思いつるのちの心にくらふ山

よそなる花の色はいろかは

1164 如何せんうらははつしまはつかなる

うつゝのゝちはゆめをたに見す

1165 たのめをきしのちせの山のひとことや

こひをいのりのいのちなりける

1166 たつねぬは思しみわの山そかし

わすれねもとのつらきおもかけ

1167

さとの名を身にしる中のちきりゆへ

枕にこゆる宇治の河波

1168

續古

やすらひにいてけん方もしらとりの

とは山松のねにのみそなく

1169

しるへせよむしあけのせとの松の風

1170

ほかゆく浪のしらぬわかれに

かたみこそあたのおほのゝはきのつゆ

1171

うつろふ色はいふかひもなし

袖のうらかりにやとりし月草の

ぬれてのゝちを猶やたのまむ

1172

わすれかひそれも思ひのたねたえて

人を見ぬめのうらみてそぬる

1173

いのちたにあらはあふせをまつら河

かへらぬ浪もよとめとそ思

1174

ま木のはのふかきをすての山におふる

こけのしたまで猶やうらみむ

1175

續後

わすられぬまゝのつきはしおもひねに

かよひし方は夢に見えつゝ

雜廿五首

旅五首 春夏秋冬曉

1176 時のまも人を心にをくらさて

霞にましるはるの山もと 似名所白河關忘却

1177 山ちゆく雲のいつこのたひまくら

ふすほともなき月そあけゆく

1178 草のいほやくるゝ夜ことの秋風に

さそはれわたるたひのつゆけさ

1179 しきたへの衣手かれていくかへぬ

くさをふゆのゝゆふくれのそら

1180

おもかけにあらぬ昔もたちそひて
猶しのゝめそたひはかなしき

述懷五首 山河海里關

1181

くるとあくと思し月日すきのいほの
山ちつれなく年はへにけり

1182

きえせねはあはれいくよのおもひ河
むなしくこえしせゝのうき波

1183

海渡るうらく舟のいたつらに
いそちをすきてぬれし浪哉

1184

あれまくや伏見のさとのいてかてに
うきをしらてそけふにあひぬる

1185

今は又開のふち河たえすとも

くにゝむくひむためをこそおもへ

祝五首 天日月星雲

1186

くもりなきみとりのそらをあふきても

きみかやちよをまついのる哉

1187

みかさ山まつのこのまをいつる日の

さしてちとせの色は見ゆらん

1188

秋の月ひさしきやとにかけなひく

まかきの竹はよろつよやへむ

1189

くもりなき千舌のかす／＼あらはれて

ひかりさしそへほしのやとりに

1190

山人のよはひをきみのためしにて
ちとせのさかにかゝるしらくも

神祇五首

伊勢 石清水 賀茂 春日 住吉

1191

身をしれはいのるにはあらてたのみこし

いすゝ河波あはれかけゝり

1192

石清水月には今もちきりをかむ

みたひかけ見し秋のなかはを

1193

神も見よかもの河なみゆきかへり

つかふるみちにわけぬ心を

1194

いのりをきしいかなるすゑにかすか山

すてゝひさしきあとのこりけん

1195

かたはかり我はつたへしわかみちの

たえやはてぬるすみよしの神

釋教五首

大日釋迦阿彌陀藥師彌勒

1196

あまつそらひかりをわかつよつの身に

なにの草木ももるゝものかは

1197

きさらきのなかはのそらをかたみにて

はるのみやこをいてし月かけ

1198

こゝのへの花のうてなをさためすは

けふりのしたやすみかならまし

1199

とおあまりふたつのちかひきよくして

みかけるたまのひかりをそしく

1200

花にほふ四つのおほそらとをからて

あか月またぬあふことも哉

内裏百首

名所

依未被行中殿宴猶爲密儀

初冬同詠百首和謠

參議藤原定家

春廿首

音羽河

1201

續古

をとほ河雪けの浪もいはこえて
せきのこなたにはるはきにけり

玉嶋河

1202

むめかゝやまつうつるらむかけきよき
たましまかはの花のかゝみに

高砂

1203

それなからはるはくもゐにたかさこの
霞のうへの松のひとしほ

春日野

1204

わかなつむとふひのゝもりかすかのに
けふゝるあめのあすやまつらん

三輪山

1205

いかさまにまつともたれかみわの山
人にしられぬやとのかすみは

葛木山

1206

あをやきのかつら木山のなかき日は
そらもみとりにあそふいとゆふ

1207

手向山

たつ嵐いつれの神にたむけ山
花の錦の方もさためす

1208

伊勢海

いせのうみたまよる浪にさくらかひ
かひあるうらのはるの色哉

1209

志賀浦

さゝなみやしかのはなそのかすむ日の
あかぬにほひにうら風そふく

1210

三嶋江

みしま江の波にさおさすたをやめの
はるの衣の色そうつろふ

1211

鹽竈浦

しほかまやうらみてわたるかりかねを
もよほしかほにかへる浪哉

1212

宇津山

うつの山わかゆくさきもことゝをき
つたのわかにはるさめそふる

葦屋里

1213

あしのやのわかすむ方をそさくら
ほのかにかすむかへるさのそら

吹上濱

1214

けふそ見るかさしのなみの花のうへに
いとはぬ風のふきあけのはま

湯等三崎

1215

花とりのにほひもこゑもさもあらはあれ
ゆらのみさきのはるのひくらし

忍山

1216

いはつゝしいはてやそむるしのふ山
心のおくの色をたつねて

水無瀬河

1217

春の色をいくよろつ昔かみなせかは
かすみのほらのこけのみとりに

大淀浦

1218

つらからぬ松もこふらくおほよとの
霞はかりにかゝるうらなみ

1219

田籠浦

たこのうらのなみもひとつにたつくもの
色わかれゆくはるのあけほの

末松山

1220

あつさゆみすゑの松山はるはたゝ
けふまてかすむなみのゆふくれ

夏十首

大井河

1221

おほ井河かはらぬ井せきをのれさへ
夏きにけりところもほすなり

1222

篠田杜

道のへの日かけのつよくなるまゝに
ならすしのたのもりのしたかけ

猪名野

1223

みしかよのゐなのさゝはらかりそめに
あかせはあけぬやとはなくとも

御裳濯河

1224

月やとるみもすそ河の郭公
秋のいくよもあかすやあらまし

1225

伊香保沼

唐衣かくるいかほのぬま水に
けふはたまぬくあやめをそひく

1226

天香久山

五月雨はあまのかく山そらとちて
くもそかゝれる峯のまさかき

1227

大江山

ゆふすゝみおほえの山のたまかつら
秋をかけたるつゆそこほるゝ

1228

難波江

をしてるやなにはほり江にしくたまの
よるのひかりはほたるなりけり

美豆御牧

1229

渡するをちかた人のそてかとや
みつのにしろきゆふかほの花

松浦山

1230

せみのはの衣に秋をまつらかた
ひれふる山のくれそすゝしき

秋
廿
首

泊瀬山

1231

はつせめのならすゆふへの山風も
秋にはたへぬしつのをたまき

龍田山

1232

心あてのおもひのいろそたつた山
けさしもそめし木々のしらつゆ

阪磨浦

1233

たひ衣またひとへなるゆふきりに
けふりふきやるすまのうら風

1234

宮城野

秋にあひて身をしる雨としたつゆと
いつれかまさる宮木のゝはら

1235

水莖岡

水くきのをかのまくすをあまのすむ
さとのしるへと秋風そふく

1236

小倉山

をくら山秋のあはれやのこらまし
越しかのつまのつれなからすは

1237

宇治河

河波もまつよるすきはとをさかれ
やそうち人の秋の枕に

1238

常磐杜

はつかりのきなくときはのもりの露
そめぬしつくも秋は見えけり

1239

三室山

みむろ山しくれもやらぬくものいろの
をのれうつろふ秋のゆふくれ

1240

高圓野

おほそらにかゝれる月もたかまとの
のへにくまなきくさのうへのつゆ

伊駒山

1241

いこま山あらしも秋のいろにふく
てそめのいとのよるそかなしき

生田池

1242

しくれゆくいくたのもりのこからしに
池のみくさも色かはるころ

1243

淨見關

きよみかたひまゆくこまもかけうすし
秋なき浪の秋のゆふくれ

1244

武藏野

たかゝたによるなくかりのねにたてゝ
なみたうつろふむさしのゝはら

1245

伊吹山

秋をやく色にそ見ゆるいふき山
もえてひさしきしたのおもひも

1246

佐良之奈里

はるかなる月のみやこにちきりありて
秋のよあかすさらしなのさと

1247

白河關

しら河のせきのせきもりいさむとも
しくるゝ秋の色はとまらし

1248

野嶋崎

おもかけはひもゆふくれにたちそひて
のしまによする秋のうら波

1249

明石浦

燈のあかしのおきのとも舟も
ゆく方たとる秋のゆふくれ

阿武隈河

1250

たちくもるあふくま河のきりのまに
秋をはやらぬせきもすへなむ

冬十首

清瀧河

1251

をとまかふこのは時雨をこきませて
いはせにそむるきよたきのなみ

1252

小鹽山

あさしもゝしらゆふかけておほはらや
をしほの山に神まつるころ

1253

住吉浦

あはちしまむかひのくものむらしくれ
そめもをよはぬすみよしの松

1254

交野

かり人のかたのゝみゆきうちはらひ
とよのあかりにあはむとやする

1255

田蓑嶋

をきあかすしもそかさなるたひ衣
たみのゝしまはきてもかひなし

1256

有乳山

あらち山みねのこからしさきたてゝ
くものゆくてにおつる白雪

1257

浮嶋原

ふしのねにめなれし雪のつもりきて
をのれ時しるうきしまかはら

1258

安達原

そなたより霞やしたにいそくらん
あたちのまゆみはるはとなりと

1259

因幡山

きのふかも秋のたのもにつゆをきし
いなはの山も松の白雪

1260

鏡山

かゝみ山うつれる浪のかけなから
そらさへこほるありあけの月

戀廿首

伏見里

1261

ふえ竹のふしみのさとは名のみして
いつれの上にかねをもたつへき

霞浦

1262

はるかすみかすみのうらをゆく舟の
よそにも見えぬ人をこひつゝ

石瀬杜

1263

かみなひのいはせのもりのいはすとも
しれかししたにつもるくちはを

1264

筑波山

あしほ山やます心はつくはねの
そかひにたにも見らくなきころ

袖浦

1265

そてのうらたまらぬたまのくたけつゝ
よせてもとをくかへる浪哉

益田池

1266

人心いとゝますたの池水に
うへはしけれる名をうらみつゝ

高師濱

1267
續古

あたなみのたかしのはまのそなれ松
なれすはかけてわれこひめやも

阿波手杜

1268

かたいとのあたのたまのをよりかけて
あはてのもりにつゆきえねとや

志賀須加渡

1269

秋風になくねをたつるしかすかの
わたりし浪におとるそてかは

1270

濱名橋

あつまちやはまなのはしにひくこまも
さそまちわたるあふさかのせき

礧間浦

1271

梓弓いそまのうらにひくあみの
めにかけなからあはぬこひ哉

守山

1272

終夜夢さへ人めもる山は
うちぬるなかをたのみやはする

1273

佐野布奈檣

ことつてよさのゝふなはしはるかなる
よそのおもひにこかれわたると

安積沼

1274

如何せんあさかのぬまにおふときく
くさはにつけておつる涙を

松嶋

1275

ふくる夜を心ひとつにうらみつゝ
人まつしまのあまのもしほ火

1276

緒絶檣

ことのねも歎くはゝるちきりとて
をたえのはしになかもたえにき

1277

三熊野浦

時のまのよはの衣のはまゆふや
なけきそふへきみくまのゝうら

1278

鳴海浦

よそ人になるみの海のやへかすみ
わすれすとてもへたてはてゝき

1279

二見浦

ふたみかたいせのはまをきしきたへの
衣手かれてゆめもむすはす

名取河

1280

なとり河心にくたすむもれ木の
ことはりしらぬそてのしからみ

雑廿首

芳野河

1281

よしの河いはとかしはをこす浪の
ときはかきはそわかきみのみよ

鈴鹿河

1282

すゝかゝはやそせふみわたるみてくらも
きみか吉なかく千吉の長月

不盡山

1283

あまのはらふしのしは山しはらくも
けふりたえせず雪もけなくに

還山

1284

いかはかりふかきなかとてかへる山
かさなる雪をとへとまつらん

1285

海橋立

むはたまの夜わたる月のすむさとは
けにひさかたのあまのはしたて

明日香河

1286

さゝれいしはいはほとなりてあすか河
ふちせのこゑをきかぬみよ哉

鳥羽

1287

すゑとをきとはたの南しめしより
いく昔の花にみゆきふるらん

1288

辰市

しきしまのみちにわか名はたつのいちや
いさまたしらぬやまとことのは

吹飯浦

1289

こすなみにわか舌ふけるのうらみきて
うちぬるゆめもこのころそ見る

布引瀧

1290

ぬのひきのたきにたもとをあらそひて
わか年波のいつれたかけん

1291

長柄櫓

さもあらはあれなのみなからのはし／＼ら
くちすはいまの人もしのはし

玉河里

1292

手つくりやさらすかきねのあさつゆを
つらぬきとめぬたま河のさと

生浦

1293

なにゆへかそこのみるめもおふのうらに
あふことなしのなにはたつらん

1294

佐夜中山

開の戸をさそひし人はいてやらて
ありあけの月のさやの中山

1295

嵯峨野

むすひをきし秋のさかのゝいほりより
とこはくさはのつゆになれつゝ

1296

角太河

水くきのあとかきなかすゝみた河
ことつてやらむ人もとひこす

志加麻市

1297

はれぬまにまつあさきりをたちこめて
しかまのいちにいつるさと人

若浦

1298

よりくへき方もなきさのもしほ草
かきつくしてしわかのうちら波

相坂關

1299

きみに猶あふさか山もかひそなき
すきのふる葉にいろし見えねは

1300

御津濱松

まちこひし昔は今ものはれて
かたみひさしきみつのはま松

1301

春日同詠百首應 製和歌

參議從三位行治部卿兼侍從伊豫權守臣藤原朝臣定家上

春廿首

1302

はるかすみたつやと山のあしたより
さきあへぬ花を雪とやは見る
あさひさすかすかのをのゝをのつから
まつあらはるゝ雪のしたくさ

1303

あしかきはまちかき冬の雪なから

ひらけぬ梅にうくひすそなく

1304

梅花にほふやいつこくもかゝる

み山の松はゆきもけなくに

1305

むはたまの夜のまの風のあさといてに

おもふにすきてにほふ梅かえ

1306

くるとあくともかれぬ花にうくひすの

なきてうつろふこゑなをしへそ

1307

あらたまのこけのみとりにはるかけて

山のしつくも時はしりけり

1308

淺綠霞たなひく山かつの

衣はるさめ色にいてつゝ

1309

あおによしならのみやこの玉柳

色にもしるくはるはきにけり

1310

峯の雪とくらむ雨のつれ／＼と

山邊もよおす花のしたひも

1311

昨日けふ山のかひよりしらくもの

たつたのさくら今かさくらむ

1312

みよしのゝよしのは花のやとそかし

さてもふりせすにほふ山哉

1313

櫻花さきぬるころはやまなから

1314

いしまゆくてふ水のしら浪

もゝちとりさへつるはるのかす／＼に

いくよの花の見てふりぬらむ

1315

續拾

花の色にひとはるまけよかへるかり

ことしこしちのそらたのめして

1316

なかめつゝかすめる月はあけはてぬ

花のにほひもさとわかぬころ

1317

山のはをわきてなかむる春の夜に

花のゆかりのありあけの月

1318

ちる花のつれなく見えしなこりとて

くるゝもおしくかすむ山かけ

1319

色まかふのへのふちなみ袖かけて

みかりの人のかさしおるらし

1320

とはゝやな花なきさとにすむ人も

はるはけふとや猶なかむらん

夏十五首

1321

春の色にせみのは衣ぬきかへて

はつこゑをそき郭公哉

1322

しのはるゝときはの山のいはつゝし

はるのかたみのかすならねとも

1323

物ことにしくれのわきし松の色を

ひとつにそむる夏のあめ哉

1324

郭公たひなるけさのはつこゑに

まつさと見えよのきの橘

1325

ほとゝきす心つくしの山のはを

またぬにいつるいさよひの月

1326

いたつらくもゐる山のまつのはの

時そともなき五月雨のそら

1327

あやめ草ふくやさ月のなかき日に

しはしをやまぬのきの玉水

1328

秋たゝむいなはの風をいそくとて

みしふにまじる田この衣手

1329

あたらしやうかはのかゝりさしはへて

いとふかはせのありあけの月

1330

さゆりはのしられぬこひもある物を

身よりあまりてゆくほたる哉

1331

よそへてのかひこそなければまつ人は

こすのどこ夏花にさけとも

1332

夏衣かとりのおうらのうたゝねに

浪のよる／＼かよふ秋風

1333

このまもるかきねにうすきみか月の

影あらはるゝゆふかほの花

1334

ゆふたちの雲ふく風の時のまに

露ほしはつるをのゝしのはら

1335

續古

あすかゝはゆくせの浪にみそきして

はやくそ年のなかはすきぬる

此歌忘却似故殿御
哥後年見付可恥

秋廿首

1336

さらぬたにあたにちるてふさくらあさの

露もたまらぬ秋のはつ風

1337

たなはたの手たまもゆらにをるはたを

おりしもならふむしのこゑ哉

1338

わかやとは萩のしらつゆあともなし

たれかはとはむ野邊のふるみち

1339

おほかたにつもれは人のと許に

なかめし月も袖やぬれけん

1340

あはれのみいやとしのはに色まさる

月とつゆとののへさゝはら

1341

續後

秋の月河をとすみてあかす夜に

をちかた人のたれをとふらん

1342

袖のうへに思われしとのへとも

たへすやとかる月のかけ哉

1343

あつまやのゝきのほとなきいたひさし

いたくも月になれにけるかな

1344

まとろまてなかむる月のあけかたに

ねさめやすらむ衣うつなり

1345

續古

越きてゆくたかゝよひちのあさつゆそ

草のたももしほるはかりに

1346

さをしかのしからむはきも時すきて

かれゆくをのをうらみてそなく

1347

ひきむすふかりほのいほも秋くれて

嵐によはき松むしのこゑ

1348

秋の色のめにさやかなるふるさとに

なきてうつらのたれしのふらん

1349

をろかなるつゆやくさはにぬくたまを

今はせきあへぬはつしくれ哉

1350

かりかねの涙のつゆのたまなから

ぬきもさためすをるにしき哉

1351

もる山のしくれぬ秋を見てしかな

心つからやもみちはつると

1352

ちきりありてうつろはむとや白菊の

紅葉のしたのはなにさきけん

1353

なか月の紅葉の山のゆふしくれ

はるゝひかけもくもはそめけり

1354

泉河日もゆふくれのこまにしき

かたえおちゆく秋のもみちは

1355

このはもて風のかけたるしからみに

さてもよとまぬ秋のくれ哉

冬十五首

1356

こからしのもりのこすゑのあさな／＼

なにあらはるゝ神な月哉

1357

風さむみゝほのうらへをこく舟に

山のこの葉のきほひかほなる

1358

とまらしなよもの時雨のふるさとゝ

なりにしならの霜のくちはゝ

1359

かさゝきのはかひの山の山かせの

はらひもあへぬしものうへの月

1360

にほとりはたまものやともかれなくに

たのみしあしそあおはましらぬ

1361

冬草をむすふもあたにあかす夜の

枕もしらすあられふるなり

1362

色見えぬ冬の嵐の山風に

松のかれはそ雨とふりける

1363

ならしはもかれゆくきゝす影をなみ

たつやかりはのをのかありかを

1364

はまゝつのねられぬ浪のとまやかた

猶こゑそふるさよちとり哉

1365

身をしほるすみのやすきをうれへにて

氷をいそくあさの衣手

1366

なにはかたもとよりまかふみたれあしの

ほすゑをしなみはつ雪そふる

1367
續古

あけぬとていてつる人のあともなし

たゝ時のまにつもるしらゆき

1368
とはるゝをたれ許とやなかむ覽

雪のあしたのいはのかけみち

1369
いとゝしくふりそふ雪にたにふかみ

しられぬ松のうつもれぬらん

1370
むかひゆくむそちのさかのちかけれは

あはれもゆきも身につもりつゝ

戀十五首

1371
今そおもふいかなる月日ふしのねの

峯にけふりのたちはしめけん

1372

きのふけふくものはたてをなかむとて
見もせぬ人の思やはしる

1373

はつかりのとわたる風のたよりにも

あらぬおもひをたれにつたへむ

1374

まとろまぬしもをくよはのもゝはかき

はねかくしきのくたけてそなく

1375

續後

終夜月にうれへてねをそなく

いのちにむかふ物思ふとて

1376

くるゝ夜はおもかけ見えてたまかつら

ならぬこひする我そかなしき

1377

袖のうへもこひそつもりてふちとなる

人をは見ねのよそのたきつせ

1378

いかにしてむかひのをかにかるくさの

つかのまにたにつゆの影見む

1379

如何せん浪こす袖にちるたまの

かすにもあらぬしつのをたまき

1380

夢といへといやはかなゝる春の夜に

まよふたゝちは見てもたのます

1381

いしはしるたきある花のちきりにて

さそはゝつらし春の山かせ

1382

わくらはにかよふ心のかひもあらし

たのむよしのゝかさはかりは

1383

ねにたつるかけのたれおのたれゆへか

みたれて物は思そめてし

1384

秋のゝにおはなかりふくやとよりも

そてほしわふるけさのあさつゆ

1385

したひものゆふてもたゆきかひもなし

わするゝくさをきみやつけゝむ

雑十五首

1386

續古

あけぬとてゆふつけとりのこゑすなり

たれか別のそてぬらすらん

1387

なかめするけふもいりあひのかねのをとに
すきゆくかたを身にかそへつゝ

1388

山さとは猶さひしとそたちかへる

あくれはいそく心やすまて

1389

よそにのみゝ山のすきのつれもなく

もとの心はあらすなりつゝ

1390

それもうとし心なくさむうみ山は

身のよるへとも思ならはて

1391

心からいきうしといひてかへるとも

いさめぬせきをいてそわつらふ

1392

かきやれはけふりたちそふもしほくさ

あまのすさひにみやこゝひつゝ

1393

浪枕はまかせしろくやとる月

そてのわかれのかたみかほなる

1394

人もわかす山ちしくれてゆくゝもを

ともなふみねのそてのしつくは

1395

たまほこやたひゆく人はなへて見よ

くにさかへたる秋つしま哉

1396

きみか杵のあめのうるひはひろけれと

我そめくみの身にあまりぬる

1397

いかにしてくちにしたにのこのもとに

みちあるみよのはるをまちけん

1398

紫の色こきまてはしらさりき

みよのはしめのあまのは衣

1399

わかもうらになきてふりにしゝものつる

このころ見えて心やすめて

1400

いのりをきしわかふるさとのみかさ山

きみのしるへを猶おもふ哉

先撰二百首之愚哥有結番事仍可謂拾其遺又養和元年
企百首之初學建保四年書三卷之家集彼是之間再居拾
遺之官故爲此草名

建保四年三月十八日書之

參議治部卿兼侍從藤

開白左大臣家百首

貞永元年四月

詠百首和歌

權中納言定家

霞

續古

1401

しらさりき山よりたかきよはひまで
はるのかすみのたつを見むとも

1402

みよし野は春のかすみのたちとにて

1403

きえぬにきゆる峯の白雪

いつしかと宮このゝへはかすみつゝ

わかなつむへきはるはきにけり

1404

たつぬともあひ見むものかはるきては

ふかき霞のうらのはつしま

1405

いくはるのかすみのしたにうつもれて

をとろのみちのあとをとふらむ

櫻

1406

ちはやふる神杵のさくらなにゆへに

よしのゝ山をやとゝしめけむ

1407

さくらはなまちいつるはるのうちをたに

こふる日おほくなとにほふらん

1408

たつね見る花のところもかはりけり

身はいたつらのなかめせしまに

1409

くものうへちかきまもりにたちなれし

みはしの花のかけそこひしき

1410

庭のおもは柳さくらをこきませむ

はるのにしきのかすならすとも

暮春

1411

かすまさるわかあらたまの年ふれは

ありしよりけにおしきはる哉

1412

雪とふる花こそぬさのかとして

したふあとなきはるのかへるさ

1413

續古

にほふより春はくれゆく山ふきの

花こそはなのなかにつられ

1414

ちるはなのくものはやしもあれはてゝ

いまはいくかはるものこらし

1415

わすられぬやよひのそらのうらみより

はるのわかれそ秋にまされる

郭公

1416

たれしかもはつねきくらむ郭公

またぬ山ちに心つくさて

1417

ほとゝきすをのかさ月をつれもなく

猶こゑおしむ年もありけり

1418

山かつらあけゆくゝもにほとゝきす

いつるはつねもみねわかるなり

1419

あちきなきをちかた人の郭公

1420

それともわかぬのへのゆふくれ
袖のかの花にやとかれほとゝきす
今もこひしきむかしとおもはゝ

五月雨

1421

ぬきもあへすこほるゝたまのをはたえぬ
さみたれそむるのきのあやめに

1422

五月雨の日かすもくもゝかさなれは
見らくすくなきよもの山のは

1423

さみたれのくものまきれに中たえて
つゝきも見えぬ山のかけはし

1424 三わの山さ月のそらのひまなきに

ひはらのこゑそ雨をそふなる

1425 續古
たまほこやかよふたゝちも河と見て

わたらぬなかのさみたれのころ

早秋

1426 くれかたきはるのすかのねひきかへて

あくるよをそき秋はきにけり

1427 秋きぬとおきのは風はなのるなり

ひとこそとはねたそかれのそら

1428 風のをとの猶いろまさるゆふへ哉

ことしはしらぬ秋の心を

1429

きのふけふあさはかりの秋風に

1430

さそはれわたる木々のしらつゆ
手なれつるねやの扇をきしより
ところまくらもつゆこほれつゝ

月

1431

ときわかすそらゆく月の秋の夜を

1432

いかにちきりてひかりそふらん

した越きもおきふしまちの月の色に

身をふきしおるとこの秋風

1433

續拾

むかしおもふくさにやつるゝのきはより

ありしなからの秋のよの月

1434

なかき夜の月をたもとにやとしつゝ

わすれぬことをたれにかたらん

1435

秋の月たまきはるよのなゝそちに

あまりてものはいまそかなしき

紅葉

1436

山ひめのこきもうすきもなそへなく

ひとつにそめぬよものもみち葉

1437

やま人のうたひてかへるゆふへより

にしきをいそくみねのもみちは

1438

勅撰

しくれつゝそてたにほさぬ秋の日に

さこそみむろの山はそむらめ

1439

たつた山神のみけしにたむくとや

くれゆく秋のにしきをるらん

1440

今はとて紅葉にかきる秋の色を

さそともなしにはらふこからし

氷

1441

こほりゐておきなか河のたえしより

かよひしにほのあとを見ぬかな

1442

せたえしてみなはわかるゝ涙河

そこもあらはに氷とちつゝ

1443

冬の夜のなかきかきりはしられにき

ねなくにあくるそでのつらゝに

1444

そてのうへわたるをかはをとちはてゝ

そらふく風もこほる月かけ

1445

氷のみむすふさ山の池水に

みくりもはるのくるをまつらし

雪

1446

おいらくは雪のうちにそ思ひしる

とふ人もなしゆく方もなし

1447

いたつらに松のゆきこそつもるらめ

わかふみわけしあけほのゝ山

1448

いその神ふるのはゆきの名なりけり

つもる日かすをそらにまかせて

1449

夢かともさとの名のみやのこるらん

雪もあとなきをのゝあさちふ

1450

たれはかり山ちをわけてとひくらむ

また夜はふかき雪のけしきに

忍戀

1451

くちなしの色のやちしほこひそめし

したのおもひやいはてはてなん

1452

水くきの人つてならぬあとにたに

おもふこゝろはかきもなかさす

1453

うへしけるかきねかくれのをさゝはら

しられぬこひはうきふしもなし

1454

白露の越くとはなけくとはかりも

ゆめのたゝちやことかよふらん

1455

ことうらにこるやしほ木の名にたてよ
もえてかくれぬけふりなりとも

不遇戀

1456

よりかけてまたてになれぬたまのをの
かたいとなからたえやはてなん

1457

夜な／＼の月もなみたにくもりにき

かけたに見せぬ人をこふとて

1458

名とり河心のとはむことのはも
しらぬあふせはわたりかねつゝ

1459

1460

1461

1462

1463

あまのかるよそのみるめをうらみにて
よるはたもとにかゝるなみかは
わかこひよなにゝかゝれるいのちとて
あはぬ月日のそらにすくらむ

後朝戀

今のまのわか身にかきるとりのねを
たれうき物とかへりそめけむ
おきわひぬなかき夜あかぬくろかみの
そてにこほるゝつゆみたれつゝ
せきもりの心もしらぬわかれには
かならすたのむこのくれもなし

1464

あさつゆのをくをまつまのほとをたに

見はてぬゆめをなにゝたとへむ

1465

はしめよりあふはわかれときゝなから

曉しらて人をこひける

遇不逢戀

1466

いのちとてあひ見むこともたのまれす

うつる心の花のさかりは

1467

はるかなる人の心のもろこしは

さはくみなとにことつてもなし

1468

はかなしなゆめにゆめ見しかけるふの

それもたえぬるなかのちきりは

1469

海とのみあれぬるとこのあはれわか

身さへうきてとたれにつたへむ

1470

續古

色かはるみのゝなか山秋こえて

又とをさかるあふさかのせき

怨戀

1471

をのれのみあまのさかてをうつたへに

ふりしくこのはあとたにもなし

1472

あけぬなりをのか心のあたら夜は

むかしむすはぬちきりしられて

1473

おもふともこふともなにのかひかねよ

よこほりふせる山をへたてゝ

1474

なれし夜の月許こそ身にはそへ

ぬれてもぬるゝそてにやとりて

1475

道のへのひとことしけき思草

しものふりはとくちそはてぬる

旅

1476

みやこいてゝあさたつ山のたむけより

露をきとめぬ秋風そふく

1477

ゆふ日かけさすやをかへのたまさゝを

ひとよのやとゝたのみてそかる

1478

ふるさとにとまるおもかけたちそひて

たひにはこひのみちそはなれぬ

1479

なくさますいつれの山もすみなれし

やとをはすての月のたひねは

1480

ふしなれぬはまゝつかねのいはまくら

袖うちぬらしかへるうき波

山家

1481

猶しはし雲ゐるたにをたちかへり

みやこの月にいつるやまみち

1482

松風のをとにすみけむ山人の

もとの心は猶やしたはん

1483

月にふくあらし許やむかへけん

みなみの山のしものふるみち

1484

たにこしのましはのゝきのゆふけふり

よそめはかりはすみうからしや

1485

とこなるゝ山したつゆのおきふしに

そてのしつくは宮こにもにす

眺望

1486
勅撰

もゝしきのとのへをいつる夜ゐ／＼は

またぬにむかふ山のはの月

1487

ふきはらふもみちのうへのきりはれて

峯たしかなるあらし山哉

1488

泉河ゆきゝのふねはこきすきて

はゝそのもりに秋やゝすらふ

1489

つのかにのこやさく花といまも見る

いこまの山のゆきのむらきえ

1490

雲のゆくかたゝのおきやしくるらん

やゝかけしめるあまのいさり火

述懷

1491

神かせやみもすそ河にいのりおきし

心のそこやにこらさりけむ

1492

そのかみのわかゝねことにかけさりし

身のほとすくるおいのなみ哉

1493

まちえつるふるえのふちのはるの日に

こすゑの花をならへてそ見る

1494 續拾

はからすよ 忬にありあけの月にいてゝ

ふたゝひいそくとりのはつこゑ

1495

たちねのをよはすとをきあとすきて

みちをきはむるわかの人

祝

1496 續古

きみをいのるけふのたふとさかくしこそ

おさまれる 忬はたのしきをつめ

1497 續古

霜雪のしろかみまてはつかへきぬ

きみのやちよをいはひをくとして

1498

忬ゝふともかはらぬ竹のふしておもひ

越きてそのるきみのよはひを

1500

1499

きみか 昔をいくよろつ 昔とかそへても
なにゝたとへむ あかぬ心は

ひさにふる みむろの山のさか木はそ
月日はゆけといろもかはらぬ

拾遺愚草中

韻哥百廿八首 建久七年秋

仁和寺宮五十首 建久九年夏

院五十首 建仁元年春

同句題五十首 同年十一月

女御入內御屏風哥 建久元年正月卅八首

入道皇太后宮大夫九十賀算屏風哥

建仁三
八月十二日

畝勝四天王院名所御障子哥 建永二年四十六首

院廿首 建曆二年十二月

後仁和寺宮花鳥十二首

當時

仁和寺宮五十首 承久元年

權大納言家卅首

女御入内御屏風哥 寛喜元年十一月

韻哥

百廿八首和歌 建久七年九月十八日内大臣家 他人不詠

春

1501 いつしかといつるあさ日を見かさ山

けふよりはるのみねのまつ風

1502 かすみぬなきのふそ年はくれ竹の

ひとよはかりのあけほのゝ空

1503 むさしのゝ霞もしらすふる雪に

またわかくさのつまや籠れる

1504

こそもさそたゝうたゝねのたまくらに

はかなくかへるはるのよの夢

1505

谷ふかくまた春しらぬゆきのうちに

ひとすちふめる山人の蹤

1506

子日するのへのかたみに忝にのこれ

うへをく庭のけふのひめ松

1507

日はをそし心はいさやときわかつて

はるか秋かのいりあひの鐘

1508

白雲かきえあへぬ雪かはるのきて

かすみしまゝのみよしのゝ峯

1509

なにはかたあけゆく月のほの／＼と

かすみそうかふ浪のいり江に

1510

ふかき夜を花と月とにあかしつゝ

よそにそきゆるはるの缸

1511

あれはてゝはるの色なきふるさとに

うらやむとりそつはさ雙る

1512

風かよふ花のかゝみはくもりつゝ

はるをそわたるにはの缸

1513

ちる花にみきはのほかのかけそひて

春しも月はひろさはの池

1514

はるよたゝつゆのたまゆらなかめして
なくさむ花のいろは移ぬ

1515

あさつゆのしらぬたまのをありかほに
はきうへをかんはるの籬に

1516

あはれいかに霞も花もなれ／＼て
くもしくたにゝかへる鸕

夏

1517

はるの草の又夏草にかはるまで

今とちきりし日こそ遅けれ

1518

見ることに猶めつらしきかさし哉
神古かけたるけふの葵よ

1519

夏山の河かみきよき水の色の

ひとつにあおきのへのみち芝

1520

はるもいぬ花もふりにし人にゝて

又見ぬやとにまつそ遺れる

1521

ゆふまくれねにゆくからすうちむれて

いつれの山のみねに飛らん

1522

夏の夜はけにこそあかね山の井の

しづくにむすふ月の暉も

1523

しのゝめのゆふつけとりのなくこゑに

はしめてうすきせみのは衣

1524

いは井くむ松にまたるゝ秋かせに

まくすうらみはわれも歸らん

1525

ゆきなやむ牛のあゆみにたつちりの

風さへあつき夏のを車

1526

たちのほりみなみのはてにくもはあれと

てる日くまなきころの虚

オホソラ

1527

夏の夜は月そけちかき風すゝむ

ふせやのゝきのまやの餘に

1528

池水にすゑうちさわくうきくさは

まつゆふかせのふきや初むる

1529

大井河夏ことにさすかりやかた

いくとせか見るくたす桴を

1530

山かけはむすはぬそても風そふく

いはせく水におつるしら珠

1531

あとふかきわかたつそまにすきふりて

1532

なかめすゝしきにほの湖

折しもあれくものいつらにいる月の

そらさへおしきしのゝめの途

秋

1533

やへむくら秋のわけいる風の色を

われさきにとそしかは啼なる

1534

今よりとちきりし月を友として

いく秋なれぬ山の棲に

1535
新古今

旅人のそてふきかへす秋風に

ゆふ日さひしき山の梯

1536

つま木こりみちふみならず山人も

このゆふきりや猶迷らん

1537

色わかぬ秋のけふりのさひしきは

やとよりをちのやとにたく柴

1538

秋の夜はつむといふ草のかひもなし

まつさへつらきすみよしの涯

1539

山水のたえゆくをとをきてとへは

つもるあらしのいろそ埋める

1540

よしさらはともなひはてよ秋の月

こけのいはやに舌は乖とも

1541

影を又あかすも月のそふる哉

おほかた秋のころの哀に

1542

色にいてゝあきのこすゑそうつりゆく

むかひのみねのうかふ坏

1543

續後

昔たに猶ふるさとの秋の月

しらすひかりのいく廻とも

1544

おもふとも今はのこらし秋の色よ

峯ふく風にこの葉摧けぬ

1545

かり人の袖こそうたてしほれぬれ

つゆふかくさのさとの鶉に

1546

衣うつひゝきそ風をしたひくる

こすゑはとをき月の隣に

1547

をく霜にむすひはてつるのはら哉

つゆのひかりも花の匂も

1548

よろつ忝とちきれる月の影なれは

おしまてくらす秋の宮人

冬

1549

をちの山こなたのそらのむらしくれ

くもれはかゝるころのうき雲

1550

家ゐすると山かすその神な月

あけぬくれぬとしくれをそ聞

1551

このはちるいたまの月のくもらすは

かはるしくれをいかに分まし

1552

月やそれすこし秋あるまかき哉

ふかきしも夜の菊の薫カラリに

1553

さひしとよをきまよふしものゆふまくれ

をかやのこやのゝへのひと村

1554

物おもはぬ人のきけかし山さとの

こほれる池にひとりなく鴛

1555

はしたかのかへるしらふに霜をきて

をのれさひしきをのゝしの原

1556

かつ見つゝわか舌はしらぬはかなさよ

ことしもくれぬけふも昏を

1557

ゆくとしのさのみすきゆくはてよさは

いつれかひとつかへる河瀬

1558

くもさえて峯のはつ雪ふりぬれは

ありあけのほかにも月そ残れる

1559

山ふかき雪やいかにと思いつる

なさけ許の舌こそ難けれ

1560

いとゝしくやまゐのそてやこほるらん

かへる河風身に寒くして

1561

雪うつみ氷そむすふをしかもの

かけとたのめる池のま菅を

1562

すみかまやをのゝさと人あさゆふは

山ちをやくとゆき還つゝ

1563

かきくらすみやこの雪も日かすへぬ

けさいかならんこしのしら山

1564

おもふとていふかひもなきおほそらに

すへはやとしのこえぬ開とて

戀

1565

むねの内よしれかしいまもくらへ見は

あさまの山はたゝぬ煙を

1566

しるへしてなるゝ心のかひそなき

きみをおもひのつもる年／＼

1567

かはりゆく袖の色こそ悲けれ

ねをなくはてよ秋のうつ蟬

1568

今はみなおもひつくはの山おろしよ

しけきなけ木とふきも傳へよ

1569

かたみかはしるへにもあらず君こひて

たゝつく／＼とむかふ霄

オホソラ

1570

たれゆへにたえぬとたにも白雲の

よそにやゝかて思消なん

1571

おもかけはたつたの山のはつもみち

色にそめてしむねそ焦るゝ

1572

おくるよりなけきそいとゝかすまさる

むなしき日のみつもる朝は

1573

露時雨さてたに人に色見せよ

なかめしまゝのすゑのあさ茅に

1574

なり見はやしはしもかけをやとすやと

手にむすはるゝ水の泡とも

1575

をのつからはるすきはともたのむらん

くもにつけたるとりのふる巢は

1576

たまほこのゆくてのみちもすきわひぬ

おもふあたりのやとの梢は

1577

みたれあしのしたのこひちよいくよへぬ

年ふるたつのひとりなく皐

1578

人こゝろしものかれ葉のさとふりて

やかてあとなしもとの蒿に

1579

いとゝしくたえぬなけ木はすゑのまつ

我よりこゆる浪の高さに

1580

いかさまにせきかとゝめむいろかはる

人のこのはのすゑのしら濤

述懷

1581

年月は昨日はかりの心ちして

見なれし友のなきそ多かる

1582

いかにせんはてなき人は忝にもなし

とまらぬこまのかけは過めり

1583

苔のしたにうつまぬ名をはのこすとも

はかなのみちやしきしまの哥

1584

かのきしにこのたひわたせのりのふね

うまれてしぬるふるさとの河

1585

みかさ山ふもと許をたつねても

あらましおもふみちの遐さ

1586

なにはかたいかなるあしかつみをきし

杳々にその身のあとならぬ家

1587

なくさめは秋にかきらぬそらの月

はるよりのちもおもかけの花

1588

さてもうしことしもはるをむかへつゝ

なかも／＼むはての霞よ

1589

いつかはうき世のゆめをさますへき

わか思ふ山のみねの嵐に

1590

いそかはやおもふによらぬちきりあらは

すまでもやまむくさの庵を

1591

たれもきけなくねにたつるかりの世ゝ

ゆきてはかへるきたと南と

1592

續後

つゐに又いかにうき名のとゝまらん

心ひとつの世をは慙れと

1593

三代をへてほしをいたゝく年ふりて

まくらにおつる秋のはつ霜

1594

如何せんみ山の月はしたへとも

猶思をくつゆのふる郷

1595

さま／＼にはるのなかはそあはれなる

にしの山のはかすむゆふ陽に

1596

いかて猶まとひしやみをあきらめん

このとふ方をてらす光に

山家

1597

ふもとにや峯たつくもとなかむらん

わかあけほのおはぬ櫻を

1598

山ふかみ人は昔のやとふりて

月よりさきにのきそ傾

1599

心からきく心ちせぬすまひ哉

ねやよりおろすまつかせの聲

1600

たきのをとにあらしふきそふあけかたは

ならはすかほにゆめそ驚

1601

うきよりはすみよかりけりと許よ

あとなきしもにすきたてる庭

1602

年へぬなやとたちいつるしゐかもと

よりゐしいしもこけ青くして

1603

わけのほるいほのさゝはらかりそめに

ことゝふそてもつゆは零つゝ

1604

いくとせそ見しゝはのとは人すまて

石井の水にしける萍

1605

わかやとのひかりとしめてわけいは

月かけしろしみやまへの秋

1606

影たえて山もやぬしはしのふらん

むかしせきれし水の流に

1607

山さとの門田ふきこす夕風に

かりいほのうへもにほふあき萩

1608

たちかへり山ちかなしきゆふへかな

今はかきりのやとを求て

1609

我そあらぬ雪はむかしにゝたれとも

たれかはとはん冬の山陰

1610

いさゝらはたつねのほりてせきすへむ

たゝこのうへそ月のいる岑

1611

をのつからしらぬあるしものこしけり

やともるすきのもとの心は

1612

あらしふく月のあるしはわれひとり

はなこそやと人とも尋れ

旅

1613

おもかけのひかふる方にかへり見る

みやこの山は月織くして

1614

いとゝしくいへちへたつるゆふきりに

あまのもしほ火けふりたち添

1615

ふるさとのそらさへあらぬ心ち哉

ほとなきとこのをかやふく簷

1616

旅衣そてふく風やかよふらん

わかれていてしやとの簾に

1617

たちぬるゝ日かすにつけておもなれぬ

峯なるくもゝ谷の氷も

1618

いてゝこしはるはふゆのにかはるまで

もとのちきりを猶や馮まん

1619

おきをあめるこやのかりねのたゝひとよ

風にまたゝくよひの燈

1620

すきゆけと人のこゑするやともなし

入江の浪に月のみそ澄

1621

たのむ哉その名もしらぬみ山木に

しる人えたる松と杣とを

1622

あくるよりふるさとゝをきたひまくら

心そやかてうらしまの函

1623

有つゝとまたれしもせぬをかのかけ

ひとよのやとにをかやをそ芟

1624

くろかりしわかこまのけのかはるまで

のほりそなつむみねの巖に

1625

山をこえ海をなかむるたひのみち

ものゝあはれはをしそ几たる

1626

もろともにくくりあひけるたひまくら

なみたそそゝくはるの盃

1627

人のくに夜は長月のつゆしもよ

身さへくちにしとこの轡に

1628

こし方もゆくさきも見ぬ浪のうへの
風をたのみにとはす舟の帆

守覺法親王家

仁和寺宮五十首

建久九年夏

詠五十首和歌 左近衛權少將藤原定家

1629

春十二首

いつしかとゝ山のかすみたちかへり
けふあらたまるはるのあけほの
わかなつむ宮このゝへにうちむれて
はなかとそ見る峯のしらゆき

1630

1631

うくひすはなけともいまたふるさとの

雪のした草はるをやはしる

1632

新古

おほそらは梅のにほひにかすみつゝ

くもりもはてぬはるのよの月

1633

道のへにたれうへをきてふりにけん

のこれる柳はるはわすれす

1634

新古

しもまよふそらにしほれしかりかねの

かへる翅にはるさめそふる

1635

おもかけにこひつゝまちし櫻花

さけはたちそふ峯の白雲

1636

春をへてゆきとふりにし花なれと

猶みよしのゝあけほのゝそら

1637

さくら花うつりにけりなと許を

なけきもあへすつもるはるかな

1638

新古

春の夜の夢のうきはしとたえして

峯にわかるゝよこくものそら

1639

年ふともわすれむ物かかみかせや

みもすそかはのはるのゆふくれ

1640

ゆくはるよわかるゝ方もしらくもの

いつれのそらをそれとたに見む

夏七首

1641 へたてつなけふたちかふる夏衣

ころもまたへぬ花のなこりを

1642 たかためのなくやさ月のゆふへとて

山郭公猶またるらん

1643 山のはに月もまちいてぬよをかさね

猶くものほるさみたれのそら

1644 ^{新古} ゆふくれはいつれのくものなこりとて

花たちはなに風のふくらん

1645

ゆふたちのすきのしたかけ風そよき

夏をはよそにみわの山もと

1646

續古

うちなひくしけみかしたのさゆりはの

しられぬほとにかよふ秋風

1647

松かけやきしによるなみよる許

しはしそすゝむすみよしのはま

秋十二首

1648

しきたへの枕にのみそしられける

またしのゝめの秋のはつかせ

1649

秋きぬとたかことのはかけそめし

おもひたつたの山のしたつゆ

1650

あはれ又けふもくれぬとなかめする

くものはたてに秋風そふく

1651

さとはあれて時そともなき庭のおもゝ

もとあらのはきはき秋は見えけり

1652

秋風にわひてたまちる袖のうへを

われとひかほにやとる月哉

1653

年ふれは涙のいたくゝもりつゝ

月さへすつる心ちこそすれ

1654

今よりはわか月かけとちきりをかむ

のはらのいほのゆくすゑの秋

1655

たれもきくさそなゝらひの秋のよと

いひてもかなしさをしかのこゑ

1656

秋風にそよく田のものいねかてに

まつあけかたのはつかりのこゑ

1657

露さえてねぬ夜の月やつもるらん

あらぬあさちのけさの色哉

1658

ひとりきくむなしきはしに雨おちて

わかこしみちをうつむこからし

1659

年ことのつらさとおもへとうとまれす
たゝけふあすの秋のゆふくれ

冬七首

1660

けふそへに冬の風とはおもへとも

たへすこきおろすよものこのはか

1661

霜うつむをのゝしのはらしのふとて

1662

しはしも越かぬ秋のかたみを

神な月うちぬるゆめもうつゝにも

1663

このはしくれとみちはたえつゝ

あしかものよるへのみきはつらゝみて

うきねをうつすおきの月かけ

1664

たまほこのみちしろたへにふる雪を

みかきていつるあさ日かけ哉

1665

そなれ松こすゑくたくる雪をれに

いはうちやまぬ浪のさひしさ

1666

あらたまの年のいくとせくれぬらん

おもふおもひのおもかはりせて

雑十二首

祝二首

1667

君かよはたかのゝ山にすむ月の

まつらんそらにひかりそふまで

1668

うきなき君かみむろの山水に
いくちよのりのすゑをむすはむ

述懷三首

1669

あすしらぬけふのいのちのくるゝまに
この昔をのみもまつなけく哉

1670

かはかりとうらみすてつるうき身ほと
うまれんのちの猶かたき哉

1671

たちかへり思ふこそ猶かなしけれ
名はのこるなるこけのゆくゑよ

閑居二首

1672

新古

わくらはにとはれし人も昔にて

それより庭のあとはたえにき

1673

のこる松かはる木くさのいろならて

すくる月日もしらぬやと哉

旅三首

1674

たひ衣きなれの山の峯のくも

かさなるよはをしたふ夢哉

1675

新古

ことゝへよおもひおきつのはまちとり

なく／＼いてしあとの月かけ

1676

おもかけの身にそふやとに我まつと
越しまぬくさやしもかれぬらん

1677

眺望二首

かへり見るくもよりしたのふるさとに

かすむこすゑは春のわかくさ

1678

わたのはら浪とそらとはひとつにて
いる日をうくる山のはもなし

院五十首

建仁元年春

春日應 太上皇 製和歌五十首

正四位下行左近衛權少將兼安藝權介臣藤原朝臣定家上

春

1679 にほのうみやけふよりはるにあふさかの

山もかすみてうらかせそふく

1680 白妙のそてかと思わかなつむ

みかきかはらのむめのはつ花

1681 かすむよりうくひすさそひふく風に

と山もにほふはるのあけほの

續後

1682 心あてにわくともわかしむめの花

ちりかふさとのはるのあはゆき

1683

あつさゆみいそへのこまつはるといへは

かはらぬ色も色まさりけり

1684

もゝちとりこゑものとかにかすむ日に

はなとはしるしよもの白雲

1685

千吉までの大宮人のかさしとや

くもゐのさくらにほひそめけん

1686

はるかすみかさなる山をたつぬとも

みやこにしかし花のにしきは

1687

春やいかに月もありあけにかすみつゝ

こすゑの花は庭のしらゆき

1688

年の内のきさらきやよひほともなく
なれてもなれぬ花のおもかけ

夏

1689

さくら色のそてもひとへにかはるまで
うつりにけりなすくる月日は

1690

春くれていくかもあらぬを山かせに
はすゑかたよりなひくした草

1691

神まつるう月まちいてゝさく花の
えたもとをゝにかくるしらゆふ

1692

はるかなるはつねはゆめかほとゝきす
くものたゝちはうつゝなれとも

新
古

1693 さみたれの月はつれなきみ山より

ひとりもいつる郭公哉

1694 ことわりやうちふすほともなつのよは

ゆふつけとりのあか月のこゑ

1695 夏の日をみちゆきつかれいなむしろ

なひく柳にすゝむ河風

1696 かけやとす水のしらなみたちかへり

むすへとあかぬ夏のよの月

1697 山めぐりそれかとそ思したもみち

うちゝるくれのゆふたちのくも

1698

夏はつる扇につゆもをきそめて
みそきすゝしきかも河風

秋

1699

あきかせよそゝやおきのはこたふとも
わすれねこゝろわか身やすめて

1700

ゆふつくよいるのゝおはなほの／＼と
風にそつたふさをしかのこゑ

1701

玉匣ふたみのうらの秋の月

あけまくつらきあたら夜のそら

1702

秋のよは月の桂も山のはも

あらしにはれてくもゝまかはす

1703

秋をへて昔はとをきおほそらに

わか身ひとつのものと月かけ

1704

つゆおつるならの葉あらく吹風に

なみたあらそふ秋のゆふくれ

1705

はつかりのたよりもすくる秋かせに

ことゝひかねて衣うつこゑ

1706

たをやめの袖かもみちかあすか風

いたつらにふくきりのをちかた

1707

山ひめのぬさのおひ風ふきかさね

ちひろのうみに秋のもみちは

1708

ものことにわすれかたみのわかれにて
そをたにのちとくるゝ秋哉

冬

1709

月日のみすきの葉しくれふく嵐

冬にもなりぬ色はかはらて

1710

神な月しくれてきたるかさゝきの

はねにしもをきさゆるよのそて

1711

ふゆかれてあおはも見えぬむらすゝき

風のならひはうちなひきつゝ

1712

と山よりむらくもなひきふく風に

あられよこきる冬のゆふくれ

1713

さえとおる風のうへなるゆふつく夜
あたるひかりにしもそちりくる

1714

おほよとの松に夜ふくる浪風を

うらみてかへる友ちとり哉

1715

なかめつゝ夜わたる月にをくしもの

すきてあとなきひとゝせのそら

1716

神さひていはふみむろの年ふりて

猶ゆふかくる松の白雪

1717

春しらぬたくひをとへはみかさ山

このころふかきゆきのむもれ木

1718

日もくれぬことしもけふになり
にけり
かすみを雪になかめなしつゝ

雑

1719

久方のあまてる月日のとかなる

きみのみかけをたのむはかりそ

1720

秋つしまほかまで浪はしつかにて

昔にかへるやまとことのは

1721

あふけともこたへぬそらのあおみとり

むなしくはてぬゆくすゑも哉

1722

わか友とみかきの竹もあはれしれ

よゝまてなれぬ色もかはらて

1723

なけかすもあらさりし身のそのかみを

うらやむはかりしつみぬる哉

1724

身をしれは人をもよをもうらみねと

くちにしそてのかはく日そなき

1725

とゝせあまりみとせはふりぬよるの霜

をきまよふ袖にはるをへたてゝ

1726

わかたのむ心のそこをてらし見よ

みもすそかはにやとる月かけ

1727

かすかのやしたもえわふるおもひくさ

きみのめくみをそらにまつ哉

1728

くもりなき日よしの宮のゆふたすき
かくるおもひのいつかはるへき

院句題五十首

建仁元年十一月

冬日同詠五十首應 製和歌

正四位下行

上

初春待花

1729

春霞かすみそめぬると山より
やかてたちそふ花のおもかけ

1730

山路尋花

みよしのゝはるもいひなしのそらめかと
わけいる峯にゝほへしらくも

1731

山花未遍

山影は猶まちわひぬ櫻花
いたりいたらぬはるをうらみて

1732

朝見花

かす／＼にさきそふ花の色なれや
峯のあさけのやへのしらくも

1733

遠村花

たれかすむのはらのすゑのゆふかすみ
たちまよはせる花のこのもと

1734

故郷花

あすか河かはらぬはるの色なから
みやこの花といつにほひけん

1735

田家花

はるをへてかとたにしむるなはしろに
花のかゝみのかけそかはらぬ

1736

古寺花

ちらすなよかさきの山の櫻花

おほふ許のそてならずとも

花似雪

1737

みよしのはるの日かすやつもるらん

枝もとをゝの花のしらゆき

河邊花

1738

すゝか河やそせの波のはるの色は

ふりしくはなのふちとこそなれ

1739

深山花

山ふしの人もきて見ぬこけのそて
あたらさくらをうちはらひつゝ

1740

暮山花

たれと又くものはたてにふきかよふ
あらしのみねの花をうらみん

1741

古溪花

山人のあとなきたにのゆふかすみ
こたへぬ花にゝほふはるかぜ

1742

關路花

さくら色によもの山かせそめてけり
衣のせきのはるのあけほの

1743

羈中花

おもふ人心へたてぬかひもあらし
さくらのくものやへのをちかた

1744

湖上花

さゝなみやさくらふきかへすうら風を
つりするあまのそてかとそ見る

1745

橋下花

あともなき山ちのさくらふりはへて
とはれぬしるきたにのしはゝし

1746

花下送日

このもとにまちしさくらをおしむまで
おもへはとをきふるさとのそら

1747

庭上落花

はるの色ときえすはけさも見る許
すこしこすゑにはなのゝこらて

1748

暮春惜花

いかにせむはるもいくかのさくら花
方もさためぬ風のほひを

此詞又詠

1749

初秋月

つゆやをくやとかりそむる秋の月
またひとへなるうたゝねのそて

1750

月前草花

宮木のに風まちわふるはきのえの
つゆをかそへてやとる月かけ

1751

雨後月

かきくもりわひつゝねにしよころたに
なかめしそらに月そはれゆく

1752

松間月

秋のつゆもたゝわかためやをかへなる
まつのはわけの月の衣手

1753

山家月

をのつから身を宇治山にやとかれは
さもあらぬそらの月もすみけり

1754

月前竹風

ふしわひて月にうかるゝみちのへの
かきねの竹をはらふ秋風

1755

野徑月

めくりあはむそらゆく月のゆくすゑも
またはるかなるむさしのゝはら

1756

澤邊月

人しれぬあしまに月のかけとめて
いり江のさはに秋風そふく

1757

月前聞鴈

白妙の月もよさむに風さえて
たれに衣をかりのひところゑ

1758

浦邊月

浪風の月よせかへる秋の夜を
ひとりあかしのうらみてそぬる

1759

月照瀧水

秋の月そてになれにし影なから
ぬるゝかほなるぬのひきのたき

杜間月

1760

つゆにうつる月より秋のいろにいてゝ
ときはのもりのかけそかひなき

月前秋風

1761

吹はらふとこの山風さむしろに
衣手うすし秋の月かけ

江上月

1762

忘却又詠雖見苦力不及

すみの江の松かねあらふしら浪の
かけてよるとも見えぬ月かけ

1763

月前蟲

よるの風さえゆく月にたか秋の
衣越りはへむしのわふらん

1764

月前聞鹿

秋のゝにさゝわくるいほのしかのねに
いくよつゆけき月を見つらん

1765

旅泊月

むしあけの松としらせよ袖のうへに
しほりしまゝの浪の月かけ

1766

月前草露

草の原月のゆくゑにをくつゆを
やかてきえねと吹嵐哉

1767

菊籬月

しらきくのまかきの月の色許
うつろひのこる秋のはつしも

1768

暮秋曉月

いまいくか秋もあらしのよこくもに
いつれはしらむ山のはの月

1769

續拾

寄雲戀

しられしなちしほのこの葉こかるとも
しくるゝくもにいろし見えねは

寄風戀

1770

いかにせんひとまたのめぬくれ竹の
すゑ葉ふきこす秋風のこゑ

寄雨戀

1771

あまそゝきほとふるのきのいたひさし
ひさしや人めもるとせしまに

1772

寄草戀

今はとてわするゝたねやしけりにし
わかすむさとはのきのしたくさ

1773

寄木戀

せくそてよせゝのむもれ木あらはれて
又こす浪にくちやはてなん

1774

寄鳥戀

かりにたにとはれぬさとの秋風に
わか身うつらのところはあれにき

1775

寄嵐戀

わひはつるわか思ひねのゆめちさへ
ちきりしられてふくあらし哉

1776

寄船戀

こぬ人をつきせぬ浪にまつら舟
よるとは月のかけをのみゝて

1777

寄琴戀

かたみそとたのみしことのかひもなく
うきなかのをのたえやはてなん

1778

寄衣戀

見しかけよさてやゝまあゐのすり衣
みそきかひなきみたらしのなみ

女御入内御屏風哥

文治五年十二月

月次御屏風十二帖和歌

左近衛權少將定家

正月

小朝拜列立の所

霞しくはるのはしめの庭のおもに
まつたちわたるくものうへ人

1779

1780

野邊小松原に子日する所

こまつはらはるの日かけにひきつれて

千杵のけしきをそらに見る哉

山野に霞立わたりたる所 住吉松もあり

1781

春かすみいまゆくすゑをゝしこめて

おもふもとをきすみよしの松

二月

春日祭社頭儀

1782

みかさ山さしけるつかひけふくれは

すきまに見ゆるそてのいろ／＼

1783

花中に鶯ある所 人家あり

さとわかぬはるのひかりをしりかほに
やとをたつねてきゐるうくひす

人家并野邊に梅花さきたる所

1784

をちこちのにほひは色にしられけり
まきのとすくるむめのした風

三月

澤邊春駒

1785

はるふかくさはへのまこもゝえぬれは
たちもはなれすあさるこま哉

1786

山野并人家に櫻花盛さきたる所

もろ人の心にかほる花さかり

のとけきみよも色に見えけり

人家の庭に藤盛にひらけたる所

1787

はるの日のひかりてります庭のおもに

昔にかへるやとの藤波

四月

1788

人家に更衣したる所 卯花かきねあり

けふことにひとへにかふる夏衣

猶いくとせをかさねてかきん

1789

賀茂下御社神館邊葵付たる人參所
ちはやふるかものみつかきとしをへて
いくよのけふにあふひなるらん

早苗うへたる所

1790

あめのしたけしきもしるくとりなへは
水を心にまつそまかする

五月

1791

人家の雲間に郭公ある所
いくさとの人にまたれてほとゝきす
やとのこすゑに聲ならすらん

1792

昌蒲かりたる所 又人家に葺たる所もあり
あやめ草なかきちきりをねにそへて
ちよのさ月といはふけふ哉

1793

人家庭になてしこさきたる所
たねまきてちりたにすへぬとこなつの
花のさかりはきみのみそ見む

六月

1794

山井邊に人／＼納涼したる所 人家あり
なかき日に春秋とめるやとやこれ
むすへは夏もしらぬまし水

1795

野邊杜間に夏草しける所
わけゆけは夏のふかさそしられる
もりのした草すゑもはるかに

1796

河邊に六月祓したる所
みそきしてむすふ河なみとしふとも
いく昔すむへき水のなかれそ

七月

1797

山野并人家に秋風吹たる所 萩あり
てる月のひかりそふへき秋きぬと
きくもすゝしきおきのうは風

1798

野花盛開て人々集たる所
をしなへて花に心はいりにけり
野邊のちくさをわくるもろ人

春日野に鹿ある所

1799

かすか山あさひまつまのあけほのに
鹿もかひある秋とつくなり

八月

1800

人家池邊に人々翫月所
あまつ風みかくゝもゐにてる月の
ひかりをうつすやとの池水

1801

會坂開駒迎に行向所

開水の影もさやかに見ゆる哉
にこりなきよのもち月のこま

田中に人家ある所

1802

秋ふかき山田のなるこをしなへて
おさまれるよのためしにそひく

九月

1803

山中に菊盛に開たる邊に仙人ある所
かきりなき山ちのきくのかけなれは
つゆもやちよをちきりをくらん

1804

山野并人家紅葉盛なるを人々翫所
うつしうふる花も紅葉もおりことに
たつぬる人の心をそ見る

海邊に霧たちたる所

1805

たちまさるうらわのきりになか月の
ひかすはかりをあらはにそ見る

十月

海邊に千鳥ある所 海人しほやあり

1806

きみかよをやちよとつくるさよちとり
しまのほかまでこゑきこゆなり

1807

あしろに人あつまりたる所

このころはせゝのあしろに日をへつゝ
事とふ人のたゆるまそなき

1808

江澤邊に寒蘆しけれる所 　つるあり

ゆくするもいくよのしもかをきそへむ
あしまに見ゆるつるのけ衣

十一月

1809

五節参入の所

白妙のあまのは衣つらねきて
をとめまちとる雲のかよひち

1810

賀茂臨時祭社頭儀式 上御社

ふるそてはみたらし河にかけさえて
そらにそすめるうとはまの聲

野邊に鷹狩したる所

1811

いそきたつ日なみのみかりゆきふかし
かたのゝをのゝ冬のあけほの

十二月

内侍所御神樂儀式

1812

そらさえてまたしもふかきあけかたに
あかほしうたふくものうへ人

1813

山野樹竹雪ふりつみたる所 人家あり
くれ竹も松のすゑはもおれふして
ちよをこめたるゆきのうち哉

1814

歳暮に下人等自山松切て出たる所
民もみな君かやちよをまつかえに
かすとりそむる年のくれ哉

1815

泥繪御屏風和歌

夏

樹陰納涼

すゝみにとみちはこのまにふみなれて
夏をそたとるもりのしたかけ

冬

池邊氷

やとからは夜をへてこほる池水も
かさねむちよのかけそ見えける

入道皇太后宮大夫九十賀算屏風哥

建仁三年八月被撰定

屏風哥十二首

左近權中將藤原定家

春

霞

若菜

冰 千鳥 冬 紅葉 月 秋野 秋 納涼 五月雨 郭公 夏 花

1817

雪

花山のあとをたつぬる雪のいろに
年ふるみちのひかりをそ見る

叡勝四天王院名所御障子歌

名所御障子和謠

正四位下行左近衛權中將藤原朝臣定家

春日野

1818

かすか野にさくや梅かえゆきまより
けふはゝるへとわかなつみつゝ

1819
續後

吉野山

みよしのは花にうつろふ山なれは
はるさへみゆきふるさとのそら

三輪山

1820

けふこすはみわのひはらのほとゝきす
ゆくての聲をたれかきかまし

龍田山

1821

たつた山よものこすゑの色なから
しかのねさそふ秋の河風

1822
續古

泊瀬山

をはつせや峯のときは木ふきしほり
嵐にくもる雪の山もと

難波浦

1823

春の色はけふこそみ津のうらわかみ
あしのわか葉をあらふしらなみ

住吉濱

1824

しらきくのにほひし秋もわすれくさ
おふてふきしの春のうら風

1825

葦屋里

あしのやのかりねの
とこのふしのまに
みしかくあくるなつ
のよな／＼

1826

布引瀧

ぬのひきのたきのし
らいと夏くれは
たえすそ人の山ちた
つぬる

1827

續後

生田杜

秋とたにふきあへぬ
風にいろかはる
いくたのもりのつゆ
のしたくさ

1828

若浦

よるのつるなくねふりにし秋のしも
ひとりそほさぬわかの人

1829

吹上濱

しほ風のふきあけの雪にさそはれて
浪の花にそはるはさきたつ

1830

交野

風をいたみかたのゝとたちしたはれて
しのふかれはにあられふるなり

1831

水成瀬河

このさとおいせぬちよはみなせ河
せきいるゝ庭のきくのした水

1832

阪磨浦

すまのあまのなれにし袖もしほたれぬ
開ふきこゆる秋のうら風

1833

明石浦

あかしかたいさをちこちもしらつゆの
をかへのさとのなみの月かけ

1834

志加麻市

きみか舌はたれもしかまのいちしるく
年ある民のあまつそら哉

1835

松浦山

たらちめやまたもろこしにまつら舟
ことしもくれぬ心つくしに

1836

因幡山

これも又わすれし物をたちかへり
いなはの山の秋のゆふくれ

1837

高砂

たかさこの松はつれなきおのへより
をのれ秋しるさをしかのこゑ

野中清水

1838

たまほこのみちの夏草すゑとをみ
のなかのし水しはしかけ見む

海橋立

1839

ふみも見ぬいくのゝよそにかへるかり
かすむなみまのまつとつたへよ

1840

宇治河

あしろ木や波のきりまに袖見えて
やそうち人はいまかとふらん

大井河

1841

續後

おほゐかはまれのみゆきに年へぬる
もみちのふなちあとはありけり

鳥羽

1842

もろ人もちよのみかけにやとしめて
とはにあひ見む松の秋風

1843

伏見里

ふしみ山つまとふしかのなみたをや
かりほのいほのはきのうへのつゆ

1844

泉河

いつみ河かはなみきよくさすさほの
うたかたなつをゝのれけちつゝ

1845

小鹽山

はるにあふをしほのこ松かす／＼に
まさるみとりのすゑそひさしき

1846

會坂關

今はとてうくひすさそふ花のかに
あふさか山のまつかすむらん

1847

志賀浦

しかのうらや氷もいくへゐるたつの
しものうはけにゆきはふりつゝ

1848

鈴鹿山

秋はきてつゆはまかふとすゝか山
ふるもみちはに袖そうつろふ

1849

二見浦

ますかゝみふたみのうらにみかゝれて
神風きよき夏のよの月

1850

新古

大淀浦

おほよとのうらにかりほすみるめたに
霞にたえてかへるかりかね

1851

鳴海浦

なるみかた雪の衣手ふきかへす
うらかせをもくのこる月かけ

1852

濱名橋

きりはるゝはまなのはしのたえ／＼に
あらはれわたる松のしきなみ

1853

宇津山

うつの山うつる許の峯の色は
わきてしくれや思そめけん

1854

佐良之奈里

嵐ふく山の月かけ秋なから
よもさらしなのさとのしらゆき

1855

富士山

ほとゝきすなくやさ月もまたしらぬ
雪はふしのねいつとわくらん

1856

淨見關

きよみかたそてにも浪の月を見て
かたへもまたぬかせそすゝしき

1857

武藏野

むさしのゝゆかりの色もとひわひぬ
身なからかすむはるのわかくさ

1858

白河關

くるとあくと人を心にをくらさて
雪にもなりぬしらかはのせき

老耄忘却兩度詠之左道

阿武隈河

1859

思ひかねつまとふちとり風さむみ
あふくま河の名をやたつぬる

安達原

1860

しくれゆくあたちのはらのうすきりに
またそめはてぬ秋そこもれる

1861

續後

宮城野

うつりあへぬ花のちくさにみたれつゝ
風のうへなるみや木のゝつゆ

安積沼

1862

ふみしたくあさかのぬまの夏草に
かつみたれそふしのふもちすり

鹽竈浦

1863

霞とも花ともいはしはるのかけ
いつこはあれとしほかまのうら

建曆二年十二月院よりめされし廿首

冬日同詠廿首應 製和歌

從三位行侍從臣藤原朝臣定家上

春十首

1864

かすか山みねのあさひのはるのいろに
たにのうくひすいまやいつらし

1865

さくらあさのをふのうらかせ春ふけは
かすみをわくるなみのはつ花

1866

我そあらぬうくひすさそふ花のかは
今も昔のはるのあけほの

1867

雲ちゆくかりのは風もにほふらん

むめさく山のありあけのそら

1868

あさみとりたまぬきみたるあをやきの

枝もとをゝにはるさめそふる

1869

あらたまの年にまれなる人までと

さくらにかこつはるもすくなし

1870

たのむへき花のあるしもみちたえぬ

さらにやとはんはるの山さと

1871

みよしのやたきつかはうちの春の風

神杵もきかぬ花そみなきる

1872

いくかへりやよひのそらをうらむらん

たにゝはゝるの身をわすれつゝ

1873

色にいてゝうつろふはるをとまれとも

えやはいふきの山ふきの花

戀五首

1874

をのつからみるめのうらにたつけふり

風をしるへのみちもはかなし

1875

草のはらつゆをそゝてにやとしつる

あけてかけ見ぬ月のゆくゑに

1876

なくなみたやしほの衣それなから

なれすはなにのいろかしのはむ

1877

秋の色にさてもかれなてあしへこく

たなゝしをふね我そつれなき

1878

續後

ちきりをきしすゑのはらのゝもとかしは
それともしらしよそのしもかれ

雑五首

1879

あとたれてちかひをあふく神もみな
身のことはりにたのみかねつゝ

1880

ひさかたのくものかけはしいつよまで

ひとりなけきのくちてやみぬる

1881

思ふことむなしき夢のなかそらに

たゆともたゆなつらきたまのを

1882

日かけさすをとめのすかた我も見き

おいすはけふのちよのはしめに

1883

ふしておもひおきてそいのるのとかなれ

よろつよてらせくものうへの月

1884

詠花鳥和歌

各十二首

參議藤原

正月 柳

うちなひきはるくる風の色なれや
日をへてそむるあをやきのいと

二月 櫻

かさしおるみちゆき人のたもとまで
さくらにゝほふきさらきのそら

1885

1886

三月 藤

ゆくはるのかたみとやさくふちの花
そをたにのちの色のゆかりに

1887

四月 卯花

白妙の衣ほすてふ夏のきて
かきねもたわにさけるうのはな

1888

五月 盧橘

ほとゝきすなくやさ月のやとかほに
かならずにほふのきのたちはな

1889

六月 常夏

おほかたの日かけにいとふみな月の
そらさへおしきとこ夏の花

1890

七月 女郎花

秋ならてたれもあひ見ぬをみなへし
ちきりやをきしほしあひのそら

1891

八月 鹿鳴草

秋たけぬいかなる色とふく風に
やかてうつろふもとあらのはき

1892

九月 薄

花すゝき草のたもとのつゆけさを
すてゝくれゆく秋のつれなさ

1893

十月 殘菊

十月しもよのきくのほはすは
秋のかたみになにをゝかまし

1894

十一月 枇杷

冬の日には木くさのこさぬしもの色を
葉かへぬえたの花そまかふる

1895

十二月 早梅

いろいろつむかきねのゆきのころなから
年のこなたにゝほふむめかえ

鳥

1896

正月 鶯

春きてはいくよもすきぬあさといてに
うくひすきゐるまとのむら竹

1897

二月 雉

かり人の霞にたとるはるの日を
つまとふきしのこゑにたつらん

1898

三月 雲雀

すみれさくひはりのとこにやとかりて
野をなつかしみくらすはるかな

四月 郭公

1899

郭公しのふのさとにさとなれよ
またうの花のさ月まつころ

五月 水鶏

1900

まきのとをたゝくゝひなのあけほのに
人やあやめのゝきのうつりか

1901

六月 鵜

みしか夜のうかはにのほるかゝり火の
はやくすきゆくみな月のそら

1902

七月 鵲

なかき夜にはねをならふるちきりとて
秋まちわたるかさゝきのはし

1903

八月 初鴈

なかめつゝ秋の半もすきのとに
まつほとしるきはつかりの聲

1904

九月 鶉

人めさへいとふかくさかれぬとや
ふゆまつしもにうつらなくらん

1905

十月 鶴

ゆふ日かけむれたるたつはさしなから
しくれのくもそ山めぐりする

1906

十一月 千鳥

千鳥なくかもの河せのよはの月
ひとつにみかく山あるのそて

1907

十二月 水鳥

な
か
め
す
る
池
の
氷
に
ふ
る
ゆ
き
の

か
さ
な
る
と
し
を
ゝ
し
の
け
衣

仁和寺宮五十首

詠五十首和歌

民部卿藤原定家

春十二首

初春

1908

は
る
の
色
と
た
の
む
ま
て
や
は
な
か
め
つ
る

い
ふ
許
な
る
山
の
霞
を

1909

雪中鶯

松の葉はいまもみゆきのふるさとに
はるあらはるゝうくひすのこゑ

槁邊霞

1910

影たえてしたゆく水もかすみけり
はまなのはしのはるのゆふくれ

行路梅

1911

玉梓のゆくて許を梅花
うたてにほひの人したふらん

1912

春月

山のはも霞のほかの花のかに
このころふかきいさよひの月

1913

岸柳

をそくときいつれの色にちきるらん
花まつころのきしのあをやき

1914

旅春雨

たひまくらこやもかくれぬあしの葉の
ほとなきとこにはるさめそふる

遠歸鴈

1915

いくかすみゆくのゝすゑはしら雲の
たなひくそらにかへるかりかね

山花

1916

あしひきの山さくら戸をまれにあけて
花こそあるしたれをまつらん

関花

1917

さくら花たか昔のわか木ふりはてゝ
すまのせきやのあとうつむらん

庭花

1918

續後

跡たえてとはれぬ庭のこけの色も
わする許に花そちりしく

河款冬

1919

續後

山吹の花にせかるゝおもひ河
浪のちしほはしたにそめつゝ

夏七首

社外花

1920

みぬさとりみわのはうりやうへをきし
ゆふしてしろくかくるうのはな

1921

早苗多

うへくらす緑のさなへさとことに
民の草葉のかすも見えけり

1922

里郭公

ほとゝきすたれしのふとかおほあらきの
ふりにしさとをいまもとふらん

1923

岡郭公

またしらぬをかへのやとの郭公
よそのはつねにきゝかなやまむ

1924

夜盧橘

たちはなの花ちるさとのゆふつくよ
そらにしられぬ影やのこらむ

1925

籬瞿麥

なてしこのたのむまかきもたわむまで
夜のまの露のぬけるしらたま

1926

江螢

こきかへるたなゝしを舟おなし江に
もえてほたるのしるへかほなる

秋十二首

早秋

1927

あまの河わたせの浪に風たちて
やゝほとちかき鵲のはし

萩露

1928

わきてよもあまとふかりのをきもせし
やとからふかきはきのあさつゆ

萩風

1929

今よりのゆふくれかこつしたをきを
うちつけにふく秋のはつ風

尋蟲聲

1930

まつむしのなく方とをくさく花の
いろ／＼おしきつゆやこほれむ

山家月

1931

月ならてたれそま山のかけはかり
ふかきしはやの秋をとほまし

野徑月

1932

武藏野はつゆをくほとのをければ
月を衣にきぬ人そなき

1933

船中月

しらさりき秋のしほちをこく舟は
いか許なる月を見るときも

1934

曉鹿

なかき夜にあかすや月をしたふらん
みねゆくしかのありあけのこゑ

1935

河霧

あすかゝはふちせもしらぬ秋のきり
なにゝふかめて人へたつらん

1936

擣衣幽

秋風にさそはれきえてうつ衣
をよはぬさとのほとそきこゆる

夕紅葉

1937

龍田姫くものはたてにかけてをる

秋の衣はぬきもさためす

殘菊句

1938

をきそめていくよつもれるにほひとも
いさしらきくの花のしたつゆ

冬七首

朝時雨

1939

秋すきて猶うらめしきあさほらけ
そらゆくゝもゝうちしくれつゝ

竹霜

1940

いつ杳までなれてふりぬる河竹の
またしたかけにしもそをきそふ

池水鳥

1941

にほとりのしたのかよひもたえぬらん
のこる浪なき池の氷に

1942

嶋千鳥

はまひさしなけのかたみか友千鳥
とわたりすつるおきのこしまに

1943

松雪

したゝへすこすゑおれふすよな／＼に
松こそうつめみねのしらゆき

1944

湖雪

にほのうみやみきはのほかのくさ木まで
みるめなきさの雪の月かけ

1945

惜歲暮

思やれさすかにものゝと許も
うらみぬふしにつもる年／＼

戀六首

寄雲戀

1946

いこま山いさむる峯にゐるくもの
うきておもひはきゆる日もなし

寄露戀

1947

道のへのあたなるつゆをゝきとめて
ゆくてにけたぬこひそかなしき

1948
續後

如何せんあまのもしほ火たえすたつ
けふりによはる浦風もなし

寄煙戀

寄草戀

1949

すゑまでとたれかちきりし秋の霜
昔かたりの庭のしたくさ

寄鳥戀

1950

會坂のゆきゝにたつるとりのねの
なく／＼おしきあか月そうき

1951

寄枕戀

思いつるちきりのほともみしかよの
はるのまくらにゆめはさめにき

雜六首

曉述懷

1952

をのつからまたありあけの月を見て
すむともなしのうきにたへける

閑中燈

1953

つく／＼とあけゆくまとのともし火の
ありやと許とふ人もなし

1954

山旅

わきてなと我しもたへぬつゆけさそ
山ちはたれもたひ人そゆく

1955

海旅

あくる夜のゆふつけとりたちわかれ
浦なみとをくいづるふな人

1956

野旅

のへのつゆうつりにけりなかり衣
はきのしたはをわくとせしまに

1957

寄松祝

おほかたの松のちとせはふりぬとも
人のまことはきみそかそへん

權大納言家卅首

詠三十首和歌

民部卿

早春霞

1958

たちそめてけふやいくかのあさまたき
かすみもなれぬはるのさ衣

澤春草

1959

いつの日か色にはいてむよるのつる
なくやさはへの雪のしたくさ

曉梅

1960

まきのとの夜わたる梅のうつりかも
あかぬわかれのありあけのかけ

花満山

1961

花さかりそらにしられぬ白雲は
たなひきのこす山のはもなし

江上暮春

1962

ほり江こく霞のをふねゆきなやみ
おなしはるをもしたふころ哉

1963

溪卯花

かへるさのゆふへは北にふく風の
波たてそふる岸の卯花

1964

野郭公

宮木のゝこのしたつゆに郭公
ぬれてやきつる涙かるとて

1965

雨後鶉河

うかひ舟むらさめすくるかゝり火に
くもまのほしのかけそあらそふ

1966

月前萩

萩の葉も心つくしの聲たてつ
あきはきにける月のしるへに

1967

夕蟲

つれ／＼と秋の日をくるたそかれに
とふ人わかぬまつむしのこゑ

1968

海邊鹿

秋のしかのわか身こす浪ふく風に
つまを見ぬめのうらみてそなく

1969

閑庭薄

まねくとして草のたもとのかひもあらし
とはれぬさとのふるきまかきは

名所擣衣

1970

續古

久方の桂のさとのさよ衣
おりはへ月の色にうつなり

朝寒蘆

1971

あさしものいかにをきけるあしのはの
ひとよのふしにいろかはるらん

1972

深夜千鳥

をのれなけいそくせきちのさよちとり
鳥のそらねも聲たてぬまに

1973

故郷雪

みよしのはまれのとたえのくもまとて
昨日の雪のきゆる日もなし

1974

聞聲戀

いへはえにをさふる袖もくちはてぬ
たまのをことの秋のしらへに

1975

稀戀

まちわたるあふせうらやむあまの河
そのほとしらぬ年の契に

1976

増戀

色わかぬやみのうつゝのひとことに
袖のちしほはいとゝそめつゝ

1977

怨戀

かけてたに又いかさまにいはみかた
猶なみたかき秋のしほ風

被忘戀

1978

身をすてゝ人のいのちをゝしむとも
ありしちかひのおほえやはせん

旅行

1979

かへり見るそのおもかけはたちそひて
ゆけはへたゝる峯のしらくも

旅宿

1980

山かけやあらしのいほのさゝ枕
ふしまちすきて月もとひこす

1981

旅泊

こきよせてとまるとまりの松風を
しる人かほにいそくゝれ哉

山家松

1982

しのはれむ物ともなしにをくら山
のきはの松そなれてひさしき

山家橋

1983

竹の戸の谷のしはゝしあらためて
猶よをわたるみちしたふらし

1984

山家苔

しられしないはのしたかけやとふかき
苔のみたれても思ふとも

1985

寄神祇祝

かすか山峯のこのまの月なれは
ひたりみきにそ神もまもらん

1986

寄水懷舊

せく人もかへらぬ浪の花のかけ
うきをかたみのはるそかなしき

1987

寄雲述懷

なへて
昔のな
さけ
ゆるさ
ぬは
るのく
も
たのみ
しみ
ちは
へた
ては
てゝ
き

寛喜元年十一月女御入内御屏風和哥

月次御屏風十二帖和歌

定家

正月

元日

1988

やとことにみやこはゝるのはしめとて
松にそきみの千杵いはふなる

若菜

1989

とふひのはまたふるとしの雪まより
めくむわかなそはるいそきける

1990

霞

春のきるたもとゆたかにたつ霞
めくみあまねきよもの山のは

二月

梅

1991

野も山もおなし雪とはまかへとも
はるは木ことにゝほふむめかえ

柳

1992

浪のよる柳のいとのうちはへて
いくちよふへきやとゝかはしる

1993

網

をくあみの霞をむすふはる風に

浪のかさしの花そさきそふ

三月

櫻

1994

山さくら花のしたひもときしあれは

さなからにほふはるの衣手

款冬

1995

谷河の春もちしほの色そめて

ふかきやよひの山吹の花

1996

藤

紫のくものしるしの花なれは

たつ日もおなしやとのふちなみ

四月

更衣

1997

もろ人の袖もひとへにをしなへて

夏こそ見ゆれけふきたりとは

葵

1998

勅撰

久方の桂にかくるあふひ草

そらのひかりにいく昔なるらん

1999

早苗

を山たのむろのはやわせとりあへす
そよくいなはのころやまつらん

五月

昌蒲

いつかとそまちしぬま江のあやめくさ
けふこそなかきためしにはひけ

2000

郭公

ほとゝきすをのかときはのもりのかけ
おなしさ月のこゑもかはらす

2001

2002

瞿麥

さきまさるいやはつ花の日をへつゝ
まかきにあまるやまとなてしこ

六月

山井

2003

たつねても夏にしられぬすみか哉
もりのした風山の井の水

納涼

2004

風渡はまゝつかえのたむけくさ
なひくにつけて夏やすきぬる

2005

六月祓

夏衣おりはへてほす河波を

みそきにそふるせゝのゆふして

七月

秋風

2006

おきつ浪あさけすゝしき秋風も

まつのちとせそゝらにきこゆる

野花

2007

もろ人の心いるらしあつさ弓

ひくまのゝへの秋はきの花

2008

蟲

山さとのこやまつむしの聲までも
くさむらことにちよいのるなり

八月

鹿

2009

草も木も色のちくさにをりかくる
野山のにしきしかそたちける

月

2010

ことはりのひかりさしそへ夜はの月
あきらけき舌の秋のなかには

2011

初鴈

秋きりのたつやとまちしこしちより
けふはみやこのはつかりのこゑ

九月

菊

2012

老をせく菊のした水手にむすふ
このさと人そちよもすむへき

田家

2013

民の戸のあまつそらある秋の日に
ほすやをしねのかすもかきらす

2014

紅葉

たつたひめてそめのつゆの紅に
神杵もきかぬみねの色哉

十月

水鳥

2015

池にすむをしのけ衣よをかさね
あかす見なるゝ水のしら波

千鳥

2016

淡路嶋ゆきゝの舟の友かほに
かよひなれたるうちとり哉

2017

網代

あしろ木や浪のよる／＼てる月に
つもるこのはのかすもかくれす

十一月

鶴

2018

浦にすむたつのうへにとをくしもは
ちよふる色そかねて見えける

鷹狩

2019

いはせのやとりふみたてゝはしたかの
こすゝもゆらに雪はふりつゝ

2020

炭竈

くにとめる民のけふりのほと見えて

雲まの山にかすむすみかま

十二月

氷

2021

にほの海や氷をてらす冬の月

浪にますみのかゝみをそしく

雪

2022

みよしのゝみゆきふりしくさとからは

時しもわかぬありあけのそら

歳暮

2023

あしひきの山ちにふかきしはの戸も
春の隣は猶やわすれぬ

泥繪御屏風

石清水臨時祭

2024

勅撰

ちりもせし衣にすれるさゝ竹の
大宮人のかさすさくらは

重陽宴

2025

こゝのへのとのへもにほふ菊のえに
詞のつゆもひかりそへつゝ

拾遺愚草下

部類哥

春

建久五年夏左大將家哥合 題名所

春二首之中 志賀浦

2026

こほりとくはるのはつかせたちぬらし
かすみにかへるしかのうらなみ

建仁元年正月七日院に年始哥講

せられ侍し日 初春祝

2027

春ことのかものはいろのこまなれと
けふをそひかむちよのためしに

2028

松間鶯

まつの葉もはるはわけとやゆふつく日
さすやをかへにきゐるうくひす

朝若菜

2029

霞たちこのめはるさめきのふまで
ふるのゝわかなけさはつみてむ

承久元年七月内裏哥合十首之内

野徑霞

2030

かすか野ゝかすみの衣山かせに
しのふもちすりみたれてそゆく

2031

正治二年九月院初度哥合若草 十首之内

うちなひきはるのみそらもみとりにて
かせにしらるゝ野邊のわかくさ

雪間若菜といふことを

2032

いつしかとゝふひのわかなうちむれて
つめともいまたゆきもけなくに

老後閑居つれ／＼のあまりとふらひ
まうてきたる人／＼の哥よみ侍しに

初聞鶯

2033

あらたまのとしのはつこゑうちはふき
あさけのそらにきゐるうくひす

2034

霞中梅

とひこかしたちえはむめの見えすとも
にほひをこめてたつかすみかは

2035

湖邊梅花

けふそとふしかつのあまのすむさとを
うくひすさそふ花のしるへに

2036

旅宿早春

枕とて草のはつかにむすへとも
ゆめもみしかきはるのうたゝね

2037

三宮より十五首哥めされし春哥中
あすかゝはとをきむめかえにほふ夜は
いたつらにやは春風のふく

2038

建保四年潤六月内裏哥合 春哥 十首之中
しるしらすわきてはまたす梅花
にほふはるへのあたら夜の月

2039

土御門内大臣家哥合 密有臨幸
春題六首之中 梅香留袖
梅花ありとや袖のにほひゆへ
やとにとまるはうくひすのこゑ

翠柳誰家

2040

うちなひきはるのやとりやこれならむ
そとの柳ぬしはしらねと

内裏哥合に水邊柳

2041

はるの日に岸のあをやきうちなひき
なかき忝ちきるたきのしらいと

同題 家會

2042

そめかくるはなたのいとのだま柳
したゆく水もひかりそへつゝ

江上霞 内裏哥合

2043

はるかすみかすめるそらのなにはえに
心ある人や心見ゆらむ

建保二年二月内裏詩哥合 野外霞

2044
續拾

たちなるゝとふひのゝもりをのれさへ

霞にたとるはるのあけほの

2045

松の雪きえぬやいつこはるの色に

みやこのゝへはかすみゆくころ

建仁元年三月盡日哥合霞隔遠樹

2046
續古

みつしほにかくれぬいそのまつのはも
見らくすくなくかすむはるかな

羈中見花

2047

かり衣たちうき花のかけにきて
ゆくすゑくらすはるのたひゝと

内裏詩哥合山居春曙二首之中

2048

と山とてよそにも見えしはるのきる
衣かたしきねてのあさけは

2049

内裏哥合 夜歸鴈

つれもなくかすめる月のふかきよに
かすさへ見えすかへるかりかね

海邊歸鴈

2050

さとのあまのしほやき衣たちわかれ
なれしもしらぬはるのかりかね

賀茂社哥合 御幸日 曉歸鴈

2051

花のかもかすみてしたふありあけを
つれなく見えてかへるかりかね

2052

暮山花

たか春のくものなかめにくれぬらむ
やとかる花の峯のこのもと

攝政殿にて哥を詩にあはせらるへ
しとておなし題を二首よませられ
し詩哥合とかやの初也 此後連々有此事

花添山氣色

2053

春の花の雲のにほひにはつせ山

かはらぬいろそゝらにうつろふ

2054

たますたれおなしみとりもたをやめの

そむる衣にかほるはるかぜ

2055

正治二年三月左大臣家哥合 曉霞
はつせ山かたふく月もほの／＼と
かすみにもるゝかねのをと哉

朝花

2056

吉のつねの雲とは見えす山櫻
けさやむかしのゆめのおもかけ

建保三年五月哥合 和哥所春山朝

2057

このねぬるあさけの山の松風は
霞をわけて花のかそする

2058

建仁二年三月三躰とかやおほせられて
めされし春哥

花さかり霞の衣ほころひて

みねしろたへのあまのかく山

2059

秀能か人／＼によませ侍し五首中花哥

おほかたのまかはぬくもゝかほるらむ

さくらの山の春のあけほの

三宮十五首之中

2060

もゝちとりなくやきさらきつく／＼と

このめはるさめふりくらしつゝ

2061

みよしのはゝるのにほひにうつもれて
かすみのひまも花そふりしく

建久五年夏左大將家哥合泊瀬山

2062

かねのをとも花のかほりになりはてぬ
をはつせ山のはるのあけほの

同六年二月同家五首春哥

2063

山のはゝかすみはてたるしのゝめの
うつろふ花にのこる月かけ

(2064)

花のさかりに大宮大納言のもとより
かすならぬやとにさくらのおり／＼は
とへかし人のはるのかたみに

返し

2064

おほかたの春にしられぬならひゆへ
たのむさくらもおりやすくらむ

殷富門院皇后宮と申ゝ時まいりて
侍しに権亮大輔なとさふらひて夕

花といふことをよみしに

つま木こりかへる山ちのさくら花

あたらにほひをゆくてにや見る

2065

建久七年三月關白殿宇治にて

山花留客といふことを當座

2066

春きての花のあるしにとひなれて
ふるさとうとき袖のうつりか

中宮女房船にて人／＼うたよみ侍しに

2067

たつぬとてならふる舟の衣手に
花もさらにや春をしるらん

大内の花さかりに宮内卿藤少將なと

にさそはれて

2068
新
古

春をへてみゆきになるゝ花のかけ
ふりゆく身をもあはれとやおもふ

建保五年四月十四日院にて庚申

五首 春夜

2069

山のはの月まつそらのにほふより

花にそむくるはるのともし火

建保元年内裏詩哥合 山中花夕

2070

しくれせし色はにほはすからにしき

たつたのみねのはるのゆふかせ

2071

續古

さくらかり霞のしたにけふくれぬ

ひとよやとかせはるの山ひと

建保二年内裏詩哥合 河上花

2072

續古

花の色のおられぬ水にこすさほの
しつくもにほふ宇治のかはをさ

2073

續後

なとり河はるのひかすはあらはれて
花にそしつむせゝのむもれ木

内裏哥合 朝落花

2074

庭もせにうつろふころのさくら花
あしたわひしきかすまさりつゝ

2075

新勅

同詩哥合 山居春曙 二首之内

名もしるし峯のあらしも雪とふる

山さくら戸のあけほのゝそら

建保四年潤六月内裏哥合 春 十首之中

2076

ちる花は雪とのみこそふるさとを

心のまゝに風そふきしく

正治二年九月十首哥合 落花

2077

わかきつるあとたに見えす櫻花

ちりのまかひのはるの山風

院に詩哥合とてめされし 元久二年六月

水郷春望

2078

宮木もりなきさの霞たなひきて

むかしもとをきしかのはなその

2079

あしろ木にさくらこきませゆくはるの

いさよふなみをえやはとゝむる

承久元年七月内裏哥合 深山花

2080

山人もすまていく岬のいしのゆか

霞に花は猶にほひつゝ

2081

暮春雨

うくひすのかへるふるすやたとるらん
くもにあまねきはるさめのそら

左大臣殿よりやへさくらをたまふ

とて 承久三年三月

(2082)

いたつらに見る人もなきやへさくら
やとからはるやよそにすきなん

御返し

2082

やへさくらやとのさかりのちかけれは
このはるの日そひかりそふらん

2083

おなし三月八日内よりしのひてめ

されし三首のうち 野花

かくしつゝちらすは千舌もさくらさく
のへのいくかにはるのすくらん

海霞

2084

浦にたつもしほのけふりしたふらし
かすみすてたるはるのゆくてを

老後仁和寺宮しのひておほせられ

し五首 河上花

2085

みなの河峯よりおつるさくら花
にほひのふちのえやはせかるゝ

2086

野外花

ふりまかふさくらいろこきはる風に
野なるくさ木のわかれやはする

庭上花

2087

月草の色ならなくにうつしうへて
あたにうつろふ花さくら哉

閑中花

2088

わか身よにふるともなしのなかめして
いくはるかせに花のちるらん

2089

權大納言家五首之中 開路花 貞應三年

山さくら花のせきもるあふさかは

ゆくもかへるもわかれかねつゝ

土御門内大臣家哥合 水邊躑躅 春六首

2090

たつた河いはねのつゝしかけ見えて

猶水くゝるはるのくれなる

故郷款冬

2091

山吹のこたへぬ色につゆおちて

さとのむかしはとふかひもなし

雨中藤花

2092
續拾

しゐて猶そてぬらせとやふちの花
はるはいくかのあめにさくらん

山家暮春

2093

ちる花に谷のしはゝしあとたえて
いまよりはるをこひやわたらん

2094

三位中將公衡卿家にて旅宿三月盡
いほりさは山かみねのゆふかすみ
たえてつれなくすくるはる哉

夏

春後思花

2095

わすられぬやよひのそらをしたふとて
あお葉にゝほふ花のかもなし

郭公初聲

2096

まつほとやさすかにしるき郭公
ことしわすれぬくものをちかた

土御門内大臣宰相中將に侍し時五首

哥よませられ侍し中に外花

2097

ゆふつく夜いりぬるかけもとまりけり
外花さける白河のせき

承元二年祭使かむたちにとまりたる

あしたにをくり侍し

續古

2098

思やるかりねのゝへのあふひくさ

きみを心にかくるけふ哉

返し 使少將忠明朝臣

(2098)

葵草かりねのゝへのあはれをも

たれことのはにかけてとはまし

建保三年五月和哥所哥合夕早苗

2099

あらたまの年あるみよの秋かけて

とるやさなへにけふもくれつゝ

2100

建久六年二月左大將家五首夏

あれまくも人はおしまぬふるさとの
ゆふかせしたふのきのたちはな

建久六年民部卿經房卿家哥合に

初郭公

2101

かはらすもまちいてつる哉郭公
月にほのめくこそこのふるこゑ

三宮より十五首哥めされし夏哥

2102

とへかした霞もきりもたなひかぬ
のきのあやめのあけほのゝそら

2103

時すきすかたらひつくせ郭公

たかさみたれのそらおほれせて

院北面にて講せられし二首 昌蒲

2104

てなれつゝすゝむいは井のあやめくさ

けふはまくらに又やむすはん

郭公

2105

まちあかすさよのなか山なか／＼に

ひとこゑつらきほとゝきす哉

2106

建仁元年三月盡日哥合雨後郭公

さみたれのなこりの月もほの／＼と
さとなれやらぬほとゝきす哉

2107

正治二年二月左大臣家哥合夕郭公

郭公たそかれ時のくもまより
われなのりてそやとはとふなる

2108

五月雨朝

たまみつのゝきもしとろのあやめくさ
さみたれなからあくるいくかさ

庭夏草

2109

あけまきのあとたにたゆるにはもせに
をのれむすへとしけるなつくさ

建仁二年三月六首めされし夏哥

2110

さみたれのふるの神すき／＼かてに
こたかくなのるほとゝきす哉

承元二年潤四月四日和哥所雨中郭公

2111

たかためにぬれつゝしゐてほとゝきす
ふるともあめの山ちわくらん

秀能五首哥中郭公

2112

こひすとやなれもいふきのほとゝきす
あらはにもゆと見ゆる山ちに

建保四年潤六月内裏哥合十首之中夏

2113

郭公たかしのゝめをねにたてゝ
山のしつくにはねしほるらん

承久元年七月内裏哥合 曉郭公

2114

新後

ほとゝきすいつるあなしの山かつら
いまやさ与人かけてまつらし

水邊草

2115

かりねせし玉江のあしにみかくれて
秋のとなりの風そすゝしき

2116

續後

建保五年四月十四日庚申五首夏曉
なきぬなりゆふつけとりのしたりおの
をのれにもにぬよはのみしかさ

建仁二年六月和哥所にて當座

田家夏月

2117

かとたふくほむけの風による／＼は
月そいなはの秋をかりける

水風晚涼

2118

したくゝる水よりかよふ風のをとに
秋にもあらぬ秋のゆふくれ

建久五年夏左大將家哥合 龍田河夏

2119

ゆふくれは山かけすゝしたつた河
みとりのかけをくゝるしらなみ

名所夏月

2120

影きよきなつみのかはと秋かけて
しらゆふ花をてらすよの月

山納涼

2121

夏の日のさすともしらぬみかさ山

松のみかけそますかけもなき

權大納言家海上螢

2122

みつしほにいりぬるいそをゆくほたる
をのかおもひはかくれさりけり

建仁二年六月みなせ殿のつり殿に
いてさせたまうて六首題をたまは
りて御製にあはせられ侍し中に

河上夏月

2123

たかせ舟くたすよかはのみなれさほ

とりあへすあくるころの月かけ

2124

海邊見螢

すまのうらもしほの枕とふほたる
かりねのゆめちわふとつけこせ

山家松風

2125

松かけやと山をこむるかきねより
夏のこなたにかよふ秋風

2126

建仁元年三月盡日哥合松下晚涼

このくれを夏とはたれかいは井くむ
松かけはらふ山おろしのかせ

攝政殿詩哥合 水邊涼自秋

2127

雪とのみおつるしらあわに夏きえて

秋をもこゆるたきのいはなみ

2128

夏衣秋たにたゝぬ神な月

井せきの浪のいそくしくれに

2129

續拾

建保四年潤六月内裏哥合 夏

なつはつるみそきにちかき河風に

いはなみたかくかくるしらゆふ

秋

松尾哥合に初秋風 建曆二年

續後

2130

あらたまのことしもなかはいたつらに
なみたかすそふおきのうは風

建久五年夏左大將家哥合 秋宮城野

2131

秋きぬな萩ふく風のそよさらに
しはしもためぬ宮木のゝつゆ

阪磨開

2132

古やはうき秋やはすくすゝまのせき
うら風こゆるそてのしら波

建保三年七夕内裏七首

2133

あまの河水かけくさのうちなひき

たまのかつらもつゆこほるらん

2134

天河ふるきわたりもうつろひて

月のかつらそいろにいてゆく

2135

あまのかは／＼とのなみの秋風に

くもの衣をたつやとそまつ

2136

天河手たまもゆらにをるはたの

なかきちきりはいつかたえせん

2137

天河もみちのはしのいろに見よ

秋まつそてのくれをまつほと

2138

天河あれにしとこをけふはかり

うちはらふそてのあはれいくとせ

2139

天河あくるいはともなさけしれ

秋のなぬかのとしのひとよを

建久六年二月左大將家五首秋

2140

あきといへとこの葉もしらぬはつ風に

われのみもろきそてのしらたま

閑中草花

2141

あとたえて風たにとはぬはきのえに
身をしるつゆはきゆる日もなし

2142

元久元年七月宇治御幸山嵐

かへり見るすそのゝくさ葉かたよりに
限なき秋の山おろしの風

2143

正治二年九月院初度哥合山嵐

秋のあらしひとはもおしめみむろ山
ゆるすしくれのそめつくすまで

建保元年内裏詩哥合 野外秋望

2144

むらさめのたまぬきとめぬ秋風に

いくのかみかくはきのうへのつゆ

2145

なかめつゝくさのたもとほうつろひぬ

かりのなみたも越ちのしのはら

同四年潤六月内裏哥合 秋

2146

續後

なをさりのをのゝあさちにをくつゆも

草葉にあまる秋のゆふくれ

承久元年内裏哥合 秋夕露

2147

ゆふくれの草のいほりの秋のそて
ならはぬ人やしほらても見む

建永元年七月和歌所哥合 朝草花

2148

あさな／＼した葉もよほすはきのえに
かりのなみたそ色にいてゆく

海邊月

2149

新古

もしほくむ袖の月かけをのつから
よそにあかさぬすまのうら人

2150

建久八年秋哥あまたよみける中に
なかめつゝ思しことのかす／＼に
むなしきそらの秋のよの月

2151

秀能かよませ侍し月哥
秋といへは月のたゝちをふく風の
くもをはすてのひさかたの山

2152

攝政殿詩哥合月明風又冷
雲たえてのちさへ月をふくあらし
こぬ夜うらむるとこなはらひそ

2153

さむしろにはつしもさそひふく風を
いろにさえゆくねやの月かけ

2154

正治二年九月院に初度哥合浦月
あはちしま月のかけもてゆふたすき
かけてかさせるすまのうら波

2155

建仁元年八月十五夜哥合月多秋友
千舌ふへきたまのみきりの秋の月
かはすひかりのすゑそひさしき

2156

月前松風

ゆふへよりくもはまよはぬ月かけに
まつをそはらふみねのこからし

2157

月前擣衣

秋風によさむの衣うちわひぬ
ふけゆく月のをちの山もと

2158

海邊秋月

月にふすいせのはま越きこよひもや
あらかいそへの秋をしのはむ

湖上月明

2159

さゝ波やちりもくもらすみかゝれて
かゝみの山をいつる月かけ

古寺残月

2160

はつせ山ゆつきかしたにてる月の
あくるもしらぬありあけのかけ

深山曉月

2161

鳥のねもきこえぬ山の山人は
かたふく月をあけぬとやしる

2162

野月露深

越きあかすのへのかりいほのそてのつゆ
をのかすみかと月そさえゆく

田家見月

2163

さをしかのつまとふを田にしもをきて
月かけさむしをかのへのやと

河月似氷

2164

すみわたる月かけきよみゝなせ河
むすはぬ水をこほりとそ見る

2165

建保三年八月十五夜内裏 月前竹風

月きよみたまのみきりのくれ竹に

ちよをならせる秋風そふく

月前擣衣

2166

月にうつ民の衣もやとことに

くにさかへたるみよそきこゆる

月前眺望

2167

きわもなき田のもはかりにしくゝもの

ちりもまかはぬ秋の夜の月

2168

建永元年七月十三日和哥所當座

湖邊月

さゝなみやにほのうら風ゆめたえて

夜渡月にあきのふな人

元久元年七月宇治御幸水月

2169

にほのうみやしたひてこほる秋の月

みかくなみをくたすしはふね

正治二年左大臣家哥合山月

2170

まつことは心の秋にたえぬれと

猶山のはに月はいてけり

2171

建曆三年後九月内裏哥合深山月
しらかしのつゆをく山も道しあれは
枝にも葉にも月そともなふ

2172

建久七年九月十三夜内大臣家未出月
秋のそら月はこよひとはらふなり
ひかりさきたつみねのまつ風

2173

初昇月
さしのほるみかさの山のみねからに
又たくひなくさやかなる月

2174

停午月

秋の月なかはのそらのなかはにて
ひかりのうへにひかりそひけり

2175

漸傾月

物ことに秋のあはれはかすそひて
そらゆく月のにしそすくなき

2176

入後月

月はさそゆきたにのころならは
それとも見ましみねのあけほの

2177

内裏にて禁庭月

わすれすよみはしの霜のなかき夜に
なれしなからのくものうへの月

建久二年法皇栖霞寺におはし

ましゝ時駒牽のひきわけの使

にまいるとて

2178
新古

嵯峨の山ちよのふるみちあとゝめて

又つゆわくるもち月のこま

九月十三夜内裏にて山路月

2179

山かせは月のさ衣はらへとも

をもらぬ雪はこのはこそふれ

2180

たまほこの道もさりあへぬ春の花
それかとまかふ山の月かけ

建保二年九月十三夜内裏月前風

2181

すかのねやなか月の夜の月かけを
はるかにわたるのへの秋風

建保六年八月十三日内裏中殿宴

秋夜侍 宴同詠池月久明

應 製和歌

參議正三位行民部卿兼伊豫權守臣藤原朝臣定家上

2182

いくちよそそてふる山のみつかきも
をよはぬ池にすめる月かけ 三行三字書之

神主重保賀茂社哥合とてよませ

侍しに月 元暦元年九月侍従

2183

勅撰

しのへとやしらぬむかしの秋をへて
おなしかたみにのこる月かけ

霧

2184

はれくもり山のいはねにたつきりを
なつる衣の袖かとそ見る

野宿月 權大納言家貞應

2185
續拾

ゆふつゆのいほりは月をあるしにて
やとりをくるゝのへのたひ人

建久五年八月十五夜左大將家

見月思旅

2186

まつほとをかたらぬ月にかこつとも
しらてやぬらんあらきはまへに

對月問昔

2187

わすれすやはしめもしらぬそらの月
かへらぬ秋のかすはふりつゝ

2188

月契潤月

月も又しかならふまでなれよとや
かすそふ秋のそらをたのめて

元久元年五辻殿に御わたりのゝち初て

講せらる 序通具卿 讀師太政大臣

松間月 應製臣上

2189

このまより月もちとせの色にいてゝ
きみか 吉契庭のわかまつ

野邊月

2190

みよしのは雪ふる峯のちかけれは
秋よりうつむ月のしたくさ

2191

田家月

なかめつゝとはれすひさに秋の田の
ほのうへてらす月のいくよを

2192

羈旅月

草枕みやこをとをみいたつらに
ゆきゝの月のやとるしらつゆ

2193

名所月

さとわかすもろこしまての月はあれと
秋のなかはのしほかまのうら

同夜當座

八月十五夜翫月應 製和歌

正四位下行左近衛權中將兼美濃介臣藤原朝臣定家上

2194
よろつ忝はこよひそはしめやとの月

なかはの秋の名はふりぬとも

建仁元年三月盡哥合湖上秋霧

2195
篠波やにほの湖のあけかたに

きりかくれゆくおきのつり舟

建保四年潤六月内裏哥合秋

2196
續古
をしかなくは山のかけのふかけれは

あらしまつまの月そすくなき

2197

建曆三年後九月内裏哥合寒野蟲

ゆく秋のすゑのゝこのはあさな／＼

そむれはよはる蟲のこゑ／＼

建保三年五月和哥所哥合行路秋

2198

うちわたすをちかたのへのしらつゆに

よものくさ木のいろかはるころ

建永元年七月十三日和哥所當座行路風

2199

たまほこやゆくてのゝへのあさちまで

うつろふそでの秋のはつ風

2200

正治二年二月左大臣家哥合

唐衣すそのゝまくすふきかへし

うらみてすくる秋のゆふ風

元久元年七月宇治御幸野露

2201

山しろのくせのはらのゝしのすゝき

たまぬきあへぬ風のしらつゆ

建仁二年三月六首秋哥

2202

しもまよふをたのかりいほのさむしろに

月ともわかすいねかてのそら

建曆三年九月十三夜内裏哥合

江上月

2203

なには江にさくやこの花しろたへの
秋なき浪をてらす月かけ

暮山松

2204

秋はいぬゆふ日かくれぬ峯の松
よものこの葉のゝちもあひ見む

元久二年夏院詩哥合 山路秋行

2205

新古

みやこにも今や衣をうつ山の
ゆふしもはらふつたのしたみち

2206

夕つくひこのまのかけもはつかりの
なくやくもゐの峯のかけはし

2207

建仁三年和哥所哥合海邊鴈

ゆくかりのたか秋風とうれふらん
なみもふせかぬいそのとまやに

2208

三宮より十五首哥めされし秋哥

とふかりのなみたもいとそほちけり
さゝわけし野邊のはきのうへのつゆ

2209

久方の月の桂のしたもみち
やとかるそてそ色にいてゆく

2210

なみたのみこの葉しくれとふりはてゝ
うき身を秋のいふかひもなし

建久六年秋ころ大將殿にて末句

十をかきいたしてよむへきよし

侍しに當座

2211

しほるへきよもの草木もをしなへて
けふよりつらきおきのうは風

2212

とれはけぬわくれはこほるえたなから
よしみや木のゝはきのしたつゆ

2213

こし方はみなおもかけにうかひきぬ
ゆくすゑてらせ秋のよの月

2214

いさこえしおもへはとをきふるさとを

かさなる山の秋のゆふきり

2215

ふけまさるひとまつ風のくらきよに

山かけつらきさをしかのこゑ

2216

風なひくすゝきのすゑはつゆふかし

このころこそはゝつかりの聲

2217

むかしかなあはれいくよときてとへは

やとる風にうつらなくなり

2218

續後

河風によわたる月のさむければ

やそうち人も衣うつなり

2219

みそちあまり見しをはなきとかそへつゝ

2220

秋のみおなしゆふくれのそら

ひとりねのさならぬともそてぬれぬ

わかれなれたるあか月のそら

2221

おなしころ大將殿にて五首哥 秋色

そめてけり月の桂のすゑはまて

うつろふころのゝへの秋風

秋聲

2222

さえわたる霜にむかひてうつ衣

いくとせ秋のこゑをつくらん

2223

秋香

かたみかなくれゆく秋をうらみつゝ
けふつむそてにゝほふしらきく

秋情

2224

あめおつるこのはをなにのあはれとて
なきこゝちする心わくらん

秋戀

2225

うかりける山とりのおのひとりねよ
秋そちきりしなかきよにとも

同七年の秋内大臣殿にて文字を

かみにをきて廿首歌中に 秋十

2226

をさゝはらほとなきすゑのつゆおちて

ひとよはかりに秋風そふく

2227

峯にふく風にこたふるしたもみち

ひとはのをとに秋そきこゆる

2228

なくせみも秋のひゝきのこゑたてゝ

色に見山のやとのもみちは

2229

へたてゆくきりも日かすもふかけれは

わすれやしぬるとをきみやこに

2230

しきたへの枕わすれて見る月の

かそふ許のよな／＼のかけ

2231

ふりにけりとし／＼なれし月を見て

おもひしことのさらになしき

2232

ちりぬれはこひしきものを秋はきの

けふのさかりをとほとへかし

2233

はやせ河みなわさかまきゆくなみの

とまらぬ秋をなにおしむらん

2234

かりかねのくもゆくはねにをくしもの

さむきよころにしくれさへふる

2235

松しまのあまの衣手秋くれて

いつかはほさむつゆもしくれも

内裏秋十五首哥合 秋風

2236

おさまれる民のくさはを見せかほに

なひく田のもの秋のはつ風

秋露

2237

そてぬらすしのふもちすりたかために

みたれてもろき宮木のゝつゆ

2238

秋月

いつはともわかぬときはの山人も
そらにおとろく月のかけ哉

2239

秋雨

花そめの衣の色もさたまらす
のわきになひく秋のむらさめ

2240

秋花

たひ衣ひもとく花のいろ／＼も
とをさとをのゝあたたらあさきり

2241

秋鴈

このころのかりの涙のはつしほに
色わきそむる峯の松風

2242

秋蟲

あるしから思たえにしよもきふに
むかしもよおすまつむしの聲

2243

秋鹿

あさな／＼この葉うつろひなくしかの
ことはりしるき秋の山かけ

2244

秋水

秋風のかつふきはらふ谷の戸に
おもふもきよくすめる山水

2245

秋霜

秋の色にのこるかたみのしもをたに
をけかしくさ葉それもとまらす

2246

秋祝

山水に老せぬちよをせきとめて
をのれうつろふしらきくの花

2247

秋旅

ふるさとはとを山とりのおのへより
霜をくかねのなかきよのそら

2248

秋戀

したむせふもしほのけふりこかるとて
秋やは見ゆる人はうらみし

2249

秋思

老か昔はあはれすゑのゝくさかれに
よるのおもひのなか月のそら

2250

秋雑

わたつうみや秋なき花のなみ風も
身にしむころのふきあけのはま

仁和寺宮よりしのひてめされし

秋題十首 承久二年八月

秋雨

2251

あきの色と身をしる雨のゆくゝもに
いこまの山もおもかはりして

2252

秋花

このくれの秋風すゝしから衣
ひもとく花につゆこほれつゝ

2253

秋田

なかめあへぬほむけの風のかたよりに
田のもふきこすみねのもみちは

2254

秋霜

昔やはうきしもよりしみにむすひをく
おいそのもりのもとのくちはゝ

2255

秋祝

露しくれもるにつれなき秋山の
まつにそきみのみよは見えける

2256

秋戀

はつかりのとをちもよおす秋風に
なれてまちかきなかそかれゆく

2257

秋夢

風さはおきのはよくとうきて見し
ゆめのたゝちそいやはかなゝる

2258

秋旅

浪かくるそてしのうらの秋の月
やとかるまゝにまつやしほらん

2259

秋恨

心もてよゝのむかしやならひけむ
秋風いそくをかのかすはに

2260

秋雑

しられしなく／＼あかすなかきよも
さわへのたつの秋の心は

内裏秋十首

2261

夏はてゝぬるやかはへのしのゝめに

そてふきかふる秋のはつ風

2262

をのつからいくよの人のなかむらん

2263

あまのかはらのほしあひのそら

わすれしなはきの白露しきたへの

2264

かりいほのところにのこる月かけ

やとれともぬらさぬそてのわれからに

なれてひさしき秋のよの月

2265

聲たてゝたれ松風のをのれのみ

たゆまぬ月に衣うつらん

2266

またれつる月もはるかになくつるの

こゑあけかたきなかきよのしも

2267

いくかへり梅をはきくになかめつゝ

しもよりしものそてしほるらん

2268

身をくたく年のいくとせなけきして

思とちめし秋のなみたそ

2269

たつた山ゆふつけとりのなくこゑに

あらぬ時雨の色そきこゆる

2270

山ひめのかたみにそむるもみちはを
そてにこきいるゝよもの秋風

建保二年みなせ殿にて講せられ

し秋十首哥 應製臣上

2271

續古

もしほくむあまのとまやのしるへかは
うらみてそふく秋のはつ風

2272

あさちふのをのゝしのはらうちなひき
をちかた人に秋風そふく

2273

おほかたの秋をくつゆやたまはなす
身なからくちしそてはほしてき

2274

いく秋をたへていのちのなからへて

なみたくもらぬ月にあふらん

2275

宮木のはもとあらのはきのしけゝれは

たまぬきとめぬ秋風そふく

2276

ゆふつく日むかひのをかのうすもみち

またきさひしき秋のいろ哉

2277

續後

高砂のほかにもあきはあるものを

わかゆふくれとしかはなくなり

2278

河波のくゝるも見えぬ紅を

いかにちれとか峯のこからし

2279

たまきはるわか身しくれとふりゆけは

いとゝ月日もおしき秋哉

2280

しものたて山のにしきをゝりはへて

なくねもよはるのへの松蟲

承久元年七月内裏哥合

聞擣衣

2281

なさけなくふく秋風そをしふらん

こぬよのところに衣うてとは

庭紅葉

續拾

2282

もる山もこのしたまてそしくるなる

わかそてのこせのきのもみちは

聞擣衣といふことを人／＼よみ侍しに

2283

荻の葉のつけふるしてし秋風を

又しもさらに衣うつなり

依月思秋

2284

いたつらにつもれは人のなかき夜も

月見てあかす秋そすくなき

2285

承久元年九月日吉哥合とて内より
のおほせこと

深夜秋月

おほかたのあらしもくもゝすみはてゝ
そらのなかなる秋のよの月

遠山曉霧

ほのかなるかねのひゝきにきりこめて
そなたの山はあけぬとも見す

暮天聞鴈

かりかねのなきてもいはむ方そなき
むかしのつらのいまのゆふくれ

2286

2287

紅葉添雨

2288

續古

ふりまさるなみたもあめもそほちつゝ
そての色なる秋の山哉

建保五年四月十四日庚申五首秋朝

2289

續古

小倉山しくるゝころのあさな／＼
きのふはうすきよものもみちは

承元三年九月新羅社哥合とて

人のよませ侍し紅葉

2290

露しものしたてるにきたつたひめ
わかるゝそてもうつる許に

2291

内裏にて朝見紅葉

もみちはの猶いろまさるあさひ山
夜のまのつゆの心をそしる

2292

建保二年九月十三夜 内裏暮山紅葉

しくれつゝそてぬれきつる山人の
かへるいほりはあらぬもみち葉

2293

對菊惜秋

如何せむきくのはつしもむすほゝれ
そらにうつろふ秋の日かすを

2294

紅葉見秋

龍田河おられぬ水の紅に
なかれてはやき秋のかけかな

九月十三夜侍宴詠三首

秋山月

2295

さゝ枕み山もさやにてる月の
千杵もふはかりかけのひさしさ

秋野月

2296

久方のあまつそらゆく月かけを
をのれしめのゝ秋の白露

秋庭月

2297

雲のうへをてらさむ秋もしらさりき
をしへし庭のみちの月かけ

右大臣家六首哥合夜深待月

2298

夜をかさねたゆますひさになかめする
山のはをそき月をこひつゝ

故郷紅葉

2299

うつろひし昔の花のみやことて
のこるにしきの色そしくるゝ

2300

河邊擣衣

こはた河こはたかためのから衣
ころもさひしきつちのをと哉

元暦元年宰相中將通親卿五首之内

擣衣

2301

さえまさるひゝきをそへてうつ衣
かさなるよはに秋やくるらん

冬

2302

正治二年毎月哥めされし時 初冬
このころの冬の日かすのはるならば
たにのゆきけにうくひすのこゑ

時雨

2303

山めぐりしくれやをちにうつるらん
くもまゝちあへぬそでの月かけ

2304

承元四年十月家長朝臣日吉社にて
講すへきよし申ゝ哥 故郷時雨
むらくもや風にまかせてとふとりの
あすかのさとはうちしくれつゝ

2305

時雨知時 私家

いつはりのなき廿なりけり神な月
たかまことよりしくれそめけん

2306

續古

寒草纔殘

ふくかせのやとすこのはのした許
しもをきはてぬにはの冬草

2307

建保二年内裏三首 時雨

山の井のしつくもかけもそめはてゝ
あかすはなにの猶しくるらん

2308

水鳥

池にすむありあけの月のあくるよを
をのか名しるくうきねにそなく

寒草

2309

霜か雪かおはなにましりさく花の
のこりし色もむかし許に

正治二年十月一日院御會當座

枯野朝

2310

あさしもの色にへたつるおもひ草
きえすはうとしむさしのゝはら

2311

建仁元年三月盡日哥合嵐吹寒草
あさちふやのこるはすゑの冬のしも
をき所なくふくあらし哉

2312

建保四年潤六月内裏哥合冬哥
よしさらはかたみも霜にくちはてね
いまはあたなる秋のしらきく

2313

續拾

三宮十五首冬哥
神な月くれやすき日の色なれは
しものした葉に風もたまらす

2314

しからきのと山のあられふりすさひ
あれゆくころのくもの色哉

正治元年十一月七日二條殿新宮哥合

紅葉殘梢

2315

冬もふかくしくれし色をゝしみもて
はつゆきまたぬみねのひとむら

寒夜埋火

2316

うつみ火のきえぬひかりをたのめとも
猶霜さゆるとこのさむしろ

文治三年冬侍従公仲よませ侍し

冬十首

2317

ふるさとのしのふのつゆも霜ふかく

なかめしのきに冬はきにけり

2318

やとからそみやこの内もさひしさは

人めかれにし庭の月かけ

2319

しもかるゝよもきかそまのかれまより

ゆきけにゝたる冬のわかくさ

2320

雲かゝる峯よりをちのしくれゆへ

ふもとのさとをくらすこからし

2321

かこたしよ冬のみ山のゆふくれは

さそなあらしのこゑならすとも

2322

こけふかきいはやのとこのむらしくれ

よそにきかはやありてうき卉を

2323

浦風のふきあけの松のうれこえて

あまきるゆきをなみかとそ見る

2324

なからへむいのちもしらぬ冬のよの

雪と月とをわかひとり見る

2325

そらとちて又このくれのいかならん

日ころの雪にあとはたえにき

又くれぬすくれはゆめの心ちして
あはれはかなくつもる年哉

つかさはなれてのちつく／＼とこ
もりゐたるにしも月うしの日と
きゝしよるになりておほきおとゝ
のふみたまへる

(2327)
續後

月のゆく雲のかよひちかはれとも
をとめのすかたわすれしもせず

むかしのことかきくつし思いつる
おりふしいとゝあはれまさりて

2328

續後

をとめこのわすれぬすかた忝ふりて
わか見しそらの月そはるけき

2329

建久六年二月左大將家五首冬

霜のうへのあさけのけふりたえ／＼に
さひしさなひくをちこちのやと

正治元年左大臣家冬十首哥合

寒樹交松

2330

冬きても又ひとしほの色なれや
もみちにのこる峯のまつはら

2331

池水半氷

池のおもはこほりやはてむとちそふる
よころのかすを又しかさねは

2332

山家夜霜

ゆめちまて人めはかれぬくさのはら
をきあかすしもにむすほゝれつゝ

2333

關路雪朝

雪のもるすまのせきやのいたひさし
あけゆく月もひかりとめけり

2334

水鳥知主

見なれてはこれもなこりやをしかもの
なれたにやとのぬしはわきけり

旅泊千鳥

2335

こきよするとまりさひしきしほ風に
又ゆめさましちとりなくなり

湖上冬月

2336

月にいつるかたゝのあまのつり舟は
こほりかなみかさためかねつゝ

2337

炉邊懷舊

つく／＼とわかよもふくる風のをとに
むかしこひしきうつみ火のもと

正治二年九月院にはしめて哥合

侍しに水鳥

うすこほりあるをしかものいろ／＼に
打いつる浪の花そうつろふ

2338

同年冬内裏にて頭中將通具朝臣

人／＼にうたよませ侍しに深

夜水鳥

こほりゆくみきわをいつるをしかもに
山のはちきるありあけの月

2339

2340

建仁二年三月六首冬哥

はまちとりつまとふ月のかけさむし

あしのかれはのゆきのした風

建保四年内裏寒山月

2341

月のうへにくもゝまかはてをくしもを

あかすふきはらふみねのこからし

寒閨月 老後私家

2342

山風のあれにしとこをはらふ夜は

うきてそこほるそでの月かけ

2343

行路霰

冬の日のゆく方いそくかさやとり
あられすくさはくれもこそすれ

遠村雪

2344

あともなきすゑのゝ竹のゆきをれに
かすむやけふり人はすみけり

2345

建仁元年十二月八日八幡哥合社頭松

神かきや松につれなきよるのしも
かはらぬいろよおきあかせとも

2346

月前雪

ふきみたるゆきのくもまをゆく月の
あまきる風にひかりそへつゝ

承久元年七月内裏哥合冬氷月

2347

天河氷によとむ風さえて

ゆくかたをそき月そひさしき

杜間雪

2348

はつゆきのいのるやなにのたむけして
いそくいくたのもりのしらゆふ

2349

正治二年 左大臣家哥合庭雪

とゝむへき人もとひこぬゆふくれの
まかきを山とつもるしらゆき

2350

建仁元年三月盡哥合雪似白雲

冬のあしたよしのゝ山のしらゆきも
花にふりにしくもかとそ見る

2351

攝政殿詩哥合雪中松樹低

はなと見る雪も日かすもつもりゐて
松のこすゑは春のあをやき

2352

風のまのもとあらのはきのつゆなから
いくよかはるをまつのしらゆき

秀能か五首哥雪

2353

あまつかせはつゆきしろしかさゝきの
とわたるはしのありあけのそら

建保内裏哥合十首之中冬

2354

みそらゆく月もまちかしあしかきの
よしのゝさととの雪のあさけに

2355

正治二年九月院初哥合 曉雪

あけぬるかこすゑおれふす松かねの
もとよりしろき雪の山のは

2356

建久五年左大將家哥合 深草雪

ゆきをれの竹のしたみちあともなし
あれにしのちのふかくさのさと

2357

の時雪十首哥 禁庭雪

文治五年十二月後京極攝政大納言
さえのほるみはしのさくらゆきふりて
はる秋見するくものうへの月

2358

故郷雪

山人のひかりたつねしあとやこれ
みゆきさえたるしかのあけほの

2359

新古今

山家雪

まつ人のふもとのみちはたえぬらん
のきはのすきに雪をもるなり

2360

野亭雪

雪の内はなへてひとつになり
にけり
かれのゝ色もたのむかきねも

2361

社頭雪

春日山おほくの年のゆきふりて
はるのあさは神もまつらん

2362

古寺雪

うつしける月のみかはひかりあひて
のきのあれまにつもるしらゆき

2363

雪中戀人

かきくらすゆふへのゆきにせきとちて
心やみちにかよひわふらん

2364

雪中述懷

かすまさる年にあはれのつもる哉
わかよふけゆく雪をなかめて

雪中遠望

ふりまかふ雪をへたてゝいてつれと
くもまにきゆるあまのとも舟

2365

雪中旅行

うちはらひやとかりわひぬゆきをれの
きゝのしたみちおもかはりして

2366

建保五年庚申 冬夕

2367

ふりくらすよしのゝみゆきいくかとも
はるのちかさはしらぬさとな

はゝのおもひにてこもりゐたりし

冬雪のあしたに大將殿より

(2368)

みよしのやはすて山のはる秋も

ひとつにかすむゆきのあけほの

しもかれのまかきのゝへのけさの雪

(2369)

とをき心をはに見る哉

(2370)

このさとはまつへき人のあともなし

庭のしらゆきみちはらふとも

(2371)

おもへともきみをたつねぬゆきの上に

猶はつかしき山かけのあと

(2372)

なかめするわかそてならぬくさも木も

しほれはてぬるけさの雪哉

御返し

2368

おもかけのそれかと見えし春秋も

きえてわするゝ雪のあけほの

2369

昔今心にのこすそもなし

かれのゝゆきのはのひとむら

2370

わかやとの雪はいくへとはるや見む

2371

あれにしのちのよもきふのかけ

おもふてふたゝさはかりをわか身にて

2372

ゆきにへたゝる山かけも哉

袖のうへはよもの木くさにしほれあひて

ひとり友なき雪のした哉

正治二年二月左大臣家哥合

冬述懷

2373

いたつらにことしもくれぬとはかりに
冬はなけきそふ心ちする

山野落葉といふことを私家

2374

みかりのゝとたちをうつむならしはに
猶ふりまさる山のこからし

松竹霜

2375

庭のまつまかきの竹にをくしもの
したあらはなる千杵の色哉

2376

報恩會のついて 歲暮述懷

思やれまくらにつもるしもゆきの
むそちにちかきはるのとなりは

おなし會 山家懷舊

2377

おもひいるみ山にふかきまきのとの
あけくれしのふ人はふりにき

おなし會 歲暮 承久三年

2378

つきもせぬうきおもひいてはかすそひて
かはりはつなる年のくれ哉

賀

2379

建保二年九月十四日和哥所月契千秋
きみか忝の月と秋とのありかすに
をくや木草のよもの白露

2380

建仁元年鳥羽殿にてはしめて哥
講せられ御あそひなと侍し夜
池上松風
いけ水に千忝のみとりをちきるらし
こゑすみわたるきしの松風

2381

建永元年八月十五夜鳥羽殿御
舟に御あそひありし夜うた人
みきわにさふらひて

秋の池の月にすむなることのねを
今より千よのためしにもひけ

2382

正治二年二月左大臣家哥合

松風のこゑさへはるのにほひにて
花もちとせをちきるやと哉

2383

建久五年左大將家哥合祝春日山
かすか山みねのあさ日をまつほと
そらものとききよろつ舌の聲

2384

建仁元年三月盡哥合 寄神祇祝

あとたれしよものやしろもきみにこそ
まもるかひあるちよをならはめ

正治二年九月哥合 十首神祇

2385

君をまもるあまてる神のしるしあれば
ひかりさしそふ秋の夜の月

庭松

2386

枝かはすたまのみきりの松の風
いくちよきみにちきりそふらん

建仁三年十一月入道殿和哥所にて

九十賀たまはり給し時

きみにけふとせのかすをゆつりをきて

こゝのかへりのよろつ舌やへむ

承元二年住吉哥合

わかきみのときはのかけは秋もあらし

月のかつらのちよにあふとも

仁和寺宮にて 寄松祝

このさとはをかへのまつ葉もる月の

いつともわかぬちよそ見えける

2387

2388

2389

2390

建保三年五月哥合 松經年

たむけ草つゆもいくよかちきりをきし
はまゝつかえの色もかはらす

一條の家にてはしめて栽松と

いふ題を人／＼よみ侍しに

2391

なゝそちのとなりをしむるやとにうへて

千杵のはしめは松やならはん

夕松風 私家

2392

松にふく風のみとりに聲そへて

ちよの色なるいりあひのかね

建曆二年とよのみそきふたゝひ
とけをこなはれしつきの日中將

雅經朝臣

きみまちてふたゝひすめる河水に
ちよそふとよのみそきをそ見し

返し

君かよのちよにちよそふみそきして
ふたゝひすめるかもの河水

皇后宮權亮公衡朝臣いろゆる
 されてともいまたしらさりし
 に御禊行幸に菊のしたかさね
 きられたりしを見てつきの日

白菊のねはひとものいろなれと

うつろふほとは猶そ身にしむ

返し

たくふなる名を思ふにもしらきくの
 うつろふ色はけに身にそしむ

少將になりたるよろこひにおなし

中將身にうらみありてこもりゐら
れたりしころ三日をすくして

うれしさをとはてすきつる日かすにも
思ふ心の色や見ゆらん

返し

うれしさをとはれぬほとの日かすゆへ
わくる心も色や見ゆらむ

爲家元服したるのちほとなく従
上のかゝいしたるよろこひにま
さつねの中將

(2396)

袖のうちに思なれてもうれしきの

このはるいかに身にあまるらん

返し

2396

そてせはくはくゝむ身にもあまるまで

このはるにあふみよそうれしき

おなし中將のこをありきそめにつ

かはしたる手本のつゝみかみに

あとならへおもふおもひもとおりつゝ

きみにかひあるしきしまのみち

(2397)

返し

しきしまのみちしるき身にならひをきつ
すゑとおるへきあとにまかせて

年ころのゝそみかなはて辭申す三
位に猶叙すへきよしおほせこと侍
しかは侍従をひとたひにと申てゆ
るされたりしにおなし中將

うれしきはむかしつゝみしそてよりも
猶たちかへるけふやことなる

2398

返し

うれしきは昔のそての名にかけて
けふ身にあまるむらさきのいろ

おなし日 宮内卿

(2399)

うれしきは昨日やきみかつむきくの
とへとや猶もけふをまつらん

返し

2399

けふそけに花もかひある菊の色の
こきむらさきの秋をまちける

(2400)

とは申ゝかとしつみぬる事をのみ
なけき侍しに思よらさりし参議の
闕におほくの上臈をこえてなりて

侍しあした宮内卿

ふしておもひ越きても身にやあまるらん
こよひのはるのそてのせはさは

返し

うれしてふたれもなへての事のはを
けふのわか身にいかゝこたへむ

2400

水無瀬殿にあたらしくたきおとさ
れいしたてられてのちまいりてあ
したに清範朝臣のもとへ地形勝絶
のよし申ゝ中に

2401

ありへけむもとのちとせにふりもせて

わかきみちきる峯のわか松

2402

かすかのやまもるみ山のしるしとて

みやこのにもしかそすみける

2403

きみか舌にせきいるゝ庭をゆく水の

いはこすかすはちよも見えけり

院御所六月庚申扇合のよしにて
 左方扇にかゝるへき哥三條宮よ
 りめされ侍よし清範朝臣申ゝか
 はたてまつりし

おさまれるみよにあふきの風なれは
 よものくさはもまつそなひかむ

二條中將このゑつかさにて年た
 けぬるよし述懷百首におほくよ
 みてほとなく右兵衛督になりて
 あしたに

かしは木はけふやわか葉の春にあふ
 きみかみかけのしけきめくみに

(2405)

返し 兵衛督

春の雨のふりぬとなにか思けむ
めくみもしけきもりのかしは木

祖父中納言の春日行幸の賞を
つのりて正三位したるあした

に右兵衛督

(2406)

神も又きみかためとやかすか山
ふるきみゆきのあとのこしけむ

返し

2406

うつもれしをとろのみちをたつねてそ
ふるきみゆきのあともとひける

宮内卿のそみ申さぬに三位ゆる

されたるあしたに

きみか忬にむかしいかなるちきりありて

をの／＼かゝるはるにあふらん

返し

人はいさなれもやすらんきみかよに

ひとりそはるにあふ心ちする

右兵衛督子の少將のよろこひに

みかさ山わかはの松にいかはかり

あめのめくみのふかさをか見る

2408

(2407)

2407

返し

(2408)

年の内に春の日かけやさしつらん

みかさの山のめくみをそ見る

日吉禰宣親成七十賀に人哥つかはしゝ時

2409

もゝとせにみそとせたらぬいはね松

ちよをまつらしいろもかはらす

おなし八十賀

2410

もゝとせはやそちの坂にちかけれと

神のめくみのちよそはるけき

2411

元久三年正月高陽院殿初度應製

庭花春久

あらたまの年のちとせのはるの色を
かねてみかきの花にまつかな

戀

建仁二年六月みなせ殿のつり殿
にいてさせたまうてにはかに六
首題をたまはりて御製にあはせ
られ侍し中戀三首

初戀

はるやときとはかりきゝしうくひすの
はつねをわれとけふやなかめむ

忍戀

夏草のましるしけみにきえねつゆ
をきとめて人のいろもこそ見れ

2413

2412

久戀

2414

わかなかはうき田のみしめかけかへて
いくたひくちぬもりのした葉も

おなしとし九月十三夜水無瀬殿

戀十五首哥合に

春戀

2415

わすれはや花にたちまよふはるかすみ
それかと許見えしあけほの

夏戀

2416

ほとゝきすそらにつたへよこひわひて
なくやさ月のあやめわかすと

2417

秋戀

こよひしも月やはあらぬおほかたの
秋はならひを人そつれなき

2418

新古

冬戀

とこのしも枕の氷きえわひぬ
むすひもをかぬ人のちきりに

2419

暁戀

おもかけもまつよむなしきわかれにて
つれなく見ゆるありあけのそら

暮戀

2420

なかめつゝ またはとおもふくものいろを
たかゆふくれときみたのむらん

羈中戀

2421

きみならぬこの葉もつらしたひ衣
はらひもあへすつゆこほれつゝ

山家戀

2422

風ふけはさもあらぬ峯の松もうし
こひせんひとはみやこにをすめ

2423

故郷戀

つれなきをまつとせしまのはるのくさ
かれぬこゝろのふるさとのしも

旅泊戀

2424

わすれぬは浪ちの月にうれへつゝ
身をうしまとにとまるふなひと

關路戀

2425

すまのうらや浪におもかけたちそひて
開ふきこゆる風そかなしき

2426

海邊戀

わかれのみをしまのあまのそてぬれて
又はみるめをいつかかるへき

2427

河邊戀

名とり河わたれはつらしくちはつる
そてのためしのせゝのむもれ木

2428

寄雨戀

ゆくゑなきやとはとゝへはなみたのみ
さのゝわたりのみらさめのそら

寄風戀

2429
新古

白妙の袖のわかれにつゆおちて
身にしむ色の秋風そふく

2430
建久五年夏左大將家哥合戀三嶋江
うつりにきわか心からみしま江の

いり江の月のあかぬおもかけ

建仁元年三月盡哥合遇不遇戀

2431
人心ほとはくもゐの月はかり

わすれぬそてのなみたとふらん

2432

正治二年二月左大臣家哥合 夏戀

よゐなからくものいつらとおしまれし
月をなかしとこひつゝそぬる

宇治御幸 夜戀 元久元年七月

2433

まつ人の山ちの月もとをければ
さとの名つらきかたしきのとこ

建仁二年三月六首之中戀

2434

たのむ夜のこのまの月もうつろひぬ
心の秋の色をうらみて

2435

遇不遇戀 承元二年閏四月四日和哥所
とひこかしまたおなし昔の月を見て
かゝるいのちにのこるちきりを

2436

承元四年九月粟田宮哥合 寄月戀
やとりこしたもとは夢かと許に
あらはあふ昔のよその月かけ

2437

三宮十五首戀哥
露しくれした草かけてもる山の
いろかすならぬそてを見せはや

2438

おほかたはわすれはつともわするなよ

ありあけの月のありしひとこと

2439

ならふなと我もいさめしうたゝねを

猶物思ふおりはこひつゝ

2440

勅撰

建保五年四月庚申久戀

こひしなぬ身をこたりそ年へぬる

あらはあふよの心つよさに

2441

新古

建永元年七月和哥所被忘戀 當座

むせふともしらしな心かはらやに

我のみけたぬしたのけふりは

建曆三年三月内裏戀哥三首

2442 やとりせぬくらふの山をうらみつゝ

はかなのはるのゆめの枕や

2443 ちきりのみいとゝかりはのならしはゝ

たえぬおもひの色そまされる

2444 影をたにあふせにむすへおもひ河

うかふみなわのけなはけぬとも

建曆三年九月十三夜内裏哥合旅宿戀

2445 とゝめをきし袖のなかにやたまくしけ

ふたみのうらは夢もむすはす

建保四年閏六月内裏哥合戀

2446 勅撰
あふことはしのふの衣あはれなと

まれなるいろにみたれそめけん

2447 勅撰
こぬ人をまつほのうらのゆふなきに

やくやもしほの身もこかれつゝ

九月十三夜内裏寄海戀

2448
人こゝろうき波たつるゆらのとの

あけぬくれぬとねをのみそなく

建保四年内にて 寄蘆戀

2449

なにはなる身をつくしてのかひもなし
みしかきあしのひとよはかりは

正治元年冬左大臣家冬十首哥合 契歲暮戀

2450

續古

あらたまのとしのくれまつおほそらは
くもるはかりのなくさめもなし

住吉哥合 旅宿戀

2451

續後

やとりせしかりいほのはきのつゆはかり
きえなてそての色にこひつゝ

戀不離身といふ心を

2452

心をはつらき物とてわかれにし
昔々のおもかけなにしたふらん

仁和寺宮花五首 寄花戀

2453

花のこと人の心のつねならは
うつろふのちもかけは見てまし

建久七年内大臣殿にて文字をか
みにをきて廿首哥よみしに

戀五首かたおもひ

2454

神なひのみむろの山の山風の
つてにもとはぬ人そこひしき

2455

たましひのいりにし袖のにほひゆへ

さもあらぬ花の色そかなしき

2456

おくも見ぬしのふの山にみちとへは

わかなみたのみさきにたつ哉

2457

もしほたれすまのうら波たちなれし

人のたもとやかくはぬれけん

2458

ひたゝくみうつすみなわを心にて

猶とにかくにきみをこそおもへ

2459

中納言長方卿五首哥よませ侍し
中に絶久戀

それとたにわすれやすらむいまさらに
かよふ心はゆめに見ゆとも

建久六年二月左大將家五首戀

2460

おもひねはたか心にて見えねとも
夢にそいとゝうかれはてぬる

建保右大臣家六首哥合行路見戀

2461

露そをく井てのしたをひさ許も
むすはぬのへのくさのゆかりに

山家夕戀

2462

涙せくやともは山にかくろへて
あらはにこふるゆふくれそなき

承久二年八月土御門院よりしのひて

めされし夜長増戀

2463

秋の夜のとりのはつねはつれなくて
なく／＼見えしゆめそみしかき

寄名所戀 私家

2464

こく舟の風にまかするまほにたに
そことをしへぬあふの松はら

2465

忍待戀

越しほ山千舌のみとりの名をたにも
それとはいはぬくれそひさしき

寄螢戀

2466

いとゝ又あまるおもひはもえつきぬ
そてのほたるのひかり見えても

隔遠路戀

2467

たつぬともかさなるせきに月こえて
あふをかきりのみちやまとはむ

2468

暮山戀 權大納言家

うつせみのは山もりくるゆふ日かけ
うすくや人とねをのみそなく

貞永元年七月大殿哥合戀十首

寄衣戀

2469

秋草の露わけ衣越きもせず
ねもせぬそてはほすひまもなし

寄鏡

2470

ゆく水の花のかゝみの影もうし
あたなる色のうつりやすさは

2471

寄弓

かり人のひくやゆすゑのよるさへや
たゆまぬ關のもるにまとはむ

2472

寄玉

緒をたえしかさしの玉と見ゆはかり
きみにくたくるそてのしらつゆ

2473

續古

寄枕

わすれすよ三とせのゝちのにゐ枕
さたむはかりの月日なりとも

2474

寄帶

如何せんうへはつれなきした越ひの
わかれしみちにめぐりあはすは

2475

寄絲

夏ひきのいとしもなれしおもかけは
たえてみしかきのちそかなしき

2476

寄筵

あつまのゝつゆのかりねのかやむしろ
見ゆらんきえてしきしのふとは

寄舟

2477

白妙の袖のうらなみよる／＼は
もろこし舟やこきわかるらん

寄網

2478

人心あたなる名のみたつしきの
あみのゆくてになとかゝるらん

はしめて人に

2479

續古

かきりなくまた見ぬ人のこひしきは
むかしやふかくちきりをきけん

戀哥とて

2480

うつりにし心のいろにみたれつゝ

ひとりしのふのころもへにけり

2481

あともなき浪ゆく舟にあらねとも

2482

風をしるへにものおもふころ

昔ゝかけてつらきちきりにあゐそめて

2483

ふかきおもひの色そかひなき

なけくともこふともあはむみちやなき

きみかつらきのみねのしらくも

2484

あたしのゝわかはこの草にをくつゆの

そてにたまらぬものをこそおもへ

2485

わきかへりおつれはこほるたきつせの

したにくたけていくよへぬらん

2486

神な月のころまとろまであかして

かなしさのたくひもあらし神な月

ねぬよの月のありあけのかけ

つゝむことある人のはるころとを

くわかれけるに

2487

續古

けふやさはへたてはてつる春かすみ

はれぬおもひはいつとわかねと

2488

續拾

はるものこしにあひたる人の梅
花をとらせていりにける又のと
しおなし所にて

心からあくかれそめし花のかに

猶物思はるのあけほの

又

2489

續拾

我のみやのちものはむ梅花

にほふのきはるのよの月

2490

かけはかり見てかへりける道にて

火のあるよし人のいふに

こひ／＼てあふともなしにもえまさる

むねのけふりやそらに見ゆらん

ことなることなき女のこゝろたかく

おもひあかりてつれなかりければ

2491

さても猶おらてはやまし久方の

月の桂の花と見るとも

みやつかへしける女のつほねにて
たつぬるにかくれければかゝみの
ふたをとりかくしてかへさゝりけ
るのちその女ある人のもとにきた
まりゐにければそのふたをかへし
やるとて

ますかゝみふたりちきりしかねことの
あはてやゝかてかけはなれなん

返し

身こそかくかけはなるともますかゝみ
ふたり見しよのゆめはわすれす

2493

秋のくれをもろともにおしみあ
かしてさとへいてにける人にい
てぬ人につたへて

2494

如何せんすてゝし秋をしたふとて
身もおしからすおしきわかれを
うらめしやけふしもかふる衣手に
いりにしたまのみちまとふらん

返し

(2493)

わすれねよしたひてくれし秋よりも
あたにたつなはおしきわかれを

(2494)

をろかなるなみたも見えぬそてのうへを
とゝめしたまとたれかたのまむ

ある所なる人を我にはゝかるよ

しをきゝて三位中將

(2495)

きみならてかよふ人なきよゐ／＼を
ゐぬせきもりにかこたさらなん

返し

2495

あふさかはきみかゆきゝときゝしより
また見ぬ山にふみもかよはす

2496

心かはりにける人に

2497

あらはれてしもよりのちのいろなから
さすかにかれぬしらきくの花

かはるいろをたかあさつゆにかこちても
なかのちきりそ月くさのはな

ふみつたふる人さはることありて

かきたえて

2498

ふみかよふみちもかりはのをのれのみ
こひはまされるなけきをそする

(2498)

返し

みかりのゝかりそめ人をならしはに
われそふみゝしみちはくやしき

かきりなくしのひて人にしらせ

さりける人に

2499

續古

あちきなくなにと身にそふおもかけそ
それとも見えぬやみのうつゝに

返し

(2499)

いっはりのたかおもかけか身にそはむ
ゆめにまさらぬやみのうつゝに

2500

ありあけのあか月よりもうかりけり

ほしのまきれのよひのわかれは

(2500)

舟よするおもひもあらしよひのまの

わかれはほしのまきれなりとも

2501

如何せんさすかよな／＼みなれさお

(2501)

しづくにゝこるうちのかはをさ

うき舟のなにのちきりかみなれさお

あたなるそてをくたしそめけん

2502

しのふともこふともしらぬつれなさに

我のみいくよなけきてかねむ

(2502)

しのはれすこひすはなにをちきりとか

うきにそへたるなけきをもせん

2503

せきわひぬいまはたおなしなとり河

あらはれはてねせゝのむもれ木

(2503)

なとり河ゆくてのなみにあらはれて

あさゝそ見えんせゝのむもれ木

2504

思やれさとのしるへもとひかねて

わか身のかたにくゆるけふりを

とひかぬるさとのしるへに中たえて

(2504)

いまやあとなきけふりなるらん

(2505)

その人のもとより返事に

なにかとふおもひもいとゝすゑの松
わかなみならぬなみもこゆなり

返し

2505

こえ／＼す心をかくるなみもなし
人のおもひそすゑのまつ山

戀哥よみける中に

2506

時のまもいかに心をなくさめて
又あふまてのちきりまち見む

新
古

2507 かきやりしそのくろかみのすちことに

うちふすほとはおもかけそたつ

2508 わかれてのおもひをさそとしりなから

たれかはときし夜はのしたひも

2509 きてなれしにほひをいろにうつしもて

しほるもおしき花そめのそて

とをき所にゆきわかれにし人に

2510 心をはそなたのくもにたくへても

猶こひしさのやるかたそなき

2511

あなこひしふきかふ風もことつてよ

思わひぬるくれのなかめを

2512

おもひいつる心そやかてつきはつる

ちきりしそらのいりあひのかね

2513

人めもりへたつるみちをおもふより

やかてもむねにとつるせき哉

2514

勅撰

たれもこのあはれみしかきたまのをに

みたれて物をおもはすも哉

2515

むすひをくなのみなかるゝわたり河

わかてにかけん浪とやは見し

2516

をのつからあはれとかけんひとことも

たれかはつてむやへのしらくも

2517

けふまては人もわすれすと許も

うつゝにしらぬなかそかなしき

2518

ちきりをきしをとをたのみにしのふとも

おなし風たにふかすやあるらん

つゝむことありてふみやることも

せぬ人のてならひしたるを人つて

に見て

2519

うら／＼にたゝかきすするもしほくさ

見るよりいとゝたつけふり哉

人のもちたるあふきにうつ山へ

のうつゝにもとかきたるを見て

2520 續後
さそなけくこひをするかのうつ山

うつゝのゆめの又し見えねは

2521
をのつからそれと許をよそに見て

むねにせかるゝ水くきのあと

ひさしくかきたえたる人に

2522 續後
いかゝせむありしわかれをかきりにて

このよなからの心かはらは

2523

かきりあらんいのちもさらになからへし

これよりまさる月日へたては

2524

身をつくしいさ身にかへてしつみゝむ

おなしなにはのうらのなみかせ

2525

涙せくむなしきとこのうき枕

くちはてぬまのあふことも哉

2526

こひしさを思しつめむ方そなき

あひ見しほとにふくるよことは

2527

よしさらはおなし涙にくれなゐの

いろにをこひむ人はしるとも

續古

2528 山のはにまたれていつる月かけの

はつかに見えしよはのこひしさ

2529 なをさりにたのめしほともすきはては

なにゝかくへきいのちなるらん

2530 いかさまにこひもなけきもなくさめん

この忝なからのあらぬよも哉

2531 あすしらぬ忝のはかなさをおもふにも

なれぬひかすそいとゝかなしき

2532 はかなしなゆめにかよはむよな／＼を

かたみにそれと思なすとも

2533

をのつから人もなみたやしるからん

そてよりあまるうたゝねのゆめ

2534

おもかけの身にそふ袖のにほひゆへ

たゝそのいろにしむ心哉

2535

思いつるはるの衣のかたみまで

いはぬ色にそちしほそめてし

2536

身にかへて人をおもはてこひ見はや

なきになしてもあふよありやと

2537

まつらむとちきりしほとをわすれすは

たれとなかめて日をくらすらん

2538

かくしらはをたえのはしのふみまとひ

わたらてたゝにあらましものを

2539

おしからぬいのちもいまはなからへて

越なし舌をたにわかれすも哉

雜

旅

伊勢の勅使の御ともにすゝかのせ
きこえしに山なかのさくらさかり
なりしゝたにて

えそすきぬこれやすゝかの關ならむ
ふりすてかたき花のかけ哉

宇治御幸に秋旅

わかいほは峯のさゝはらしかそかる
月にはなるな秋のゆふつゆ

建曆三年八月内裏哥合

山曉月

2542

やとれ月衣手をもしたひまくら
たつやのちせの山のしづくに

河朝霧

2543

あさほらけいさよふ浪もきりこめて
さとゝひかぬるまきのしま人

建仁三年秋和哥所哥合 羈中暮

2544

たちまよふくものはたてのそらことに
けふりをやとのしるへにそとふ

山家松

2545

つれ／＼とまつにくたくる山かせも
さとから人の心をやる

正治元年冬左大臣家十首哥合

羈中晩嵐

2546

新古

いつこにかこよひはやとをかり衣
ひもゆふくれの峯のあらしに

同二年二月同家哥合 秋旅

2547

新古

わすれなん松となつけそ中／＼に
いなはの山の峯の秋風

建仁二年三月六首旅

2548
新古

そてにふけさそなたひねのゆめも見し

思ふ方よりかよふ浦風

建永元年秋和哥所暮山雲當座

2549

あとたえてとはれぬ山をたかみそき

ゆふへのそらになひくしらくも

建保右大臣家哥合羈中松風

2550
續後

なれぬよのたひねなやます松風に

このさと人やゆめむすふらん

攝政殿詩哥合羈中眺望

2551

秋の日のうすき衣に風たちて

ゆく人またぬをちのしらくも

2552

かりいほやなひくほむけのかたよりに

こひしき方の秋風そふく

建仁元年十二月八幡哥合旅宿嵐

2553

故郷にさらはふきこせ峯のあらし

かりねの山のゆめはさめぬと

(2554)

母のおもひに侍し年のくれにひえ
の山にのほりて中堂にこもりて侍
し春の始もわかれすかつふる雪に
あとたえたりしあした入道殿山の
おほつかなさなとこまかにかき
つゝけ給ておくに

(2555)

子を思心や雪にまよふらん
山のおくのみ夢に見えつゝ
みたひおかみひとたひたてしおのゝをとを
いまきく許思やる哉

御返し

2554

うちもねす嵐のうへのたひ枕

みやこのゆめにわくる心は

2555

おのゝをとをたてしちかひもいさきよく

雪にさえたるすきのしたかけ

建久七年内大臣殿にて文字をか

みにをきて廿首哥よみし中に

たひのみち

2556

たにの水峯たつくもをこえくれて

まくらゆふへの松の秋風

2557

ひかすゆく山と海とのなかめにて

2558

はるより秋にかはる月かけ

のきにおふるくさのなかけしやとの月

2559

あれゆくかせやかたみそふらん

みやことてくものたちゐにしへのとも

2560

山のいくへをへたてきぬらん

ちきりきなこれをなこりの月のころ

なくさむゆめもたえて見しとは

2561

松尾哥合山家夕

身におひてすむへき山のゆふくれを
ならはぬたひとなにいそくらん

2562

内裏哥合山夕風

かねのをとを松にふきしくおひ風に
つま木やをもきかへる山人

2563

野曉月

打はらひさゝわくるのへのかす／＼に
つゆあらはるゝありあけの月

2564

内よりめされし哥 羈中

そこはか見えぬ山ちにことゝへと
こよひもうとし白雲のやと

旅泊

2565

かちまくらたれとみやこをしのはまし
ちきりし月のそてに見えすは

みなせ殿の山のうへの御所つくられて
のちまいりて池など見めぐりてまかり
いつとて清範朝臣のもとへ

2566

おもかけにもしほの煙たちそひて

2567

ゆく方つらきゆふかすみ哉

見てもあかぬはるの山へをふりすてゝ

2568

花のみやこそたひ心ちする

思やる月こそ水にやとるらめ

まくらむすはぬかへるさのみち

述懷

建久五年夏左大將殿哥合述懷

浮田杜

2569

きみはひけ身こそうきたの
もりのしめ
たゝひとすちにたのむ心を

述懷三首 建永元年秋和哥所

2570

新古

君か舌にあはすはなにを
たまのをの
なかくとまてはおしまれし身を

2571

我そ見しみよの始の秋の月
年はへにけりもとの身にして

2572

續古

思をくつゆのよすかのしのふくさ

きみをそたのむ身はきえぬとも

承元二年少將具親朝臣八幡にて

講すへきよし申ゝかはよみてを

くり侍し

2573

せく袖は唐紅の時雨にて

身のふりはつる秋そかなしき

秋風に涙そきほふましりなん

2574

むかしかたりのみねの月かけ

同四年九月粟田宮哥合 于時辭職

寄海朝

2575

わかの浦やなきたるあさのみをつくし
くちねかひなき名たにのこらて

寄山暮

2576

おもひかねわかゆふくれの秋の日に
みかさの山はさしはなれにき

おなしころ

2577

續拾

なきかけのおやのいさめはそむきにき
こを思みちの心よはさに

2578

賀茂社哥 社頭述懷

あはれしれ霜より霜にくちはてゝ
代ゝにふりにし山あひの袖

2579

承元二年五月住吉哥合 寄山雜

ゆくすゑのあとまてかなしみかさ山
みちあるみよにみちまとひつゝ

2580

松尾哥合 社頭雜

神かきやわか身のかたはつれなくて
秋にそあへぬくすのうら風

建曆三年潤九月内裏哥 于時從三位侍從

寄風雜

2581

あすかゝは今はふるさとふく風の
身はいたつらに秋そかなしき

三宮十五首雜哥

2582

あめつちもあはれしるとはいにしへの
たかいつはりそしきしまのみち

2583

つれなくて今もいくよのしもかへむ
くちにしのちのたにのむもれ木

承元のころほひ内より古今をたま

はりてかきてまいらせしおくに

續後

2584

ためしなき昔々のむもれ木くちはてゝ

又うきあとの猶やのこらん

2585

てるひかりちかきまもりは名のみして

人のしもにや思きえなん

ふるき哥をかきいたして仁和寺宮

にまいらすとて

2586

年深きしくれのふるはかきそをく

きみにのこさぬ色や見ゆると

2587

承久三年内よりめされし述懷哥

神かけていのりし道のむもれ水

むすひもはてぬかけやたえなむ

爲家元服したる春加階申とて

兵庫頭家長につけ侍し

2588

子を思ふかきなみたのいろにいてゝ

あけの衣のひとしほも哉

ゆるさるへきよし御氣色侍ければ

返し 家長

(2588)

道を思心の色のふかければ

このひとしほもきみそゝむへき

宰相の中七人帶劔先例なきよしを
申て侍従を辭申たりし時ふるき人
のもとより

おもひとるみにしたかはぬこゝろもて
たちはなれては猶や戀しき

返し

老らくの舌のことはりをみにしれと
また面影はたちもはなれす

京官除目のついでに下臈參議おほ
く納言昇進あるへきよしきこえし
に正三位を申とて清範朝臣につけ
侍し

雪の内のもとの松たにいろまされ
かたへの木ゝは花もさくなり

建久六年叙位にともにかゝいしたる
あしたに左衛門督隆房卿

くれ竹にこつたふとりの枝うつり
うれしきふしもともにこそしれ

2591

返し

もゝちとりこつたふ竹のよのほとも
ともにふみゝしふしそうれしき

四位してのち臨時祭日越中侍従

舞人にて内をいてしほとに

2592

たちかへり猶そこひしきつらねこし
けふのみつのゝ山あゐのそて

返し つきの日

(2592)

山あゐのしおれはてぬる色なから
つらねしそてのなこりはかりを

小侍従にゆかりある人のむかへにつ
かはしたれはまかるにことつけやす
ると申ゝかはその人のかいなにかき
つけし

怨はや舌にかすならぬうき身をは
わきてとふへき人もとはすと

返し 小侍従

まてとかくとはれぬわれをうちかへし
うらむるにこそねたさそひぬれ

西行上人みもすその哥合と申て
判すへきよし申ゝをいふかひな
くわかゝりし時にてたひ／＼か
へさい申ゝをあなかに申をし
ふるゆへ侍しかはかきつけてつ
かはすとして

山水のふかゝれとてもかきやらす

きみにちきりをむすふはかりそ

返し
上人

むすひなかすゝゑを心にたゝふれは
ふかく見ゆるを山かはの水

又

神ち山松のこすゑにかくるふちの
はなのさかえを思こそやれ

又返し

かみち山きみか心のいろを見む
したはのふちに花しひらけは

と申をくり侍しころ少將になりて
あくるとし思ゆへありてのそみ申
さゝりし四位して侍き

みなせ殿にさふらひしに大僧正のなかう
たをよみてたてまつられたる返したゝい
まつかうまつるへきよしおほせこと侍し
かはやかてかきつけ侍し

さてもいかに わしのみ山の 月のかけ
つるの林に いりしより へにけるとしを
かそふれは ふたちとせをも すきはてゝ
のちのいつゝの もゝとせに いりにけるこそ
かなしけれ あはれみのりの 水のあわ

きえゆくころに　なりぬれは　それに心を
すましてそ　わか山河に　しつみゆく
心あらそふ　のりの師は　われも／＼と
あをやきの　いと所せく　みたれきて
花もゝみちも　ちりゆけは　こすゑあとなき
み山への　みちにまとひて　すきなから
ひとり心を　とゝむるに　かひもなきさの
しかのうら　あとたれましゝ　日よしのや
神のめくみを　たのめとも　人のねかひを

みつ河の なかれもあさく なりぬへし
峯のひしりの すみかさへ こけのしたにそ
むもれゆく うちはらふへき 人も哉
あなうのはなの 廿中や 春のゆめちは
むなしくて 秋のこすゑを 思ふより
冬の雪をも たれかとふ かくてやいまは
あとたえん とおもふからに くれはとり
あやしきよるの わかおもひ きえぬ許を
たのみきて 猶さりともと おもひつゝ

しはし宮こに やすらひて のこるみのりの
花のかに しひて心を つくは山
しけきなけきの ねをたつね しつむゝかしの
たまをとひ すくふ心を ふかくして
つとめゆくこそ あはれなれ み山のかねを
つく／＼と わかきみかよを おもふにも
峯の松風 のとかにて ちよにちとせを
そふるほと のりのむしろの 花の色
野にも山にも にほひてそ 人をわたさむ

(2597)

はしとして　しはし心を　やすむへき
つるにはいかゝ　あすかゝは　あすよりのちや
わかたちし　そまのたつきの　ひゝきより
みねのあさきり　はれのきて　くもらぬそらに
たちかへるへき

反哥

さりともと思ふ心そ猶ふかき
たえてたえゆく山河の水

返し

久方の　あめつちともに　かきりなき
 あまつひつきを　ちかひをきし　神もろともに
 まもれとて　わかたつそまと　いのりつゝ
 昔の人の　しめてける　峯のすきむら
 いろかへす　いくとし／＼を　へたつとも
 やへの白雲　なかめやる　みやこのはるを
 となりにて　みのりの花も　おとろへす
 にほはむ物と　思をきし　すゑはのつゆも
 さためなき　かやかしたはに　みたれつゝ

本の心の　それならぬ　うきふしゝけき
くれ竹に　なくねをたつる　うくひすの
ふるすはくもに　あらしつゝ　あとたえぬへき
谷かくれ　こりつむなけき　しゐしはの
しゐてむかしに　かへされぬ　くすのうらはゝ
うらむとも　君はみかさの　山たかみ
くもゐのそらに　ましりつゝ　てる日をよゝに
たすけこし　ほしのやとりを　ふりすてゝ
ひとりいてにし　わしの山　昔にもまれなる

あとゝめて　ふかきなかれに　むすふてふ
のりのし水の　そこすみて　にこれるよにも
にこりなし　ぬまのあしまに　かけやとす
秋の半の　月なれは　猶山のはを
ゆきめくり　そらふく風を　あふきても
むなしくなさぬ　ゆくすゑと　みつの河波
たちかへり　心のやみを　はるくへき
日よしのみかけ　のとかにて　君をいのらん
よろつ吉に　ちよをかさねて　松かえを

つはさにならす　　つるのこの　　ゆつるよはひは
 わかのうらや　　今もたまもを　　かきつめて
 ためしもなみに　　みかきをく　　わかみちさても
 たえせすは　　ことのはことの　　いろ／＼に
 のち見む人も　　こひさらめかも
 きみをいのる心ふかくはたのむらん
 たえてはさらに山河の水

建保五年五月御室にて三首

寄山朝

2598

けさその山のかひあるみむろ山

たえせぬみちのあとをたつねて

寄海暮

2599

しき波のたゝまくおしきまとゐして

くるゝもしらぬわかの人

承久二年八月新院よりしのひてめされし

閑中曉月

2600

春秋ものときき宿におしめはや

山のはとをきあり明の月

御室にて上陽人を

秋の月むなしき軒のいくめぐり

よそに出にし雲の上哉

承久二年二月十三日内裏に哥講せらるへ
きよしもよほされしかは母の遠忌にあた
れるよし申ておもひよらさりしにその日
の夕かたにはかに忌日をはゝからすまい
るへきよし藏人大輔家光三たひつかはし
たりしかはかき付てもちてまいりし二首

春山月

2602

さやかにもみるへき山はかすみつゝ
わかみの外も春のよの月

墅外柳

2603

道のへの墅原の柳下もえぬ
あはれなけきのけふりくらへに

同年九月十三夜前大僧正のもとに

たてまつる

2604

ありてうきいのちはかりは長月の
月をこよひととふ人もなし

2605

おもかけにおほくのこよひしのふれと

月と君とそかたみ成ける

2606

なにかせん昔戀しき老か舌は

たへてみるへき月にしあらねは

2607

秋をへてくやしき月になれにけり

2608

はてうきすゑの世に宿りきて

さとわかすみをははからてしたひみし

2609

月もや今はおもひすつらん

今はとておもひはてつる袖の上を

ありしよりけにやとる月哉

2610

行すゑの月と花とに情ありて

この比よりは人やしのはん

2611

我宿とうへしこのまの月にたに

すみはてかたき世をもきく哉

2612

あはれなをいまさへいたくなからへて

いかなる秋の月かみるへき

2613

今年までみにあまりぬる思ひては

君にうれへて月を見哉

返事

(2604)

長月の月はこよひの雲の上に

なかむとこそは思ひやりつれ

(2605)

うきみなを月にならひてかたみならは

かへして君を思しる哉

(2606)

吹はらふ山の嵐をまてしはし

しはしそ月は雲かくるとも

(2607)

くたりはつる世の行すゑはならひなり

のほらはみねに月もすみなん

(2608)

月影の人にやとらぬ世とならは

しはしもいかゝあり明の月

(2609)

いかさまにいさとよ月はてらすらん

すみはてつへき人は人かは

(2610)

我もさそ今行末をとほ月

こたへはいかにうれしからまし

(2611)

誰にいはむおもへはかなしもろともに

なからへん跡の月のかたみを

(2612)

よのなかをかみにうれへてみる月に

おもふこゝろは今やはるらん

(2613)

はてゝ又ましはるよとやてらすらん
さらはたのもし秋のよの月

無常

きさらきのころ母のおもひになり

侍しとふらふとて大輔

つねならぬ昔はうき物といひ／＼て

けにかなしきをいまやしるらん

返し

かなしきはひとかたならすいまそしる

とにもかくにもさためなきよを

(2615)
新
古

おなし三月盡日大將殿より

春霞かすみしそらのなこりさへ

けふをかきりのわかれなりけり

御返し

2615

わかれにし身のゆふくれにくもきえて
なへてのはるはうらみはてゝき

おなし年五月になりて三位季經卿

(2616)

はかなさをわすれぬほとをしるやとて
月日をへてもおとろかす哉

返し

2616

月日へてしつまるほと
のなけきにそ
ことゝふ人のなさけを
もしる

秋のわきせし日五條へ
まかりて

かへるとて

2617

新古今

たまゆらのつゆもな
みたもとゝまらす
なき人こふるやとの
秋風

返し

入道殿

(2617)

秋になり風のすゝしく
かはるにも
なみたのつゆそしの
にちりける

三位中將なくなりての秋はゝの
おもひにてこもりゐたる九月盡

日山座主にたてまつる

2618

はつしもよなれのみ時はわきかほに

2619

人はかそへぬ秋のくれかは

みそちあまりふたとせへぬる秋のしも

2620

まことにそてのしたとおるまで

ふりまさるわかよのあらしよわるらし

そてまでもろき秋のくれ哉

2621

見し人のなきかすまさる秋のくれ

わかれなれたる心ちこそせね

2622

霞まてとはれし人はまかひにき

むなしき秋のくれのしらくも

2623

あけてこれらもむかしになりぬへし

我のみもとの秋とおしめと

2624

とはぬ人なれつる秋のつゆあらし

あとたしかなる庭のあさちふ

2625

ねかはるゝおもひのすゑも風さむく

谷のとほそも秋やいぬらん

2626

またさめすよしなきゆめの枕哉

心の秋を秋にあはせて

2627

を山田のつゆのかりいほのやとりかな

きみをたのまむいなつまのゝち

御返し

(2618)

くれの秋をかそへてしるはかひもなし

しるしありけりにはのはつしも

(2619)

したとおるそてにてきみも思しれ

よそちかさぬるしものたもとを

(2620)

わか秋のふくれは冬の山越ろし

つよく身にしむあかつきのそら

(2621)

人の舌の霜にしぐれをそめかへて

わかれなれたる心ちこそすれ

(2622)

ふち衣そめけんはるの霞より

さても秋のくれのしらつゆ

(2623)

思いつるきのふの秋はむかしにて

このころおもふゆくすゑのはる

(2624)

わかやとはけさこそいとゝあはれなれ

秋にをくるゝにはをなかめて

(2625)

君はさは思しらてやたとるらん

ねかふすみかそ秋のとなりも

(2626)

ひとりのみ夜もあけやらぬ秋のゆめの

さは又さめぬきみもありける

(2627)

秋も冬もなかめはかりはきみをのみ

たのむのかりを月にまかせて

(2627)

ことのはにむすふちきりは見えぬれと

たのめといかゝいはしろの松

おなし日女院の大輔に

とゝまらぬ秋のわかれのかす／＼に
見なれし人のなきそおほかる

返し

つく／＼とひとりなかめて思いつる
心の内をきみもしりけり

おなしとしの雪のあした大將殿より

白妙のと山の雪をなかめても
まついろおもふきみかそて哉

(2630)

人のよは思なれたるわかれにて

あさ日にむかふ雪のあけほの

(2631)

いかに君思やるらんこけのしたを

いくへ山ちの雪うつむらん

(2632)

またさめぬきのふの夢の袖のうへに

たえすむすへるゆきのした水

(2633)

猶のこれあけゆくそらの雪のいろ

このよのほかのゝちのなかに

御返し

2629

衣手にはてなき涙まつくれて

かはると山の雪をたに見す

2630

ゆきつもりふりゆくかたそあはれなる

思なれたるわかれなれとも

2631

おなし忝になれしすかたはへたゝりて

ゆきつむこけのしたそしたしき

2632

こそは見ぬきのふのゆめのかすそひて

さくらにゝたるのきの雪哉

心もてこのよのほかをとをしとて
いはやのおくのゆきを見ぬ哉

建久元年二月十六日西行上人身ま
かりにけるをはりみたれさりける

よしきゝて三位中將のもとへ

もち月のころはたかはぬそらなれと

きえけんくものゆくゑかなしな

上人先年詠云ねかはくは花のしたにて
はるしなんそのきさらきのもち月のこ
ろ今年十六日望月也

(2634)

返し

紫の色ときくにそなくさむる
きえけんくもはかなしけれども

故攝政殿にはかに夢の心ちせし御

ことのあくる日宮内卿とふらひつ

かはしたりし返事についてに

昨日までかけとたのみしさくら花

ひと夜のゆめのはるの山かせ

返し

(2635)

かなしきの昨日のゆめにくらふれは
うつろふ花もけふの山かせ

(2636)

そのゝち日かすへて又あれより

(2637)

さくら花こふともしらしかけろふの
もゆるはる日になく／＼そふる

(2638)

春の夜のおほろ月よもおほろけの
夢とも見えぬ花のおもかけ

なく涙このめもかれしはるのゆめに
ぬるゝたもとは君もかはかし

(2639)

ふしてこひおきてもまとふはるのゆめ
いつかおもひのさめむとすらん

(2640)

思やるこけのしたこそかなしけれ

(2641)

かすみのたにのはるのゆふくれ

あふき見しかりのかすみにきえしより
むなしくゝるゝはるのそら哉

(2642)

かりそめのやとにせきいれし池水に

山もうつりてかけをこふらし

(2643)

いつまでかたれもいくたのもりのつゆ

きえにしあとをこひつゝもへん

(2644)

たまきはるいのちはたれもなきものを

わすれね心思返して

(2645)

きえぬへし見れはなみたのたきつせに

うたかた人のあとをこひつゝ

返し

2636

こひわふる花のすかたはかけろふの

もえしけふりをむねにたきつゝ

2637

せきもあへぬ涙のとかゝくもれ月

霞したしきそらとたのまむ

2638

紅の涙ふりいてしはるさめに

あらし身をしるそてのたくひは

2639

夢ならてあふよもいまはしらつゆの

越くとはわかれぬとはまたれて

2640

うつもれぬたまのこゑのみとまりゐて

したひかねたるこけのした哉

2641

かすみにしうき物からのほるのそら

くるれはかなしそれもかたみと

2642

山の色はせきいれし水にうつるとも

こひしきかけをいつか見るへき

2643

春の夢のかきりにきゝしゆふへより

いくたのもりの秋もうらめし

2644

昔ゝふともわすれし心たまきはる

あたのいのちに身こそかはらめ

2645

今はたゝわか身ひとつのおもひ河

うたかたきえてたきつしらなみ

2646

おなしころ人のとふらへりし返し

道かはるけふりのはてにたちそはて

2647

ゆめならねはそあけくらすらん

見しもうきかはらぬ夢とかつきけと

2648

わか心にはためしたになし

みかさ山あふきしみちもたのまれす

昔のことはりにまとふ心は

2649

見ぬ人もしらぬも涙かゝる昔に

なれてそむかぬそてのつれなさ

2650

おもかけはまたかきりともたとられす

いとしも人のしつのをたまき

2651

昔中はうきにあふきの秋はてぬ

なにのわかれのわすれかたみそ

2652

さきたてゝしのふへしとはしらさりき

おもへおもひのほかの涙を

2653

あさつゆにぬれてのゝちの忝もしらす
衣にそめぬ色そかなしき

2654

おなし年の夏ころの事にや人に

わかそむるたもとの色のひまも哉

2655

それゆへふかきことのはも見む

なくは忝にしのはれんとは見し人そ

2656

をくるゝ身こそ思にはにね

あけくれもおほえぬ月日へたゝりて

それかのくものそらもたのます

2657

おもひきやまちしやよひの花の色に

はなたちはなのよすか許と

2658

あたに見し花のことやはつねならぬ

うきはるかせはめぐりあふとも

2659

よるのつるの心のいかにとまりけん

衣の色にたれもなくねを

2660

おもひかねひとりなこりをたつねつゝ

そのよにもにぬやとを見し哉

2661

うたかひてうへしこすゑはあおはにて
人めはにはのよそにかれにき

2662

日をさしていそきし池の花の舟

みくさのなかにうき忝なりけり

2663

おもひ河あはれうきせのまさりつゝ

いか許なるなみたとかしる

又のとし三月七日かもに御幸

侍しつきの日大僧正十首御哥

の返し

2664

うきなから昨日はそれもしのはれき

またしらさりしこそあのあけほの

2665

けさはいとゝ涙そ袖にふりまさる

2666

きのふもすきぬこそむかしと

をくれてはやすくすきける月日哉

2667

したひしみちはゆく方もなし

おほかたはたゝあけぬよの心ちして

しらすことしのきのふけふとも

2668

わすられぬいのちのかきりなけきして

つらきはもとのなさけなりけり

2669

とをさかる月日のうさをかそへても

おもかけのみそいとゝけちかき

2670

たのまれぬ夢てふ物のうき世には

こひしき人のえやは見えける

2671

うかりけるやよひの花のちきり哉

ちるをや人はならひなれとも

2672

神に猶君をいのりしさか木はの

かけにも見えしたまかつら哉

2673

いはへともわかためつゆそこほれそふ

ふちのさかりを松はふりつゝ

建永元年七月和哥所當座

寄風懷舊

2674

月日へて秋のこの葉をふく風に

やよひのゆめそいとゝふりゆく

雨中無常

2675

よそふれはかさねてもろきすゑのつゆ
身をしるそてのうへのむらさめ

六條三位 家衡卿 人にをくれてな

けくときゝて申をくりし

2676

とゝむてふしからみもなきわかれちの

秋のなみたをなにゝせくらん

2677

なきわたるよさむの風のいかならむ

とこよはなれしかりのつはさに

返し

(2676)

せく袖もなく／＼こそはあかしつれ
むなしきとこの秋のこのころ

(2677)

とはれてもとこよはなれしかりかねの
秋のわかれはかなしかりけり

2678

承元四年三月七日左大將殿へ

をくれしとしたひし月日うきなから
けふもつれなくめぐりあひつゝ

(2678)

返し

大將殿

かすみにしけふの月日をへたてゝも

猶おもかけのたちそはなれぬ

入道寂蓮身まかりぬときゝて雅經少將

のもとへ

2679

たまきはる春のことはりもたとられす

猶うらめしきすみよしの神

返し

限あれはうらみても又いかゝせむ

かゝるうき世にすみよしの神

(2679)

承久元年六月故女院御忌日蓮華心

院にまいりて思いつることゝもおほ

くてまいられたりし女房の中に

2680 おいらくのつらきわかれはかすそひて

昔見し忝の人のすくなさ

2681 おしむへき人はみしかきたまのをに

うき身ひとつのなかきよのゆめ

2682 けふことにくさはのつゆをふみわけて

あとなきゝみのあとそかなしき

2683

今よりのけふこむ人をかそへつゝ
これやなこりのかたみなりける

つきの日

(2684)

おいらくの思ひそゝらにしられにし
うきをかさねしいにしへのゆめ

(2685)

思きやと許は見し年／＼も

(2686)

ことしをしらぬうらみなりけり
しらさりきたれもえしらしいにしへや
あとなきゝみかあとを見むとは

(2687)

しのふへきけふこむ人のそのかすに
のこるへしとはおもはさりしを

老耄籠居のゝち秋ころ母の思ひなる人に

2688

かはりにしたもとの色もいかならん

2689

しくれはてぬるよものこすゑに

いか許秋の夜すからしのふらん

2690

ひさしきはてのさらぬわかれを

つゆしくれ袖になこりをしのへとや

秋をかたみのわかれなりけん

2691

かたみとていくかもあらぬ秋の日に

2692

うつろひまさるしらきくのはな
なき人をこふる涙やきおふらん

2693

おつるこのはにあらしたつころ

霜のたて山の錦の夜をへては

2694

ともなふむしやよりはりはつらん

思やる枕の霜もさえはてゝ

2695

宮このゆめもあらしこそふけ

さためなくしくるゝ雲のゆきゝにも

そなたのそらをわすれやはする

2696

おほかたの身をしる袖にをきそへて

猶色ふかき秋のつゆ哉

2697

ふるさとの時雨につけてことつてよ

ひとかたならず思やるとは

女院かくれさせおはしまして典侍吉

をそむきにしころとふらひつかはし

て前宮内卿

(2698)

花のいろもうきよにかふるすみそめの

そてやなみたに猶しつくらん

返し

すみそめを花の衣にたちかへし
なみたのいろはあはれとも見き

神祇

後京極攝政殿伊勢勅使時外宮

にまいりて

2699

新古

ちきりありてけふ宮河のゆふかつら
なかき廿までもかけてたのまむ

むかし八幡の哥合とて人のよませ
侍し社頭述懷

2700

たのむ哉くもゐにほしをいたゝきて
わかすみかてふもとのちかひを

住吉并依羅社に求子の哥よみ
てたてまつるへきよし祠官

申ゝかはたてまつりし

2701
續後

住吉の松かねあらふしきなみに

いのるみかけはちよもかはらし

2702

きみか舌はよさみのもりのとことにはに
松とすきとやちたひさかえん

承元二年の秋少將具親三社にて

うた講すへきよし申ゝ中に住吉

2703

つれもなく猶すみの江にたむけくさ

ひきすてらるゝ道のくち葉を

2704

かきつめし松のした浪いろわかぬ

もくつなりけり身さへくちぬる

廣田

2705

あはれひをひろたのはまにいのりても
いまはかひなき身のおもひ哉

2706

あまのすむさとのしるへのいくとせに
われからたへてみるめなりけり

ことはりと思しことを北野にいのり

申とて

2707

續後

ちはやふる神のきたのにとたれて

のちさへかゝる物やおもはん

そのことはかりしるしあらたに

なむ侍ける

日吉社にこもりて思つゝけゝる事の

なかに

2708

見し夢のすゑたのもしくあふことに

心よはらぬものおもひ哉

2709

うしとよを三とせはすきのうれへつゝ

かくてあらしに身やましりなん

2710

かそへやるほとやなけきをいのりけん

神にまかせてねをそなきつる

2711

すてはつなちきりあれはそたのみけむ

神のなかにも人のなかにも

承久元年九月日吉哥合とて内より
のおほせことにて六首の中

社頭松風

2712

たのみこしゝるしもみつの河よとに
今さへ松の風そひさしき

湖上眺望

2713

にほの海にあさなゆふなになかめして
よるへなきさの名にやくちなん

御熊野詣の御共にまいりて哥

つかうまつりし中に

本宮

寄社祝

2714

ちはやふるくまのゝ宮のなきの葉を
かはらぬ千杵のためしにそおる

河千鳥

2715

さ夜千鳥やちよと神やをしふらん
きよきかはらにきみいのるなり

山家月

2716

み山木のかけよりほかにくまもなし
あらしにすてしかりいほの月

新宮

海邊殘月

2717

わたつうみもひとつに見ゆるあまのとの
あくるもわかすゝめる月影

庭上冬菊

2718

霜をかぬ南のうみのはまひさし
ひさしくのこる秋のしらきく

曉聞竹風

2719

あけぬるか竹のは風のふしなから
まつこのきみのちよそきこゆる

那智

深山風

2720

風のをとまたゝ
舌のつねにふかはこそ
み山いてゝのか
たみにもせめ

瀧間月

2721

やはらくるひかり
そふらしたきのいと
のよるとも見えす
やとる月かけ

寺落葉

2722

てらふかきもみち
の色にあとたえて
から紅をはらふこ
からし

本宮にて又講せられ侍し遠近

落葉

2723

こけむしろみとりにかふるからにしき
ひとはのこさぬをちのこからし

暮聞河波

2724

もろ人の心のそこもにこらしな
ゆふへにすめる河波のこゑ

道のほとゝの哥山路月

2725

袖の霜にかけうちはらふみ山ちも
またすゑとをきゆふつくよ哉

2726

曉初雪

冬もけさことしの雪をいそきけり
よをこめてたつみねのあけくれ

深山紅葉

2727

み山ちはもみちもふかき心あれや
あらしのよそにみゆきまちける

海邊冬月

2728

くもりなきはまのまさこにきみかよの
かすさへ見ゆる冬の月かけ

河邊落葉

2729

そめし秋をくれぬとたれかいはた河
またなみこゆる山ひめのそて

旅宿冬月

2730

いは浪のひゝきはいそくたひのいほを
しつかにすくる冬の月かけ

羈中霰

2731

冬の日をあられふりはへあさたては
浪に浪こすさのゝ松風

夕神樂

神かきやけふのそらさへゆふかけて
みむろの山のさか木はのこゑ

釋教

後法性寺入道關白殿舍利講に

詩哥結縁あるへしとて十如是

の心を 相

2733

あともなくむなしきそらにたなひけと
くものかたちはひとつならぬを

性

2734

にこり江やを河の水にしつめとも
まことはおなし山のはの月

2735

躰

かりそめにつるの林の名をたてし
けふりのゝちのすかたをそ見る

力

2736

みなれさほいはまになみはちかへとも
たゆますのほるうちのかはふね

作

2737

春の田に心をつくる山かつも
うふるさなへそ色にいてける

2738

回

たねまきし春をわすれぬつまなれや
かきほにしのおやまとなてしこ

縁

2739

年をへて子日になるゝひめこ松
ひくにそちよのかけも見えける

果

2740

袖のかをよそへてうへしたちはなも
あさをくしもに身をむすふまで

報

2741

しらぬよを思ふもつらきめのまへに
又なけきつむのちのけふりよ

本末究竟等

2742

あさちふやましるよもきのすゑ葉まで
もとの心のかはりやはする

人のよませ侍し化城喻品哥

2743

かりのやとにたとふるのりをあふけとも
しはしやすめぬ身のうれへ哉

報恩會五百弟子品

2744

こひしとてこかるゝ色もあらしふく
はゝそかはらに人もやとらて

同會人記品

2745

もろともに思そめけるむらさきの
ゆかりの色もけふそしらるゝ

大輔勸住吉一品經法師品

2746

たつねゆくし水にちかきみちそこれ
みのりの花のつゆのしたかけ

報恩會提婆品

2747
續古

わたつうみのそのたまもにやとかりて
みなみのそらをてらす月かけ

報恩會勸持品

2748

きりはれてゆくすゑてらす月かけを
よもさらしなとなになかめけん

涌出品

2749

いかにしてはつねはわかきうくひすの
ふるき野山の春をつけゝむ

2750

分別功德品

とふとりのあすか河風それもかと
袖ふきかへし花そふりしく

囑累品

2751

三たひなつるわかくろかみのすゑまでも
ゆつるみのりをなかくたもたむ

亡父十三年の忌日に遺言に侍
しかはうたよむ人／＼すゝめ
て結縁經供養し侍しに

巖王品

2752

この道をしるへとたのむあとしあらは
まよひしやみもけふはゝるけよ

律師猷圓すゝめし法華經普賢品哥

2753

こち風にちりしく花もにほひきて
わしのみ山のあるしをそとふ

母の周忌に法華經六部みつから

かきたてまつりて供養せし一部

のへうしにゑにかゝせし哥

一卷

2754

あはれしれはるのそなたをさすひかり
わか身につらきゝさらきのそら

二局

2755

おしますよあけほのかすむ花のかけ
これもおもひのしたのふるさと

三局

2756

郭公たつぬる峯もまとはまし
かりねやすむるしるへならずは

2757

四局

身をしほる山井のし水をとちかし
さきたつ人に風やすゝしき

五局

2758

をみなへしうけゝるたまのあとしあれは
きえしうはゝにつゆなみたれそ

六局

2759

てらさなん昔ゝもかきらぬ秋の月
いる山のはにひかりかくさて

七局

2760

むかはれよこのはしくれし冬の夜を
はくゝみたてしうつみ火のもと

八局

2761

歴劫の弘誓の海に舟わたせ
生死の波は冬あらくとも

無量義經

2762

たのもしなひかりさしそふさかつきを
舌をてらすへきはしめとや見ぬ

普賢經

2763

あさ日かけおもへはおなしよるの夢
わかれにしほるしのゝめのつゆ

心經

2764

むなしさをみよのほとけのはゝならは
心のやみをそらにはるけよ

無量義經の心を人のよませしに

2765

わたしもりいたすふなちはほともあらし
身はこのきしにきりはれすとも

2766

住江殿にて供養すへしとて人の
すゝめ侍し解脫房のためとて
法華經大意

のりの花きくのあさつゆやとりきて
もらすかすなきひかりをそまつ

海路懷舊

2767

かへり見はゆくかたしたふしるへせよ
南の海のふかきちかひに

舍利讚歎のこゝろ

2768

きえせすなつるの林のけふりにも
のこすひかりのつゆのかたみは

金光明寂勝王經王法正論品哥

國內居人盛蒙利益

2769

よもの海夜わたる月にとさしせて

くもりなきよのみかけをそしる

なき人の名をゝの／＼とりて率

都婆くやうすとて人のすゝめし

うた磐姫皇后

2770

くろかみのなかきやみちもあけぬらん

をきまよふしものきゆるあさ日に

二條后

2771

春かけてなくとりのねに雪きえて
ひかりをそへよあけほのゝそら

高津内親王

2772

木にもあらぬ竹のしたねのうきふしに
むなしきよゝをまつやさとらん

齋宮女御

2773

さそはなんかよひしことのねをそへて
むかふるにしの峯の松風

2774

廣幡御息所

うつしをくはちすのうへにみかゝなん
かきほにさけるなてしこの露

2775

在原中納言

もしほたれなけきをすまの道かへて
うき忝ふきこせゝきのうら風

2776

小野宰相

なく涙わかれは雨とふりぬとも
まことのみちにかへれとそ思

衣通王

2777

紫のくもまにけふやむかふらん
まちにはまたぬこゝろかよはゝ

大伴坂上郎女

2778

心うきさとゝしりにしこひなれは
輪廻の霞いまやはるらん

中務

2779

しのふらんなみたにくもるかけなから
さやかにてらせありあけの月

文治之比殷富門院大輔天王寺にて

十首哥よみ侍しに

非尺教題依
追書入在奥

月前念佛

2780

西をおもふなみたにそへてひくたまに
ひかりあらはす秋のよの月

草庵忘歸

2781

とまりなんくるれはやとるつゆのまも
をき所なき身はかくれけり

曉天懷舊

2782

しらさりつ身は在明のつきもせず
昔になしてしのふへしとも

薄暮觀身

2783

きえはてむ煙のはてとなかむれと

猶あともなきゆふくれのくも

旅宿浪聲

2784

おとろかし夢の枕による浪も

こゑこそかはれ袖はなれにき

船中述懷

2785

あさなきのふなてにたにもわすれはや

くかにしつめる秋の心を

2786

猷離穢土

にこり江に猶しもしつむあしのねの
猷ふしのみしけきころ哉

2787

欣求淨土

思哉さきちる色をなかめても
さとりひらけん花のうてなを

2788

掬龜井水言志

もろ人のむすふちきりはわするなよ
かめ井の水にこうはへぬとも

於難波精舎卽事

2789

ふきはらへ心のちりもなにはかた
きよきなきさのゝりのうら風

遁吉のよしきゝて家長朝臣

(2790)

すみそめの袖のかさねてかなしきは
そむくにそへてそむく吉中

返し

2790

いける吉にそむくのみこそうれしけれ
あすともまたぬおいのいのちは

(2791)

おなし時按察入道

君かいるまことのみちの月のかけ
ゆめと見し舌をいまやてらさん

返し

2791

やみふかきうきよのゆめのさめぬとて
てらさはうれしありあけの月

異体字一覧（出現順）

本文に用いた異体字を以下に掲げる。スラッシュ記号のあとに通行の字体を示した。

關／関	焮／秋	涼／涼	富／富	猷／厭
哥／歌	槁／橋	叡／最	鶴／鶴	
廿／廿	蟬／蟬	廻／廻	土／土	
忝／世	高／高	杻／杉	翠／翠	
峯／峰	鶯／鶯	盃／椀	京／京	
卯／卯	陰／陰	舘／舘	回／因	

あとがき

京都冷泉家に秘蔵されてきた『拾遺愚草』定家自筆本は、昭和十五年、『藤原定家全歌集』（冷泉為臣編・文明社刊）に初めて翻刻して収められました（昭和四十九年、国書刊行会により復刻）。定家の遺した和歌のほぼ全てを収録して通し番号を付け、定家研究の礎を据えた貴重な書物です。ところが、平成の世になって朝日新聞社から出版された自筆本の影印版と読み比べてみると、非常に多くの誤りがあることに気づきます。ほとんどページを繰る毎に誤字あるいは誤植が見い出される程です。自筆本に基づく、より正確なテキストの刊行が待たれましたが、いつまで経っても出版のニュースを聞きません。そこで私は自筆本影印版から

新たに電子テキストを作成し、長年これを『拾遺愚草』正篇を玩索する料としてきました。そのテキストをもとに、他本と校合し、校正を重ね、電子書籍化したのが本書です。

本書の校訂においては、数多くの書物やウェブページを参照させて頂きましたが、特に渋谷栄一氏運営のウェブサイト「藤原定家の著作と平安朝古典籍の書写校勘に関する総合データベース」(<http://www.takachihoh.ac.jp/~eshibuya/kenkyukai.html>)よりダウンロードした「拾遺愚草」翻刻テキスト(ver.1-1-2)に大きな恩恵を被りました。作成者の渋谷栄一氏に深謝申し上げます。

平成二十五年正月十三日 水垣久

拾遺愚草 ― 藤原定家自筆本による ―

平成二十五年正月十三日初版発行

校訂者 水垣 久

発行者 水垣 久

発行所 やまとうた e ブックス

<http://www.asahi-net.or.jp/~sg2h-ymst/yamatouta/>

blog <http://yamatouta.asablo.jp/blog/>

mail mizukaki@j.email.ne.jp

©2013 Hisashi Mizukaki
